京都市内遺跡発掘調査概報

平成13年度

鳥羽離宮跡第144次調査

平 安 宮 宮 内 省 跡

栢 ノ 杜 遺 跡

2002年３月

京 都 市 文 化 市 民 局

ごあいさつ

京都は，世界に誇る貴重な歴史遺産に恵まれた大都市であります。市内の埋蔵文化財包蔵地には，年代ごとに幾層にもわたり積み重ねられた歴史の重みをもつ遺跡が数多く存在しております。

これらは，我が国の歴史や文化の成り立ちを知ることができる国民共有の財産であり，将来にわたって保存していかなければなりません。

近年，土木工事等による開発行為は，これらの埋蔵文化財に少なからず影響を及ぼしておりますが，こうした状況の中で，保存と開発との調整を適切に行い，先人から引き継いだ貴重な財産を後世に伝承していくことが，現代に生きる私たちに課せられた責務であります。

さて，この度，平成13年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の結果をまとめた概要報告書を作成致しました。調査のうち，試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し，発掘調査及び立会調査は，財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託し実施したものであります。

各調査の実施に当たりまして，御理解と御協力を賜りました市民の皆様をはじめ，御指導・御助言を賜りました関係機関の皆様に深く感謝申し上げますとともに，本報告書が京都の歴史を知るための一助として，お役に立てば幸いに存じます。

平成14年３月

京都市文化市民局長

中野　代志男

例　　言

1　本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した文化庁国庫補助事業による平成13年度の京都市内遺跡発掘調査報告である。

2　調査地は、下記のとおりである。

Ⅰ　鳥羽離宮跡第144次調査　京都市伏見区竹田中内畑町４番地

Ⅱ　平安宮宮内省跡　京都市上京区竹屋町通千本東入主税町1254

Ⅲ　栢ノ杜遺跡　京都市伏見区醍醐柏森町31の１、31の３

3　本書の執筆分担は以下のとおりである。

Ⅰ－１・２・３（２)(３)・４南出俊彦、Ⅰ－３（１）小谷　裕・小森俊寛、Ⅱ－田中利津子、Ⅲ－小森

4　整理作業および本書の作成には、上記執筆者の他に以下の者が参加した。

本弥八郎、吉村正親、能芝妙子

5　本書に使用した写真の撮影は、主に村井伸也・幸明綾子が担当し、遺構の一部は現場担当者が行なった。

6　本書で使用した土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』に準じた。

7　測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用した。調査における測量基準点の設置は、宮原健吾が行なった。本書中で使用した方位及び座標の数値は、平面直角座標系Ⅵによる。また、標高はＴ．Ｐ．（東京湾平均海面高度）による。

8　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画図（城南宮、聚楽廻、石田、縮尺1/2,500）を調整したものである。

9　本書の編集は、小森が行ない、能芝が参加した。

本　文　目　次

Ⅰ　鳥羽離宮跡第144次調査

1　調査経過……1
2　遺　　構……2
3　遺　　物……4
（1）土器・陶磁器類……6
（2）瓦　　類……15
（3）銭　　貨……23
4　ま と め……24

Ⅱ　平安宮宮内省跡

1　調査経過……25
2　遺　　構……26
（1）層　　序……26
（2）遺　　構……27
3　遺　　物……30
（1）土 器 類……31
（2）瓦　　類……33
4　ま と め……37

Ⅲ　栢ノ杜遺跡

1　調査経過……39
2　地層と遺構……41
3　遺　　物……46
4　遺跡復元概念図について……48
5　ま と め……50

報告書抄録……52

図　版　目　次

図版１　鳥羽離宮跡第144次調査　遺跡
第１・２・３面遺構実測図（１：100）
図版２　鳥羽離宮跡第144次調査　遺跡
調査区東壁層位実測図　（１：40）
図版３　鳥羽離宮跡第144次調査　遺跡
井戸４～７　平面・立面実測図　（１：40）
図版４　鳥羽離宮跡第144次調査　遺跡
１　第１面（北から）
２　第２面（北から）
図版５　鳥羽離宮跡第144次調査　遺跡
１　第３面（北から）
２　第２面柱穴18柱根検出状況（西から）
３　第２面柱穴14根石検出状況（西から）
図版６　鳥羽離宮跡第144次調査　遺跡
１　井戸５（北から）
２　井戸７（西から）
３　井戸４（東から）
４　井戸６（西から）
図版７　鳥羽離宮跡第144次調査　遺物
１　溝６出土土器・陶磁器
２　溝４出土土器・陶磁器
図版８　鳥羽離宮跡第144次調査　遺物
１　溝状遺構１出土土器・陶磁器
２　溝状遺構１出土土器・陶磁器
図版９　鳥羽離宮跡第144次調査　遺物
１　溝状遺構１出土土器・陶磁器
２　溝状遺構３出土土器・陶磁器
図版10　鳥羽離宮跡第144次調査　遺物
出土軒丸瓦
図版11　鳥羽離宮跡第144次調査　遺物
出土軒平瓦
図版12　鳥羽離宮跡第144次調査　遺物
出土軒平瓦

図版13　鳥羽離宮跡第144次調査　遺物
出土丸瓦
図版14　鳥羽離宮跡第144次調査　遺物
出土丸瓦
図版15　鳥羽離宮跡第144次調査　遺物
出土平瓦
図版16　鳥羽離宮跡第144次調査　遺物
出土平瓦
図版17　平安宮宮内省跡　遺跡
1　調査前風景（北から）
2　第１面全景（南から）
図版18　平安宮宮内省跡　遺跡
1　第２面全景（北東から）
2　平安時代後期整地層（東から）
図版19　平安宮宮内省跡　遺跡
1　第３面全景（東から）
2　溝17（南西から）
図版20　平安宮宮内省跡　遺物
出土軒瓦・鬼瓦
図版21　栢ノ杜遺跡　遺跡
1　全景東半（北東から）
2　全景西半（西北から）
図版22　栢ノ杜遺跡　遺跡
1　東西トレンチ下段部全景（西南から）
2　東西トレンチ下段部東半　南壁（北から）
図版23　栢ノ杜遺跡　遺跡
1　下段　北グリッド全景（南南西から）
2　下段　南グリッド全景（南西から）
図版24　栢ノ杜遺跡　遺跡
1　上段　南北トレンチ南部（北北西から）
2　上段　南北トレンチ全景（北から）
図版25　栢ノ杜遺跡　遺跡
1　上段　南北トレンチ北部　東拡張区全景（北から）
2　東西トレンチ上段部（東北東から）
図版26　栢ノ杜遺跡　遺物
出土遺物

挿　図　目　次

図１　調査地位置図（１：5,000）…… 1
図２　調査区位置図（１：2,000）…… 2
図３　既調査地との関連（１：1,000）…… 3
図４　溝６出土土器実測図（１：４）…… 6
図５　溝４（Ｂ）出土土器実測図（１：４）…… 7
図６　溝４（Ａ）出土土器実測図（１：４）…… 7
図７　溝状遺構１（下層Ｂ）出土土器実測図（１：４）…… 8
図８　溝状遺構１（下層Ａ）出土土器実測図（１：４）…… 8
図９　溝状遺構１（中層Ｆ）出土土器実測図（１：４）…… 8
図10　溝状遺構１（中層Ｅ）出土土器実測図（１：４）…… 9
図11　溝状遺構１（中層Ｄ）出土土器実測図（１：４）……10
図12　溝状遺構１（中層Ｃ）出土土器実測図（１：４）……10
図13　溝状遺構１（中層Ｂ）出土土器実測図（１：４）……11
図14　溝状遺構１（中層Ａ）出土土器実測図（１：４）……12
図15　井戸５水溜内出土土器実測図（１：４）……12
図16　溝状遺構１（上層Ｄ）出土土器実測図（１：４）……13
図17　溝状遺構１（上層Ｃ）出土土器実測図（１：４）……13
図18　溝状遺構１（上層Ｂ）出土土器実測図（１：４）……13
図19　溝状遺構３出土土器実測図（１：４）……14
図20　溝状遺構１（上層Ａ）出土土器実測図（１：４）……14
図21　井戸７井筒内出土土器写真・実測図（１：４）……14
図22　出土軒瓦拓影・実測図（１：４）……17
図23　出土軒瓦拓影・実測図（１：４）……18
図24　出土丸瓦拓影・実測図（１：４）……19
図25　出土丸瓦拓影・実測図（１：４）……20
図26　出土平瓦拓影・実測図（１：４）……21
図27　出土平瓦拓影・実測図（１：４）……22
図28　出土銭貨拓影（１：１）……23
図29　調査地位置図（１：5,000）……25
図30　西壁断面・セクション断面図（１：50）……26
図31　第１面遺構平面図（１：100）……27
図32　第２面遺構平面図（１：100）……28

図33　第３面遺構平面図（１：100）……29
図34　土壙12・15断面図（１：40）……29
図35　出土土器・陶磁器実測図（１：４）……32
図36　出土軒瓦（平安時代）拓影・実測図（１：３）……35
図37　出土軒瓦・鬼瓦（安土・桃山時代）拓影・実測図（１：３）……36
図38　調査地位置図（１：5,000）……39
図39　調査区位置図（１：400）……40
図40　東西トレンチ下段西部　南壁断面図（１：200）……41
図41　東西トレンチ北壁断面図、南北トレンチ東壁断面図（１：200）……42
図42　下段北グリッド平面図（１：100）……44
図43　上段南北トレンチ東拡張区平面図（１：100）……45
図44　下段南グリッド平面図（１：100）……45
図45　下段南グリッド出土遺物実測図（１：４）……47
図46　栢ノ杜遺跡復元概念図（１：850）……49

表　目　次

表１　出土銭貨……23

Ⅰ．鳥羽離宮跡第144次調査

1．調査経過

調査地は、伏見区竹田中内畑町４に所在し、北を名神高速道路、西に油小路通、東には近畿日本鉄道京都線、南に新城南宮道羽束師墨染線などの主要幹線道路、私鉄線に囲まれている。現在の景観は、真言宗智山派安楽寿院、北向山不動院、浄土宗知足山光照寺などの寺院、鳥羽天皇安楽寿院陵、近衛天皇安楽寿院南陵、白河天皇成菩提院陵などの陵墓や、公的施設である特別養護老人ホーム「城南ホーム」がある他は、マンションや民家などの住宅地を呈している。

この地にマンション建設が計画されたため、新築工事に先立って発掘調査を行なうこととなった。調査地は鳥羽離宮跡東殿の北西部に推定されている。この付近では71次調査[註1]、77次調査[註2]、94次調査[註3]、130次調査[註4]、136次調査[註5]、141次調査[註6]などが行なわれており、弥生時代から飛鳥時代、平安時代から近世にわたる遺構・遺物が多数検出されるなど、質・量ともに豊富で良好な成果を上げている。

今次の調査は、弥生時代から飛鳥時代に属する鳥羽遺跡および平安時代に営まれる鳥羽離宮跡東殿関連施設の確認、中世以降の遺跡の変遷を把握することを目的とした。

図１　調査地位置図（1：5,000）

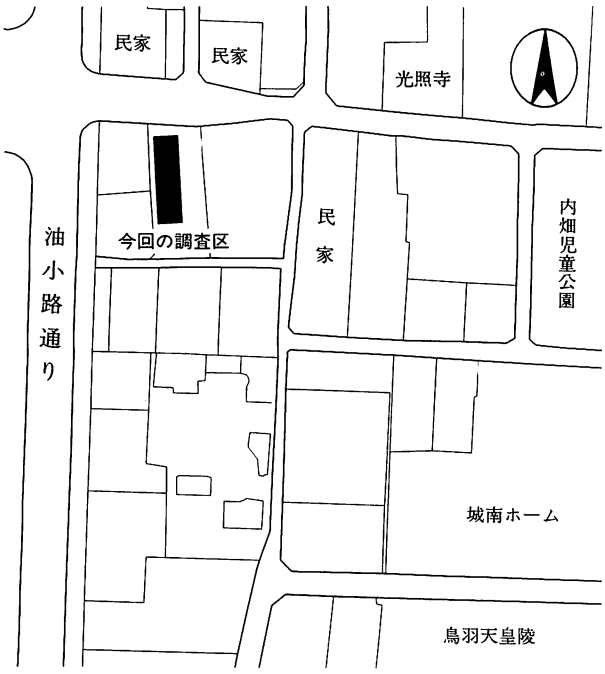


図２　調査区位置図（1：2,000）

調査は排土置き場を確保するため建物建築範囲内西寄りに東西5.5m、南北22mの調査区を設定した。重機によって土を現地表下1.1mまで排除し、排土は場外へ搬出した。重機掘削後に検出した面を第１面とし、調査を開始した。それ以後は堆積土層および遺構を掘下げた排土は場内処理した。

調査の結果、平安時代後期から江戸時代にわたる井戸跡、溝跡、土壙跡、柱穴跡など多数の遺構を検出した。これらの写真撮影および実測などの記録を行ない、さらに東壁沿いに調査区を設定し下層遺構の調査、記録作成、埋め戻しを行ないすべての現場作業を終了した。

２．遺　　構

調査区の基本層位は現代盛土層、灰黄褐色砂泥層、黒褐色砂泥層～暗灰黄色砂泥層、褐灰色砂礫層、暗青灰色粘土層の順である。褐灰色砂礫層、暗青灰色粘土層は地山である（図版２）。今次調査した主要な遺構は暗灰黄色砂泥層で検出したものである。

（１）　第１面の遺構（図版１・４）

溝状遺構１　調査区北端部で南肩部を検出している。北肩部は当調査区の北側で行なわれた区画整理に伴う調査（94次調査）で検出されていないことから、さらに北へと展開してゆくと考えられる。検出時の幅は4.4m、深さ30～45cmである。遺構は西側で溝状遺構３東肩と接している。

溝状遺構２　南半部で検出した東西方向の遺構である。最大幅約1.9m、深さ約20cmで調査区内で完結している。

溝状遺構３　西壁際で検出した、南北に縦断する遺構である。今調査では東肩部を検出しており西肩部は調査区外へ展開している。深さは30～70cmである。遺構の北部では溝状遺構１の南肩部と接している。

これらの遺構は室町時代後期の属すると考えられる。しかし、溝状遺構１などの成立期は平安時代末期から鎌倉時代初頭に遡る可能性が大きい。

（２）　第２面の遺構（図版１・３・５・６）

井戸４　掘形東側は調査区外のため平面形は不明であるが、円形を呈しているとみられる。掘形の直径1.45m以上、検出面からの深さ1.5mである。井戸枠は10～20cm程度の礫を積み上げ石組みとしている。井戸底中央東寄りに長さ約20cmの縦板を円形に組んだ水溜を設置している。

井戸５　東側を近現代に機能していた井戸に切られているために平面形は明らかでないが、円

形を呈しているとみられる。掘形の直径1.08m、検出面からの深さは1.24mである。井戸枠は縦板で形成している。検出時は板材が5枚残されており、残存状況から縦板を多角形に組み、双方の板の合わせ目を釘で止めていたものと考えられる。井筒底には井戸4同様に長さ約20cmの縦板を円形に組んだ水溜が設置されている。水溜は土圧によって変形しているが直径44cmである。

井戸6　平面形は隅丸方形を呈し、掘形の一辺1.5m、検出面からの深さ1.12mである。井戸枠は20cm前後の礫を積み上げて形成している。井戸の断面形状はすり鉢形を呈している。井戸上部は溝状遺構1で崩されている。

井戸7　平面形は不整円形を呈している。掘形の直径1.2m、検出面からの深さ1.5mである。井戸枠は瓦を小口積みにし、円筒形に積んでいる。井戸の上部は溝状遺構3を掘削した際に削られたとみている。

井戸4～6は鎌倉時代末頃から室町時代初頭に機能していたとみている。井戸7は室町時代に機能していたとみている。

今調査でも既調査と同様に、柱穴を多数検出した。これらの柱穴は第2・第3面でみられるが柱穴同士の重複が多数に渡るのと調査面積が狭く、部分的検出にとどまっており、建物の復元までに至っていない。ここでは遺存状況の良好なものの概略を述べる。

柱穴14　平面形は隅丸方形状を呈しており、長径41cm、短径32cm、検出面からの深さ33cmを測る。柱根は遺存していなかったが、柱を取り囲むようにして径5～10cmの石が数個置かれているのを確認している。

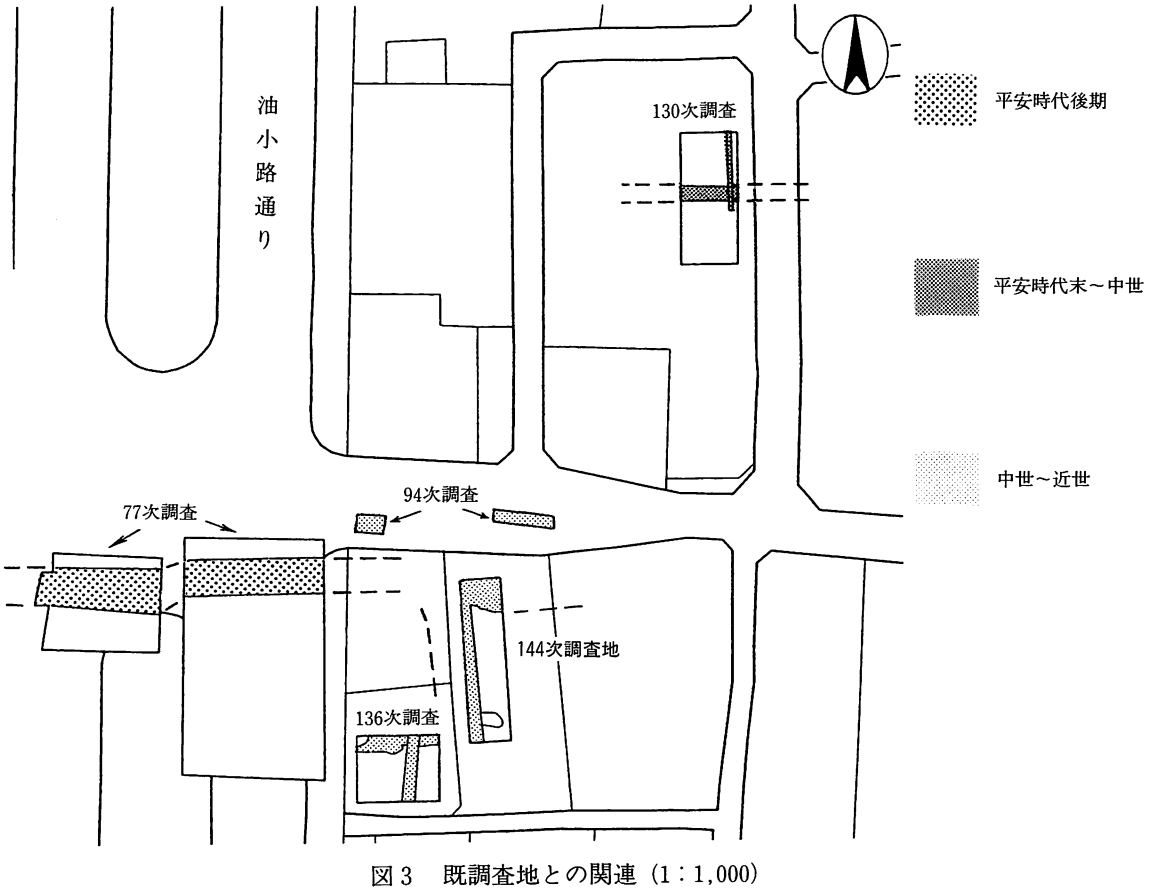


図3　既調査地との関連（1：1,000）

柱穴18　平面形は円形を呈しており、直径41cm、検出面からの深さ62cmを測る。掘形中央部に柱根が遺存していた。柱根の直径は10cm、残存長は54cmである。

柱穴19　平面形は柱穴の南部が後世の遺構で削られており明確ではないが不整円形とみられる。長径60cm、短径40cm以上、検出面からの深さ25cmを測る。掘形内は根石が据え置かれている。

溝4　調査区中央部で検出した。長さは12m、幅50cm、検出面からの深さ20cmである。溝の南端は調査区内で完結しているが、北端部は井戸6に接している。

（3）　第3面の遺構（図版1・5）

柱穴85　平面形は楕円形を呈している。長径30cm、短径27cm、検出面からの深さは15cmを測る。掘形内には長方形を呈した根石が平らな面を上にして据え置かれている。

柱穴86　平面形は柱穴の北半部分を後世の遺構で切られているが、不整円形を呈しているとみられる。長径30cm以上、短径35cm、検出面からの深さは23cmを測る。掘形内には上下2段に根石が遺存している。

溝6　溝状遺構1の底面から検出している。調査の最終段階で検出したため、詳細を明らかにはできなかったが、溝状遺構の最下層の可能性が高い。検出面からの深さは15cmである。

柱穴14・85は室町時代前期頃の遺構とみている。柱穴18は鎌倉時代末頃、柱穴19は室町時代後期に属するとみられる。柱穴86は遺物の出土がみられなかったので時代を特定できない。

3．遺　　物

今回の発掘調査によって出土した遺物には、多数を占める土器・陶磁器類と瓦類の他に、木製品・石製品・銭貨を主とした金属製品など各種のものが認められる。ここでは、まず遺物の出土状況とその様相について概述する。

平安時代より以前の遺物は、古墳時代前期の古式土師器と見られる土器片等が溝状遺構3の堆積土への混入品として極少数が出土しているにすぎない。遺構等に直結するものではないが、当地を含む近辺地域に同期の遺跡が存在したことを示唆する資料ではある。

平安時代前期から中期に比定できる遺物は、土師器坏、緑釉陶器陰刻花文椀、灰釉陶器椀、などが少数出土している。これらも溝状遺構1～3等の新しい時期の遺構への混入品として出土したにとどまる。この時代には、土地利用の密度は、まだかなり低いものであったと考えられる。

多数の瓦を含む平安時代後期の遺物は、それ以前の遺物に比べると出土量が明確に増加する。しかし、これらも大半が新しい時期の遺構への転用的再利用（瓦類が井戸7の井筒等に転用されている）や混入品として出土している状況であり、同期の遺構等に伴う形での出土はほとんど見られなかった。当調査地が、平安時代後期に当地域の様相を大きく変化させる鳥羽離宮跡（鳥羽殿）の中心地から、少しはずれた北部に位置していることによるものと考えられる。

土器・陶磁器類を主とした遺物が、遺構や土層に伴うかたちで出土量が大きく増加するようになるのは、平安時代後期の末から鎌倉時代初頭以降である。このような遺構及び遺物の大きな変化は、当地近辺地域の土地利用の歴史的画期を示していると理解される。中世から近世の遺物は、

今回の調査によって各種の遺構内や土層から一括出土品を含めて数多く出土している。

鎌倉時代から室町時代前半期の遺物は、溝状遺構１～３、溝４・６、井戸４～６等の同時代に比定できる遺構内から多数出土している。この時期の遺物は、土師器皿、瓦器椀・皿などの土器食器類を中心にして、輸入陶磁器の食器や壺、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕・擂鉢、瓦器鍋・羽釜・火鉢、瀬戸・美濃系の国産施釉陶器、灰釉陶器盤、鉄釉天目茶碗など、また滑石羽釜などの石製品、漆器椀・曲物・ヘラ状の道具等の木製品、銭貨を主体とした金属品など、生活用具類が中心である。瓦器の鍋・釜には、使用時の煤が付着した状態で出土している例がかなり多く、これらの遺物はこの遺跡内で生活していた人々が、日常的に使用していた生活用具類が主体であると見てよいであろう。

室町時代後半期では、この時期の前半段階（15世紀代）に位置づけられる遺物が前後の時代に比べてやや少ない印象であるが、同期の後半段階（16世紀代）に比定できる遺物の出土量は再び増加傾向を示す。この時期の遺物は、溝状遺構１～３などから、土師器皿、瓦器鍋・羽釜・火鉢、焼締陶器擂鉢・壺・甕、国産施釉陶器・瀬戸美濃系灰釉陶器椀・皿、輸入白磁皿・青磁椀などの土器・陶磁器類の他、木製品、銭貨を主とする金属品など、各種のものが出土している。これらの遺物も、瓦器鍋・釜の煤の付着状態や擂鉢の使用痕などから見ると、鎌倉時代から室町時代前半期の出土遺物と同様に、実際に使用されていた日常生活用具類が主体をなしているものと理解してよいだろう。

当調査地から出土した中世の土器陶磁器類の様相は、輸入陶磁器がやや少なく、瓦器類がやや多いなど若干の差異も認められるが、種類の構成や常に同型式（京域主流）の土師器食器類が高率を占めている点など、基調は京域内出土資料に通じるものである。

また、調査面積の狭小さに反する遺物出土総量の多さ、加えて銭貨の出土量がかなり高い点などには注目すべきである。当調査地から出土している遺物類は、京域内出土資料に準じる都市的様相を示している可能性が高い。さらに比較研究を進めて、実像を正確に把握して位置付けられれば、検出遺構及び中世鳥羽遺跡の性格解明につながる重要な基礎資料となるだろう。

安土・桃山時代から江戸時代前期の近世前期の遺物は、中世遺物と同様に溝状遺構１・３等から一定量出土している。この時期の遺物には、土師器皿・焙烙・鍋・甕形羽釜、瓦器・火鉢、焼締陶器擂鉢・甕、輸入陶磁器染付椀、国産施釉陶磁器・瀬戸・美濃系、唐津・伊万里染付等の椀皿などの土器・陶磁器類及び瓦類（くすべ瓦平・丸）などが見られる。

国産施釉陶器類は、室町時代末期頃から瀬戸・美濃産を主にして増加してゆくが、江戸時代初頭頃以降には唐津が、やや遅れて伊万里の染付磁器類などが加わり、食器類の中では主要な位置を占めるようになっている。この変化は、京域内と同歩調で進展していると言える。

江戸時代中期以降に比定できる遺物も井戸１・２等から国産施釉陶磁器類や瓦類他が出土しているが、出土量は多くない。出土遺物の減少傾向が、江戸時代前期頃以降に認められ、調査方法の違いによる人為的に作り出された傾向の可能性もあるが、歴史的実態を反映している可能性の方が高いと見ている。江戸時代前期のうちに、中世以来続いてきた当地の土地利用の様相が大き

く変化していくことを示しているものと考えている。

以下では、実測図あるいは拓影や写真図版に掲載した土器・陶磁器類、瓦類、銭貨を項目別にわけて概説する。

（1） 土器・陶磁器類（図４～21、図版７～９）

土器・陶磁器類は、同じ遺構からの出土ではあっても、基本的には出土単位に基づいて図を作成している。図番号にそって出土単位別に土器・陶磁器類の概説を進める。[註7]

溝６から出土した土器・陶磁器類（図４）は、今回の調査において、遺構からまとまったかたちで出土したものとしては、最も古い段階に位置付けられる資料である。

１～21は、土師器皿である。胎土、製作技法、形態、法量等の基本的な型式要素は、京域主流に共通するものであり、京域主流の基準によって位置付けることができる。１～20は皿N形式、21は皿Ac形式（コースター形）に属し、形式的まとまりのある資料である。22～24の土師器皿は、てづくねで成形し、体部から底部外面にオサエ痕を残し、内面から口縁部外面をナデ調整で仕上げとする基本的製作技法は京域主流と同様であるが、口縁部形態等には明瞭な差異があり、胎土にも微妙な差異が認められる。京域主流とは、生産地を異にする別型式とすべきものである。このような土師器食器類を京域非主流と総称している。現時点では、22・24は乙訓産、23は南山城のいずれかの小地域産の可能性が高いと考えている。

25は楠葉産と見ている瓦器椀、27は中国華南産の青磁椀である。26瓦器鍋は蓋の受け部に幅を持ち、口縁部も開き気味ではあるが幅を持ってしっかり立ち上がっている。同形式の鍋では最古型式に属すると見てよいだろう。

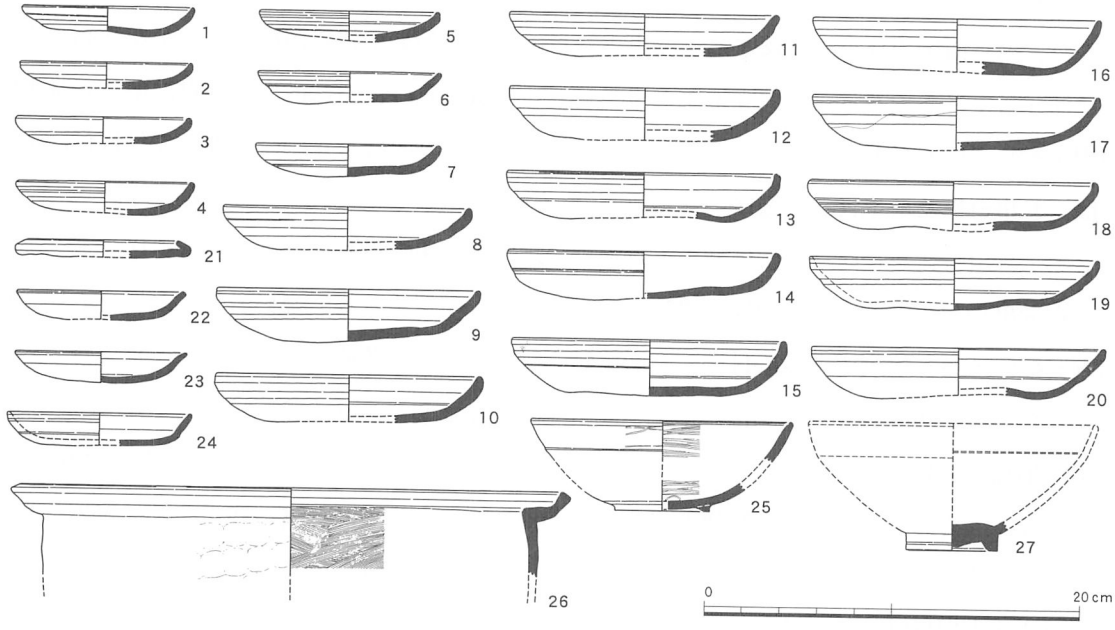


図４　溝６出土土器実測図（1：4）

１～21 土師器皿（21・コースター型）、22～24 土師器皿（京域非主流）、25 瓦器椀、26 瓦器鍋、27 輸入青磁椀

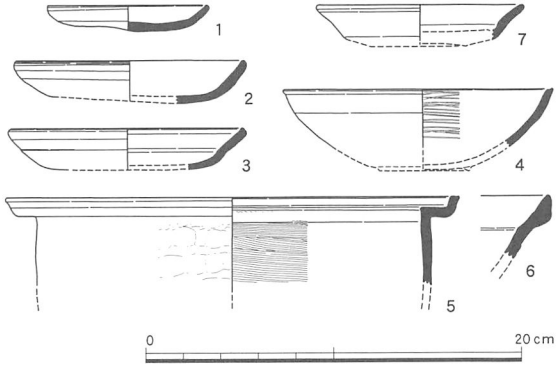


図５　溝４(B)出土土器実測図（1：4）

1～3 土師器皿、4 瓦器椀、5 瓦器鍋、6 須恵器鉢、7 輸入青磁皿

溝６からは、図示したものの他に、摂津産であろう土師器羽釜、産地の特定は難しいが土師器鍋・カマド、楠葉産と見られる三足羽釜の脚部、常滑産の焼締陶器甕片など、小片まで含めると各種の遺物が出土している。

まとまって出土した京域主流に通じる土師器皿類は、形態、法量、技法痕跡等で主体をなす型式的特徴は、京都Ⅴ期新（以下では京都をはぶく）の基準にほぼ重なるが、１・８・10・20などⅥ期的様相が、部分的ながら顕在化している個体も一定数含まれている。現状では、型式的にはⅤ期新からⅥ期古の幅に位置付けておきたい。実年代は、型式の年代観から12世紀後半代の平安時代末期から鎌倉時代初頭頃と理解しておく。

京域非主流の土師器皿及びその他の共伴出土している遺物も、大半が併存してよいと考えられるものである。しかし26瓦器鍋は、京域ではⅥ期中で数多く共伴出土するようになる形式である。この資料に関しては、溝６の埋没年代が13世紀前葉頃まで下ることを示していると理解される。

溝４（B）から出土した土器・陶磁器類（図５）は、輸入青磁皿は１～２型式古い時期からの混入品あるいは伝世的残存品であるが、その他は同時代の資料と見てよいだろう。Ⅵ期新からⅦ期古の幅の内には位置付けられ、13世紀後半代の資料と理解している。

溝４（A)(図６）からは、１～４は京域主流に共通する土師器皿類であり、１～３は皿Ｎ、４は皿Ｓ、５瓦器椀、６瓦器鍋、７瓦器羽釜、８常滑産焼締陶器壺などが出土している。５瓦器椀、６瓦器鍋は、楠葉産と見られるが７の瓦器羽釜は他産地の可能性も含めて検討が必要である。これら図示したものの他にも、土師器皿類、瓦器鍋・釜、焼締陶器甕、須恵器鉢、瀬戸産の国産施

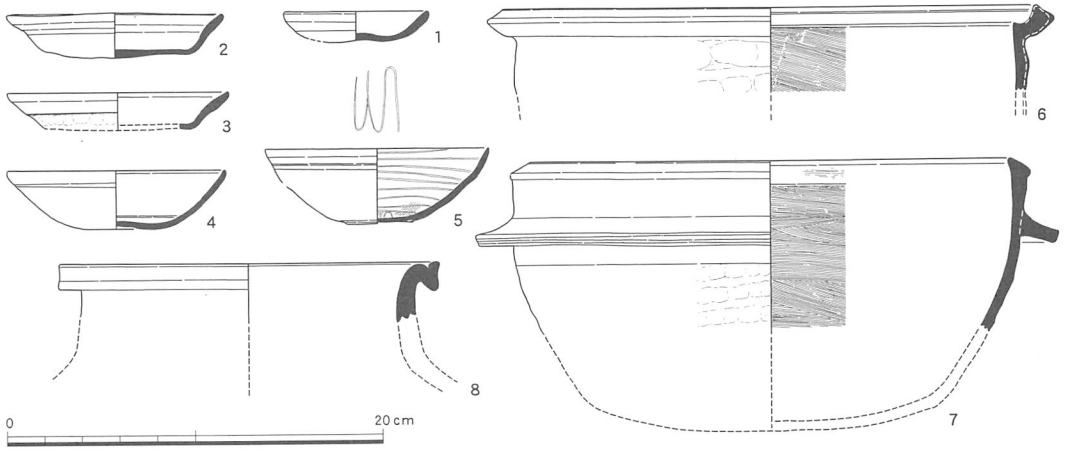


図６　溝４(A)出土土器実測図（1：4）

1～4 土師器皿、5 瓦器椀、6 瓦器鍋、7 瓦器羽釜、8 焼締陶器(常滑)壺

釉陶器灰釉椀、中国竜泉窯の輸入青磁椀など各種のものが数多く出土している。

溝４（Ａ）から出土した土器陶磁器類は、主体をなす土師器皿、瓦器鍋釜等の型式的まとまり及びその特徴と組成などからは、Ⅷ期古を中心に前後に少し幅を見込んだ位置付けが可能だろう。実年代は、室町時代前期の14世紀後半代から15世紀初頭頃に推定される。

溝状遺構１（下層Ｂ）(図７）からは、１～３土師器皿Ｎ、４中国竜泉窯の輸入劃花文青磁椀などが出土している。型式的には、Ｖ期新からⅥ期古の幅で理解しておく。平安時代後期末から鎌倉時代初頭の12世紀後半代の遺物と推定している。

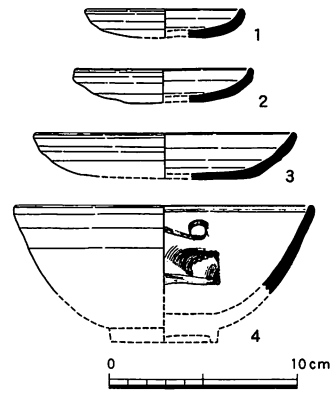


図７　溝状遺構１（下層B）
出土土器実測図（1：4）
1～3　土師器皿、4　輸入青磁椀

溝状遺構１（下層Ａ）(図８）からは、１瓦器椀、２中国華南産の輸入白磁椀などの他、土師器皿Ｎなども少数ではあるが出土してる。Ｖ期の幅で理解しており、平安時代後期の12世紀代に比定してよいだろう。

溝状遺構１（中層Ｆ）(図９）からは、１土師器皿、京域非主流であり乙訓産か、２～４土師器皿Ｎ、５土師器皿Ｓ、６・７瓦器椀、楠葉産であろうなどが出土している。他に瓦器皿・羽釜、東播産須恵器鉢、常滑産焼締陶器甕片、混入の平安時代後期瓦なども出土している。

これらの出土土器・陶磁器類は京域主流に通じる土師器皿（２～５）や、６瓦器椀等については、Ⅵ期中～新の幅で13世紀中葉頃、７瓦器椀、同羽釜、須恵器鉢などはⅦ期に属する資料と見ており、13世紀末～14世紀前半期頃に比定できる資料と考えている。

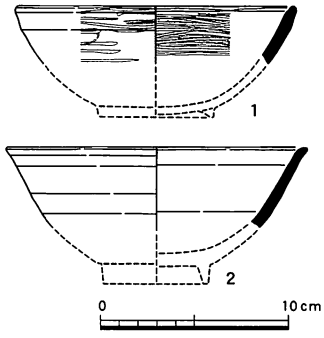


図８　溝状遺構１（下層A）
出土土器実測図（1：4）
1　瓦器椀、2　輸入白磁椀

溝状遺構１（中層Ｅ）から出土している土器陶磁器類（図10）は、大きく３時期に区分できるものが混在して出土している。

１～６土師器皿Ｎ、７瓦器皿、８瓦器椀などはＶ期中～Ⅵ期に属し、12世紀から13世紀半ば頃の時期に比定できる。他にこの時期の遺物では、輸入白磁椀・壺、滑石製の羽釜、平安時代後期瓦などが出土している。

14・15・20土師器皿Ｎ、９・10瓦器鍋、11瓦器羽釜、12瓦器盤などは、Ⅶ期古～中に属し13世紀後葉から14世紀前葉頃に比定できる。この時期の遺物では、他に瓦器椀、輸入青磁椀、東播産の須恵器鉢・甕片、常滑産の焼締陶器片などが出土している。

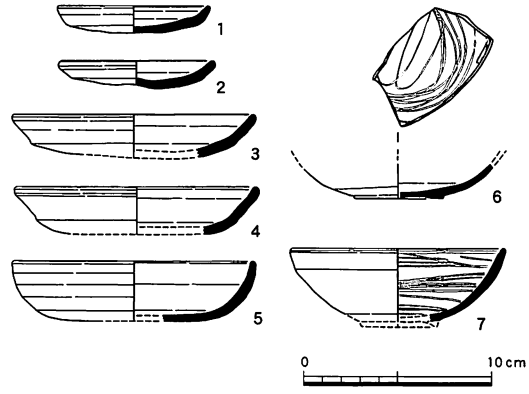


図９　溝状遺構１（中層F）出土土器実測図（1：4）
1～5　土師器皿、6・7　瓦器椀

13・16・18・19土師器皿N、17・21土師器皿S、22土師器羽釜、大和産だろう、23・24瓦器鍋、25瓦器羽釜、26須恵器鉢東播産、27焼締陶器擂鉢備前産、28国産施釉陶器盤瀬戸産などⅦ期新～Ⅷ期中に属し、14世紀中葉～15世紀前葉頃に比定できる。この時期の遺物では、他に東播産須恵器鉢、大和産瓦器鉢、常滑産だろう焼締陶器甕片などが出土している。

溝状遺構１（中層D）(図11）からは、１土師器皿、京域非主流であり乙訓産か、２～５土師器皿N、６～９土師器皿S、10瓦器椀、11瓦器鍋、椀鍋共に楠葉産であろう、などが出土している。この他土師器皿N、瓦器椀、輸入白磁壺、平安時代後期瓦などⅤ期からⅥ期の遺物も混入品として出土している。これらの内主体をなす土器類は、Ⅵ期新からⅦ期中の幅には収まるものであり、13世紀後半から14世紀前葉鎌倉時代後半期に比定できる。

溝状遺構１（中層C）(図12）からは、１・２土師器皿N、３・４土師器皿、乙訓産であろう、

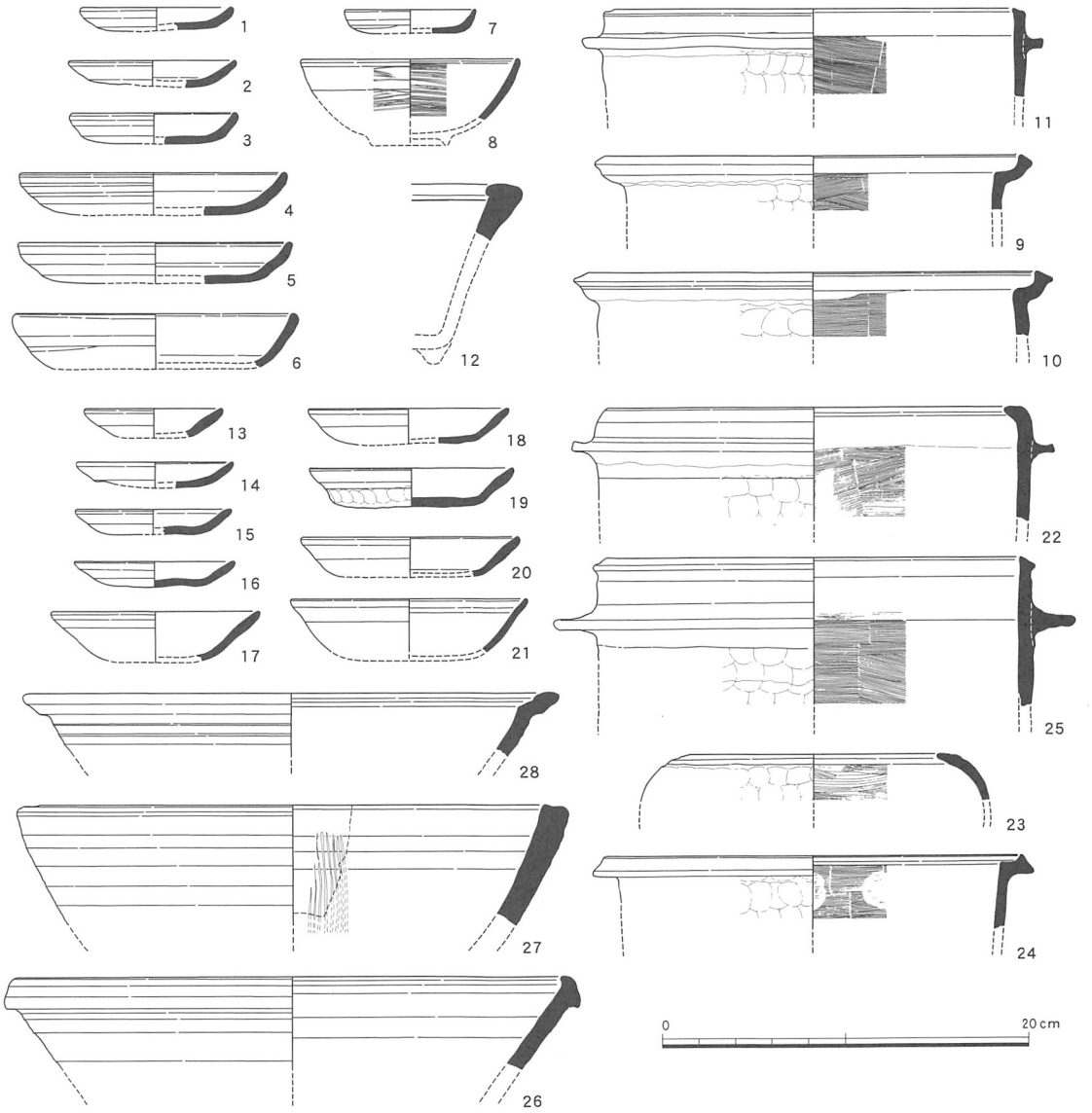


図10　溝状遺構１（中層E）出土土器実測図（1：4）

1～6 土師器皿、7 瓦器皿、8 瓦器椀、9・10 瓦器鍋、11 瓦器羽釜、12 瓦器盤、13～21 土師器皿、22 土師器羽釜、23・24 瓦器鍋、25 瓦器羽釜、26 須恵器鉢、27 焼締陶器(備前)擂鉢、28 国産施釉陶器(瀬戸・美濃、灰釉)鉢

5瓦器皿、6瓦器椀、7瓦器鍋、8・9羽釜、瓦器類は楠葉産が主、などが出土している。この他に、東播産須恵器鉢・甕、中国華南産の輸入陶磁器褐釉盤、混入品である平安時代後期瓦類なども出土している。

この資料でも中層Dと同様にⅥ期新からⅦ期中の幅に収まる鎌倉時代後半期のものが中心的である。

溝状遺構1（中層B）(図13）からは、型式的にもまとまりのある土器陶磁器類が数多く出土している。1～14土師器皿N、15～17土師器皿S、18～20瓦器椀、21瓦器小壺、22瓦器鍋、23瓦器羽釜、瓦器は楠葉産が主、24須恵器鉢東播産、25輸入青磁椀中国竜泉窯産、などが主体を成す資料である。これらの他に、瓦器盤、須恵器甕、常滑産焼締陶器甕片など主体と共伴するだろう資料及び、土師器台付皿、須恵器鉢、輸入白磁椀、平安時代後期瓦などⅤ期からⅥ期の混入品なども出土している。

主体を構成する京域主流に通じる土師器皿類は、古相を残す個体もみられるが、まとまりもありその型式的特徴からⅦ期古に属すると見てよいだろう。主体を構成する他の土器陶磁器類も、ほぼ同型式に属すると見ている。実年代は、Ⅶ期古の年代観から鎌倉時代後半期の前半段階の13世紀後葉頃に比定できる。

溝状遺構1（中層A）(図14）からは、1・2瓦器皿、3・4瓦器椀、5・6瓦器鍋、7・8瓦器羽釜、瓦器類は楠葉産が主、9・10須恵器鉢、東播産、11輸入白磁口兀皿、中国華南産など、Ⅶ期からⅧ期の13世紀後葉から14世紀の遺物が各種出土している。

他に同時代の京域主流に共通している土師器皿や瓦器椀、盤、須恵器甕片、輸入青磁椀なども出土している。また輸入白磁椀や平安時代後期瓦な

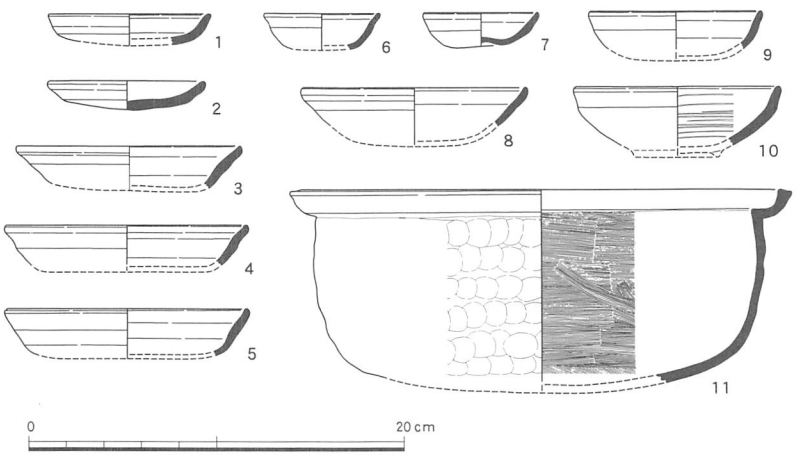


図11　溝状遺構1（中層D）出土土器実測図(1：4)

1 土師器皿(京域非主流)、2～9 土師器皿、10 瓦器椀、11 瓦器鍋

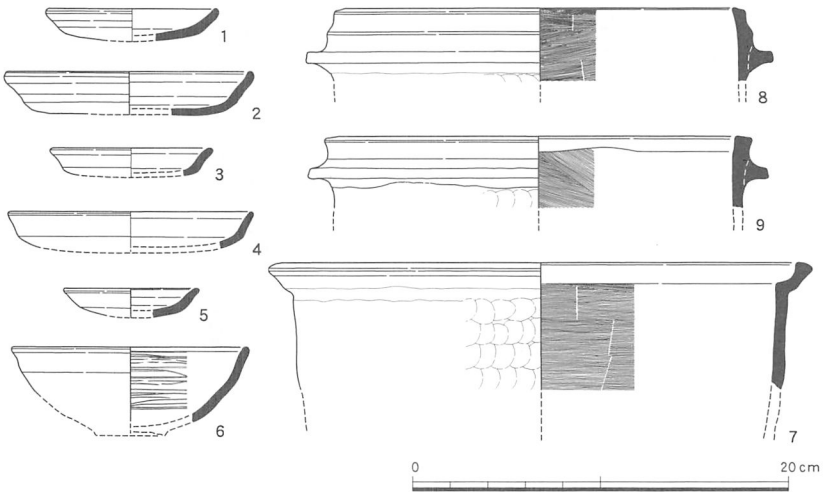


図12　溝状遺構1（中層C）出土土器実測図（1：4）

1・2 土師器皿、3・4 土師器皿(京域非主流)、5 瓦器皿、6 瓦器椀、7 瓦器鍋、8・9 瓦器羽釜

ど、Ⅴ期からⅥ期の12世紀から13世紀中葉頃の混入品と見ている資料も少なからず出土している。

井戸５水溜内（図15）から、１土師器皿類N、２鉄釉天目茶椀、瀬戸・美濃系が出土している。他に瓦器の鍋あるいは羽釜体部片、常滑産焼締陶器甕片なども出土しているが、合わせても遺物出土量は極少ない。

１土師器皿類Nは、形態的には赤褐色化した京域主流土師器皿Nによく類似している。しかし、体部立ち上がり部の内面の技法痕跡で結果形状等に微妙な差異が認められる。胎土や色調にも差異があり、京域主流の生産集団とは別の生産者の製作品と見られる。乙訓地域を含めた京近郊の在地土師器生産者が製作した写しの土師器皿と考えている。年代は、Ⅷ期中14世紀末から15世紀初頭（以降）頃と推定される。

２鉄釉天目茶椀は、京都で出土している瀬戸・美濃系の天目茶碗としては、比較的古い型式に属するものである。嵯峨の臨川寺の境内の調査地から多数まとまって出土し、瀬戸産と推定されている天目茶碗に類品が見られる。この天目茶碗については、共伴出土している土師器皿の年代観から、14世紀末～15世紀初頭から大きくは下らない時期頃には、何らかの理由で廃棄されたものと考えられる。

井戸５井筒内からは、菊花印文様を施した瓦器火鉢他、Ⅷ期～Ⅸ期の15世紀代には収まる。同井戸掘形からは、土師器皿、瓦器鍋・羽釜・火鉢、須恵器鉢、輸入白磁椀・皿、同青磁椀など、Ⅴ期からⅦ期古までの時期幅のある遺物が出土している。井戸５は、出土している土器・陶磁器の年代観からは、14世紀後半代に造られて、15世紀代の内には埋没しているものと理解される。

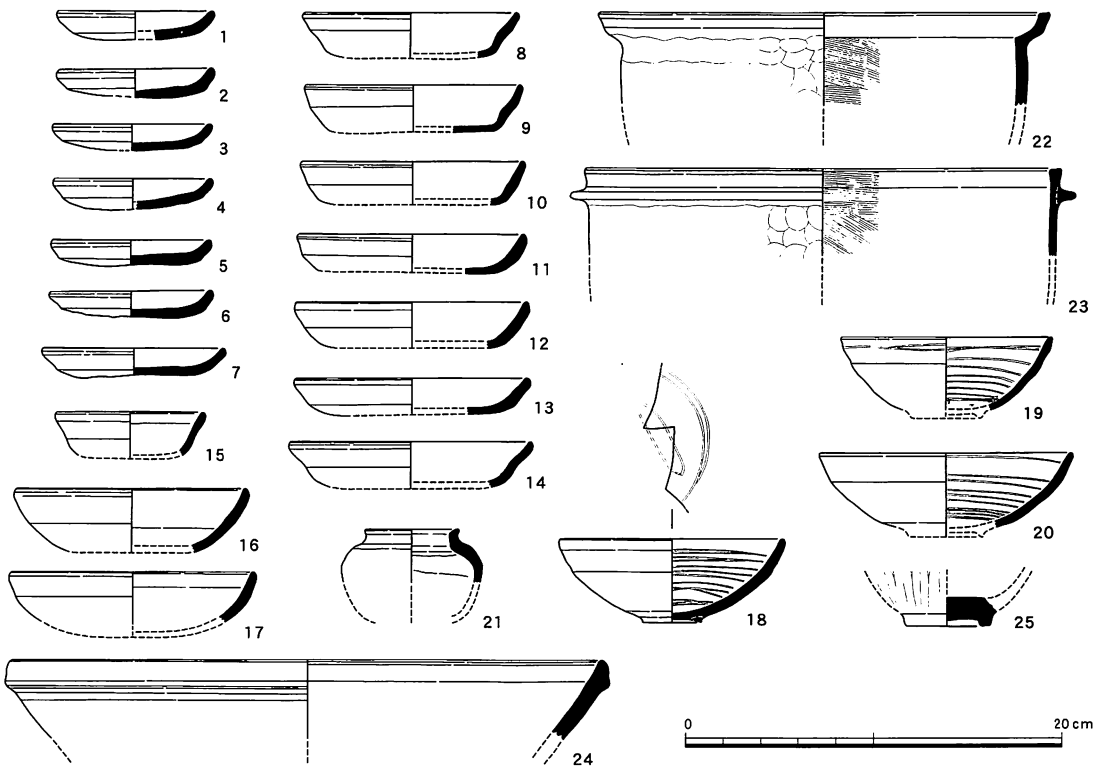


図13　溝状遺構１（中層B）出土土器実測図（1：4）

1～17 土師器皿、18～20 瓦器椀、21 瓦器小壺、22 瓦器鍋、23 瓦器羽釜、24 須恵器鉢、25 輸入青磁椀

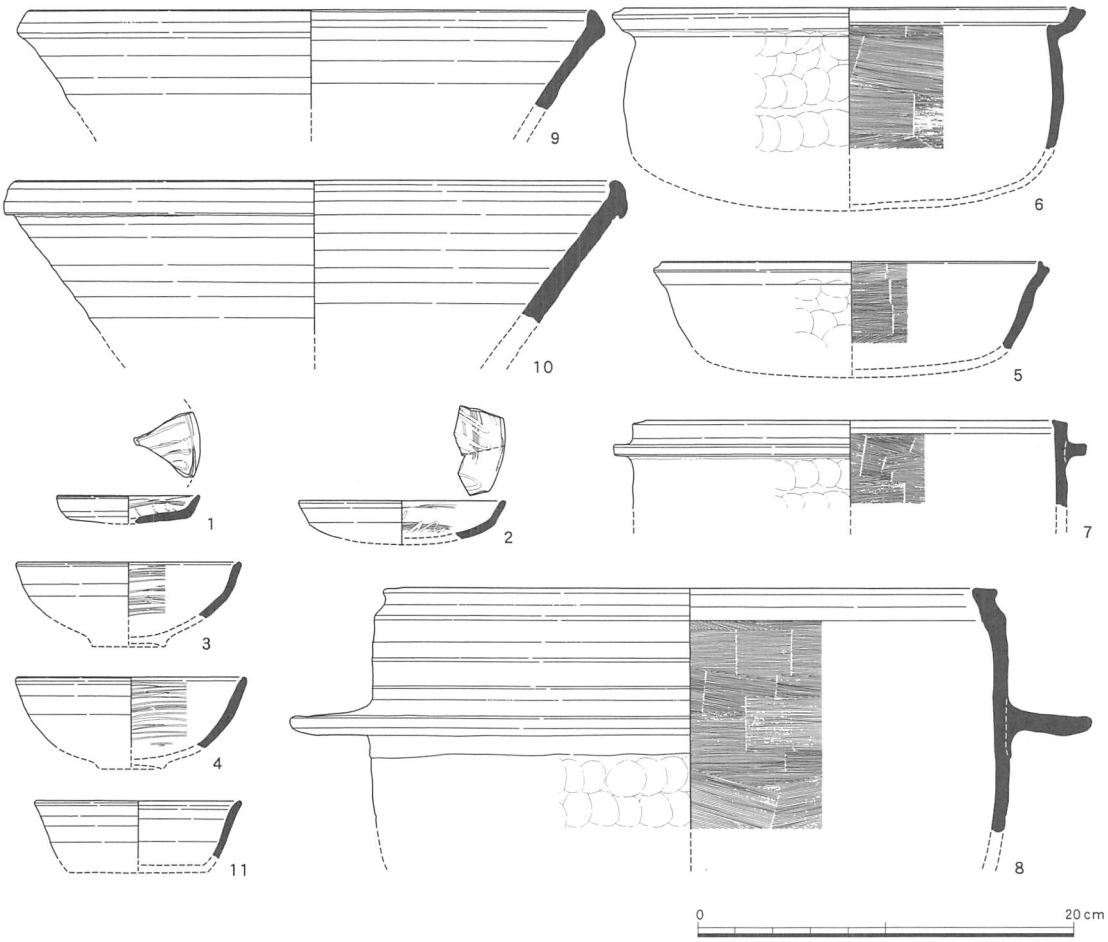


図14　溝状遺構１（中層A）出土土器実測図(1：4)

1・2 瓦器皿、3・4 瓦器椀、5・6 瓦器鍋、7・8 瓦器羽釜、9・10 須恵器鉢、11 輸入白磁皿(口兀)

溝状遺構１（上層D)(図16）からは、１土師器皿Nr、２土師器皿S、３瓦器羽釜、４焼締陶器鉢、信楽産、５国産灰釉陶器、瀬戸・美濃産などが出土している。５灰釉陶器はⅨ期の15世紀代からの混入品の可能性もあるが、他はⅩ期古～中の幅には収まる資料であり、16世紀前半代に比定できる。

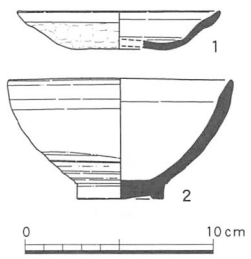


図15　井戸５水溜内出土土器実測図（1：4)

1 土師器皿、2 国産施釉陶器(瀬戸・美濃・灰釉)天目茶椀

溝状遺構１（上層C)(図17）からは、１瓦器火鉢、大和産、２焼締陶器鉢、信楽産、３・４輸入青磁椀、中国竜泉窯系他土師器皿などが出土している。Ⅹ期の幅には収まる資料であり、上層Dとほぼ同時期の遺物であるが、新しい方へやや幅を持たせて見ておき、16世紀代へ比定しておく。

溝状遺構１（上層B)(図18）からは、１土師器皿Sa、２焼締陶器信楽擂鉢の他、焼締陶器備前甕、瓦器火鉢、くすべ瓦などが出土している。Ⅹ期新からⅩ期古の幅には収まるものが主であり、16世紀代後半期に比定しておく。

溝状遺構３（図19）からは、時期による濃淡があり空白的時期もあるが、平安時代後期の12世紀代から江戸時代前期の17世紀代に渡る各時期の各種の遺物が数多く出土している。図示した資料は、量もありまとまりもある内でもっとも新しい時期に位置付けられる一群の中の代表的なも

のである。これらより新しい17世紀代の資料は極少量であり、溝内埋土最上層からの出土遺物と理解している。図示した資料は、1～5土師器皿Nr、6～15土師器皿S、16土師器小鉢、17・18土師器小壺（つぼつぼ）、19土師器焙烙、大和産、20瓦器香炉、大和産、21・22焼締陶器、21浅鉢、22擂鉢、両者とも信楽産、23・24国産施釉陶器、23灰釉皿、24鉄釉天目茶碗、両者とも美濃・瀬戸産などである。これら他に、同時期と見られる資料には、大和産の土師器甕形羽釜や瓦器火鉢・鉢、焼締陶器信楽甕、同備前産擂鉢・甕、中国明代の輸入染付磁器椀・皿などが認められる。

これらは、土師器皿類や他の土器・陶磁器類の型式的特徴とそれらの組成等から、Ⅹ期新（新相）～Ⅺ期古（古相）の幅には収まるものと見ており、16世紀後葉頃に比定できるだろう。

今回は図示しなかったが、溝状遺構1・2などからも、16世紀後葉頃に位置付けられる土器・陶磁器類が数多く出土している。溝状遺構1～3等は、この時期にはかなり埋没が進んでいたものと考えられる。

溝状遺構1（上層A）（図20）から出土したⅪ期新～Ⅻ期古で17世紀中葉から17世紀後半代に比定できる資料の内、1国産施釉陶器鉄釉擂鉢を1点だけだが掲載した。17世紀前半代から後半代の土器陶磁器類は、他にも溝状遺構1・3から、京域主流に共通する土師器皿や国産施釉陶磁器の伊万里染付椀・鉢などが一定量出土している。これら17世紀代の資料は、両遺構の埋没年代の下限を示すものと見ている。

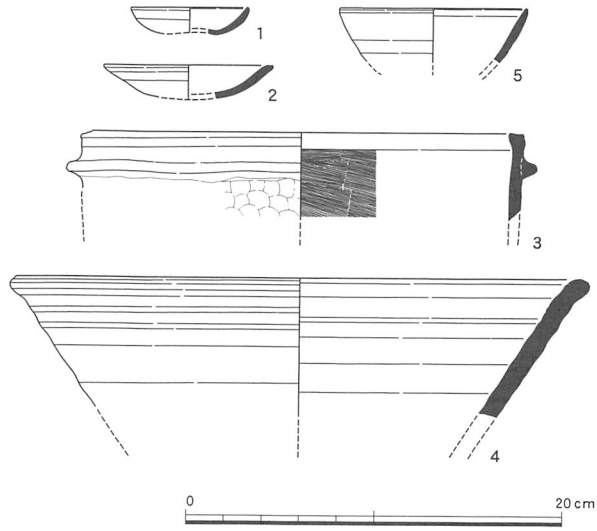


図16　溝状遺構1（上層D）出土土器実測図（1：4）
1・2 土師器皿、3 瓦器羽釜、4 焼締陶器（信楽）鉢、5 国産施釉陶器（瀬戸・美濃・灰釉）椀

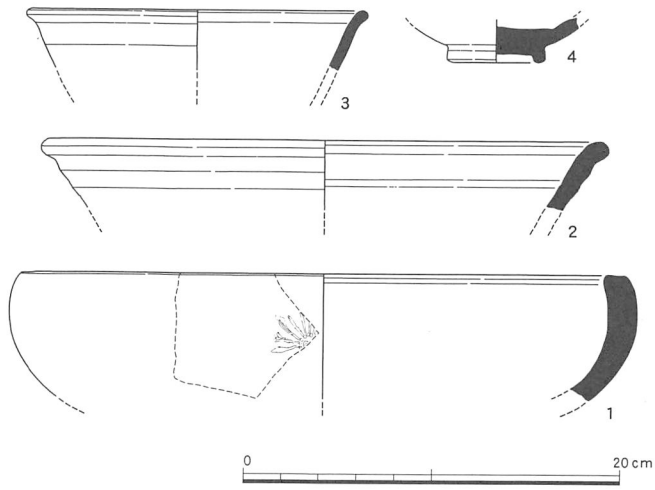


図17　溝状遺構1（上層C）出土土器実測図（1：4）
1 瓦器火鉢、2 焼締陶器（信楽）鉢、3・4 輸入青磁椀

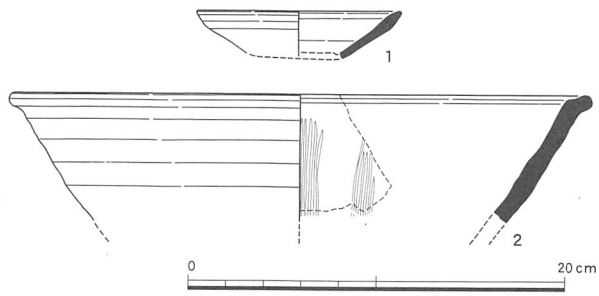


図18　溝状遺構1（上層B）出土土器実測図（1：4）
1 土師器皿、2 焼締陶器（信楽）擂鉢

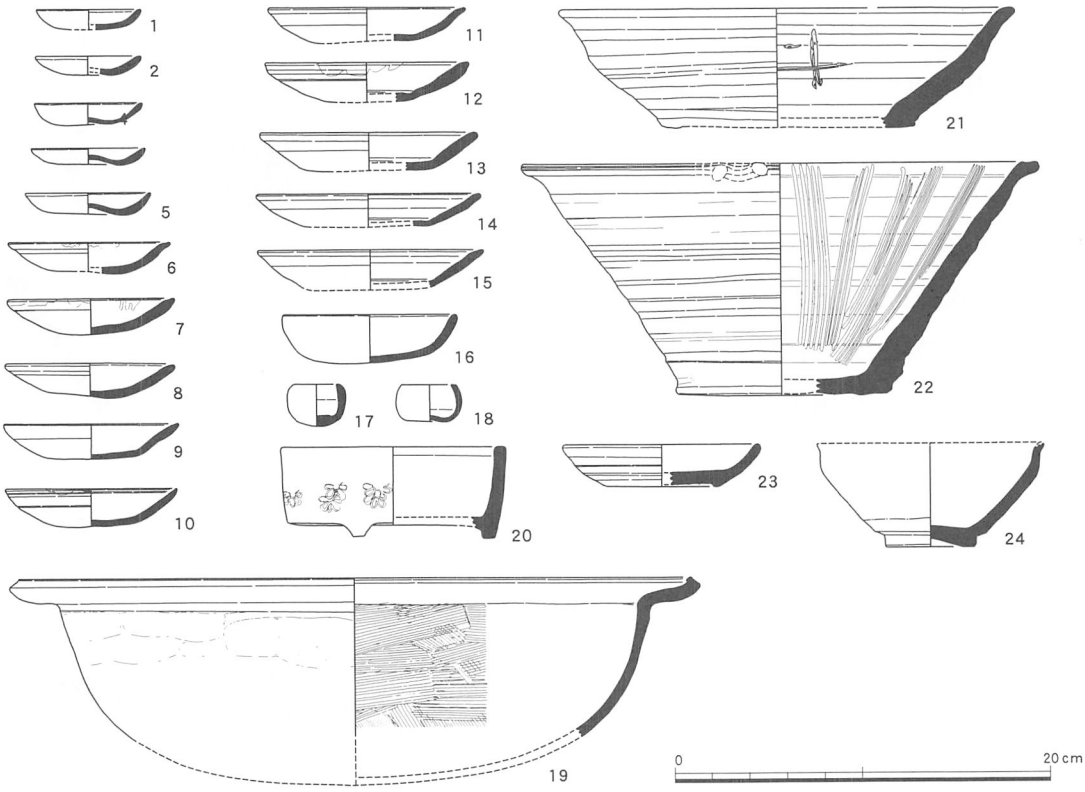


図19　溝状遺構３出土土器実測図（1：4）

1～15 土師器皿、16 土師器小鉢、17･18 土師器小壺、19 土師器焙烙、20 瓦器香炉、21 焼締陶器(信楽)鉢、22 焼締陶器(信楽)擂鉢、23 国産施釉陶器(瀬戸･美濃･灰釉)皿、24 国産施釉陶器(瀬戸･美濃･鉄釉)天目茶椀

なお、井戸７井筒内から出土した墨書土師器皿（図21）を掲載した。口縁部内面に３文字が記されている。京域主流に共通する土師器皿であり、京都Ⅹ期中～新の内には位置付けられ16世紀中葉頃に比定できるだろう。

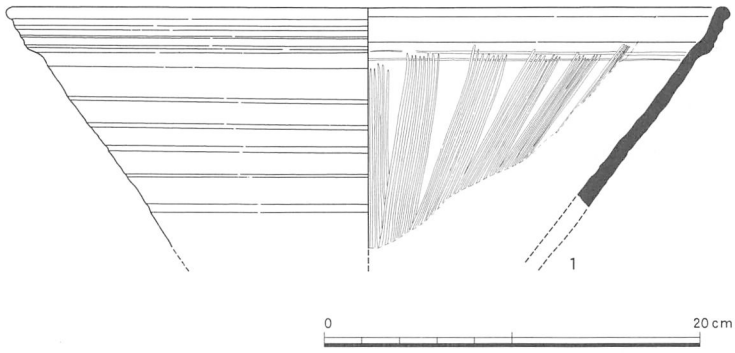


図20　溝状遺構１（上層A）出土土器実測図（1：4）

1 国産施釉陶器(鉄釉)擂鉢

井戸７は、鳥羽離宮に使用されていたと見られる瓦（主に平瓦）を井筒に円形に積んで再利用している。掘形からの出土遺物の内でもっとも新しい時期に位置付けられる資料は、Ⅸ期新に属すると見られる土師器皿片である。井筒内からの出土遺物で最も新しい時期と見られる一群は、墨書土師器皿を含むⅩ期中～新に位置付けられるものである。井戸７は、15世紀後葉頃に作られ、16世紀中葉頃には埋没廃棄されたものと考えられる。

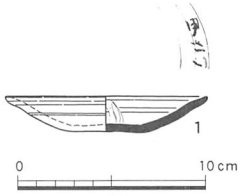


図21　井戸７井筒内
出土土器実測図（1：4）
1 土師器墨書皿

（2） 瓦類（図22～27、図版（10～16）

瓦類は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦である。これらの瓦は溝状遺構3、井戸4・7、溝6の各遺構、黒褐色砂泥の遺物包含層などで出土した。

1は、複弁六弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当外周と丸瓦部凸面にナデ調整を施している。瓦当裏面は指頭によるオサエの後ナデ調整している。丸瓦部凹面は布目が残る。焼成は堅緻である。播磨系。

2は、単弁蓮華文軒瓦である。瓦当径は楕円形を呈している。瓦当外周はケズリ、瓦当裏面はオサエを施して指頭痕が残る。丸瓦部凸面・凹面はナデ調整している。焼成はやや不良である。

3は、単弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当径は楕円形を呈しているとみられる。瓦当部裏面はオサエ、ナデ調整している。瓦当部外周の下端にケズリを施している。焼成は良好である。京都系。

4は、蓮華文軒丸瓦である。瓦当部外周はケズリ調整している。瓦当部裏面には布目が認められる。焼成はやや不良である。

5は、右巻の三巴文軒丸瓦である。尾は長いが外縁には接しない。瓦当面には「×」印の陽刻が認められるため、瓦当笵に彫り込まれたものとみている。丸瓦部凸面に縄叩きが施されている。丸瓦部凹面には布目が残されている。焼成は良好である。京都系。

6は、右巻の三巴文軒丸瓦とみられる。瓦当部外周と瓦当部裏面はオサエの後ナデ調整している。焼成は良好である。

7は、左巻の巴文軒丸瓦である。瓦当部外周と瓦当部裏面をナデ調整している。焼成は良好である。

8は、右巻の三巴文軒丸瓦とみられる。巴文の頭部同士は凸線で接している。瓦当部外周と瓦当部裏面はナデ調整している。焼成は堅緻である。

9は、均整唐草文軒平瓦である。瓦当部凹面と顎部凸面および顎部裏面は横方向のナデ調整している。平瓦部凹面・凸面と左側縁部は縦方向のナデ調整を施す。焼成は堅緻である。瓦当の成型は包込み式である。播磨系。

10は、唐草文軒平瓦である。顎部凸面・裏面と瓦当部凹面は横方向のナデ調整をしている。平瓦部凹面左側縁付近は縦方向のナデを施す。平瓦凹面には布目が残る。平瓦部凸面は平行叩きを施している。焼成は堅緻である。瓦当の成形は包込み式である。播磨系。

11は、唐草文軒平瓦である。下外区周縁に笵傷が認められる。瓦当部凸面と顎部裏面および平瓦部凹面は横方向のナデを施している。平瓦部凸面は縦方向のナデを施している。焼成は堅緻である。瓦当の成型は包込み式である。播磨系。

12は、唐草文軒平瓦である。瓦当部凹面と顎部凸面はケズリ調整が施されている。顎部裏面は横方向のナデ調整をしている。平瓦部凹面は斜方向の叩きの後、ナデを施している。平瓦部凸面はオサエの後、不定方向のナデを施している。焼成はやや不良。瓦当の成形は折曲げ式である。

13は、唐草文軒平瓦である。平瓦部に布目が残る。平瓦部凸面と顎部裏面は横方向のナデ調整をしている。焼成は良好である。

14は、連巴文軒平瓦である。巴文は右巻の三巴文である。巴文の尾部は圏線に接している。顎部凸面・裏面は横方向のナデを施している。瓦当部凹面は横方向のナデ、平瓦部凸面は縦方向のナデ調整を施している。平瓦部凹面には布目が残る。瓦当の成形は包込み式である。播磨系。

15は、連巴文軒平瓦である。巴は右巻の三巴文である。巴文の尾部は圏線に接している。瓦当部凹面、顎部凸面はケズリ、(端部は強いナデ調整を施している)。平瓦部凸面は粗い縄叩きを斜方向に施す。平瓦部凹面に布目が残る。その布目の上から全面的ではないが、横方向のナデ調整を施している。焼成は良好である。讃岐系。

16は、抽象化された唐草文軒瓦である。瓦当部凹面と顎部凸面はケズリ調整している。顎部裏面は横方向のナデ調整を施している。平瓦部凹面は布目を横方向のナデで消している。平瓦部凸面はオサエと縦方向のナデを施している。平瓦部凹面に「－」のヘラ記号が記されている。瓦当の成形は折曲げ式である。京都系。

17は、巴文軒平瓦である。左端の巴は1線が逆に巻き込んでいる。瓦当部凹面・左側縁はケズリ調整を施している。瓦当部裏面は横方向のナデ調整をしている。平瓦部凸面はオサエおよびナデを施している。平瓦部凹面は布目が残っている。焼成は良好である。同形式の文様は栢ノ杜遺跡からも出土している。[註8]

18は、雁巴文軒平瓦である。瓦当部凹面と左側縁および顎部凸面はケズリ調整している。顎部裏面はオサエおよびナデを施している。平瓦部凹面に布目が残る。平瓦部凸面は縦方向のナデ調整を施している。焼成は良好である。瓦当の成形は折曲げ式である。京都系。

19は、剣頭文軒平瓦である。剣頭文の先端は丸みを帯びている。瓦当面内区に笵傷が認められる。平瓦部凹面には布目が残る。平瓦部凸面はオサエおよび横方向のナデを施している。焼成はやや不良である。

20は、剣頭文軒平瓦である。瓦当部凹面は横方向のケズリ調整を施す。平瓦部凹面に布目が残る。顎部凸面に縄叩きが施されている。焼成は堅緻。瓦当の成形は折曲げ式である。京都系。

21は、剣頭文軒平瓦である。瓦当部凹面、顎部凸面はケズリ調整している。平瓦部凹面と瓦当面に布目が残る。平瓦部凹面の布目は不定方向のナデで部分的に消されている。平瓦部凸面には縄叩きが施されている。焼成は良好である。瓦当の成形は折曲げ式である。京都系である。

22は、剣頭文軒平瓦である。瓦当凹面は横方向にケズリ調整している。平瓦部凹面および瓦当面に布目が残っている。平瓦部凸面、顎部裏面は比較的粗い縄叩きが施されている。この縄叩きは部分的にナデで消されている。顎部裏面には折曲げ皺が認められる。平瓦部凹面に「×」印のヘラ記号が記されている。

丸瓦・平瓦　丸瓦（1～4）の凸面と玉縁部凸面はナデ調整して平滑にしている。3・4には粘土塊が付着している。丸瓦部凹面は各個体共に粘土切り痕、布目痕、布絞り痕などが認められる。平瓦（5～8）の凹面は、各個体共に細かい布目痕、面取り痕、不定方向のナデが認められる。凸面は、刻み目を入れない板で叩きしめたもの（1・3)、刻み目を入れた板で叩きしめたもの（2・4）がある。すべて井戸7から出土している。

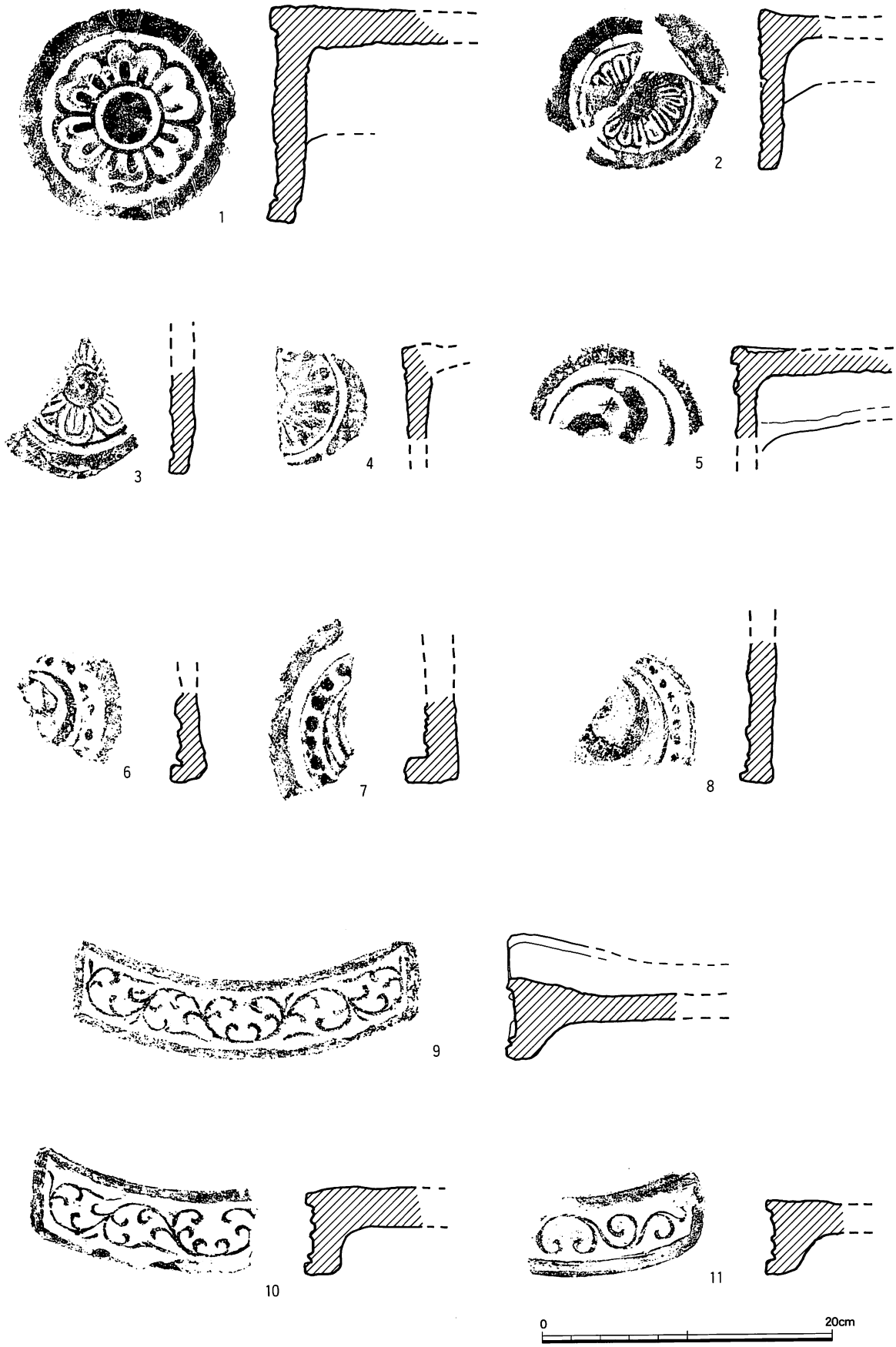


図22　出土軒瓦拓影・実測図（1：4）

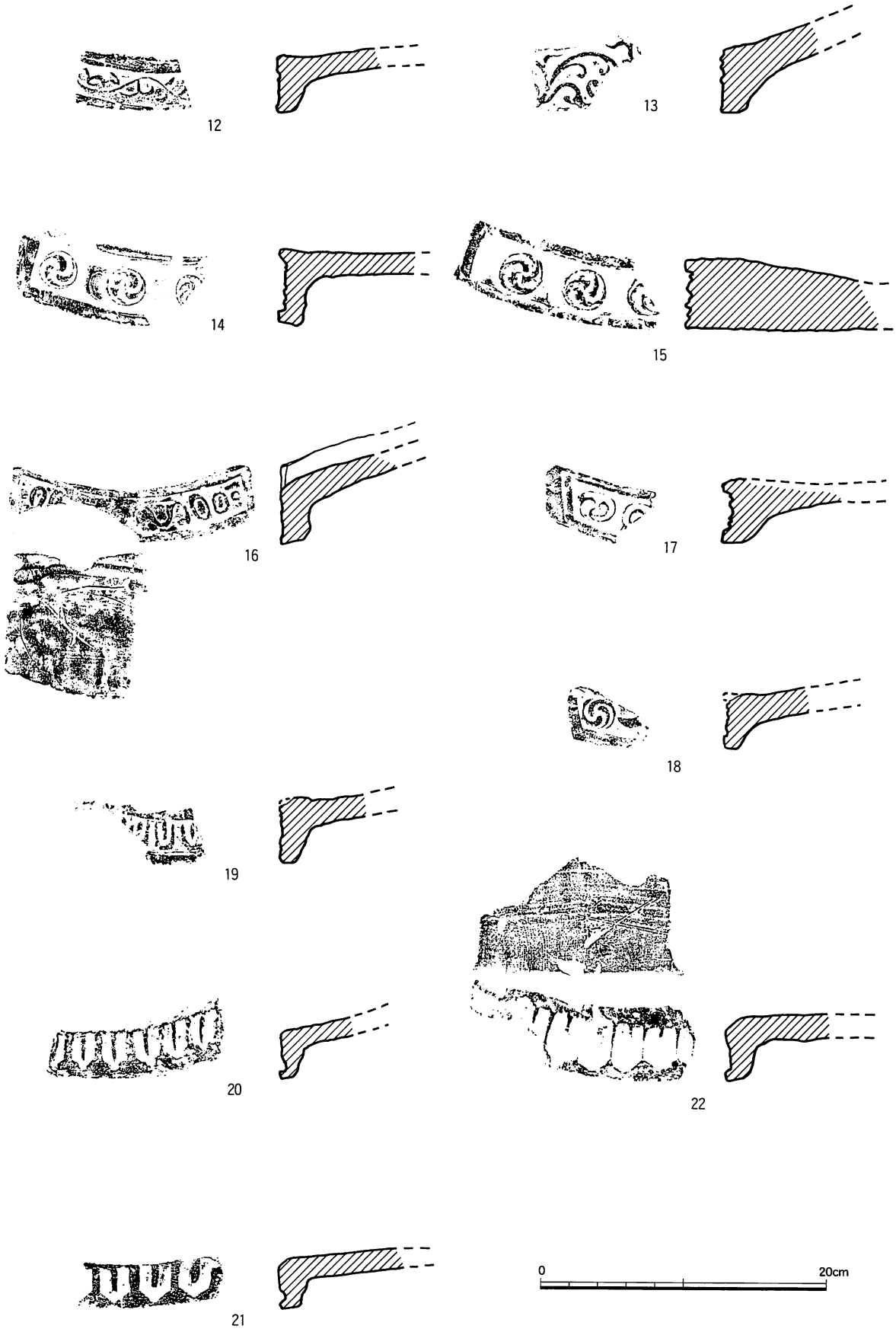


図23　出土軒瓦拓影・実測図（1：4）

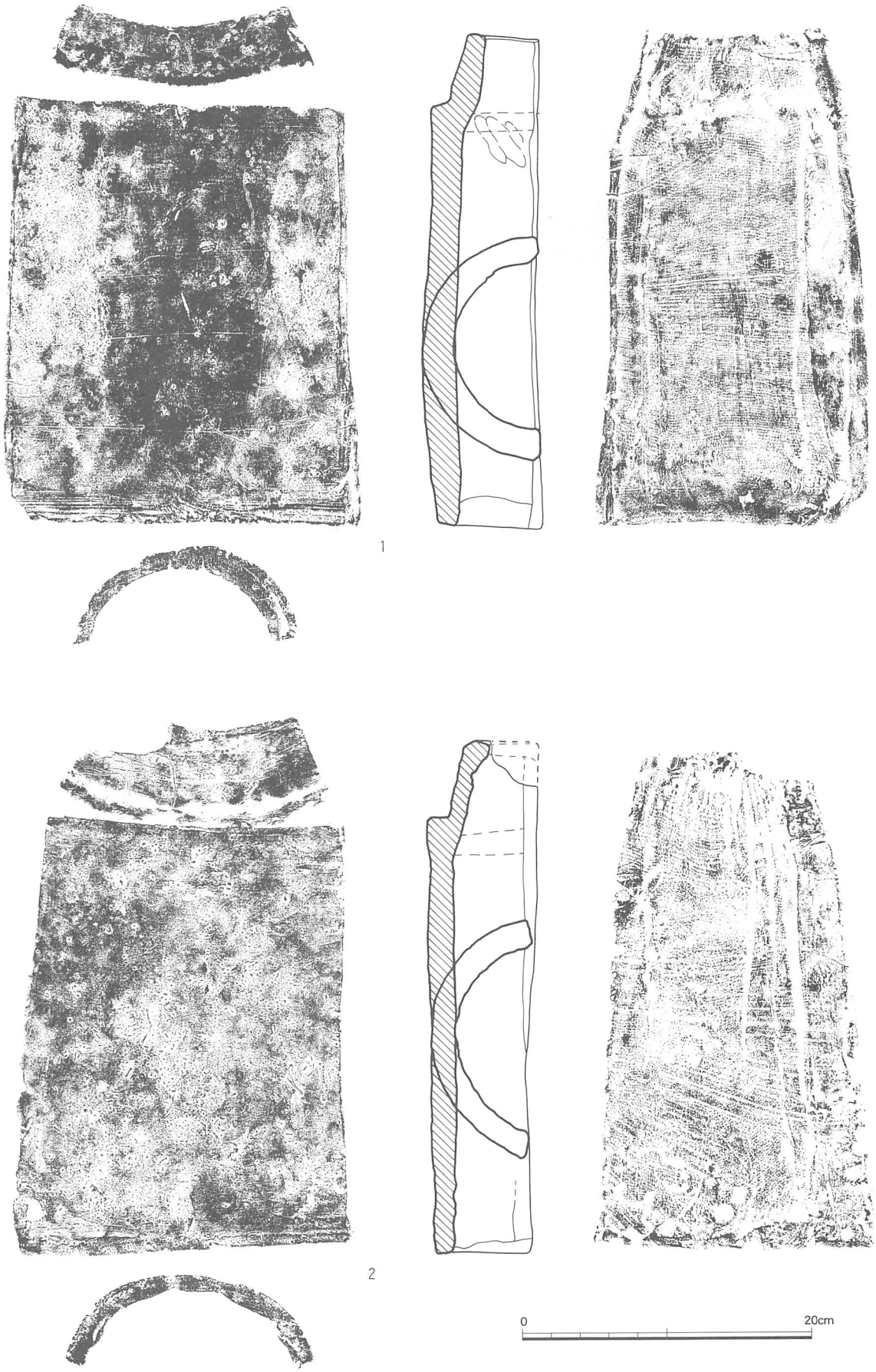


図24　出土丸瓦拓影・実測図（1：4）

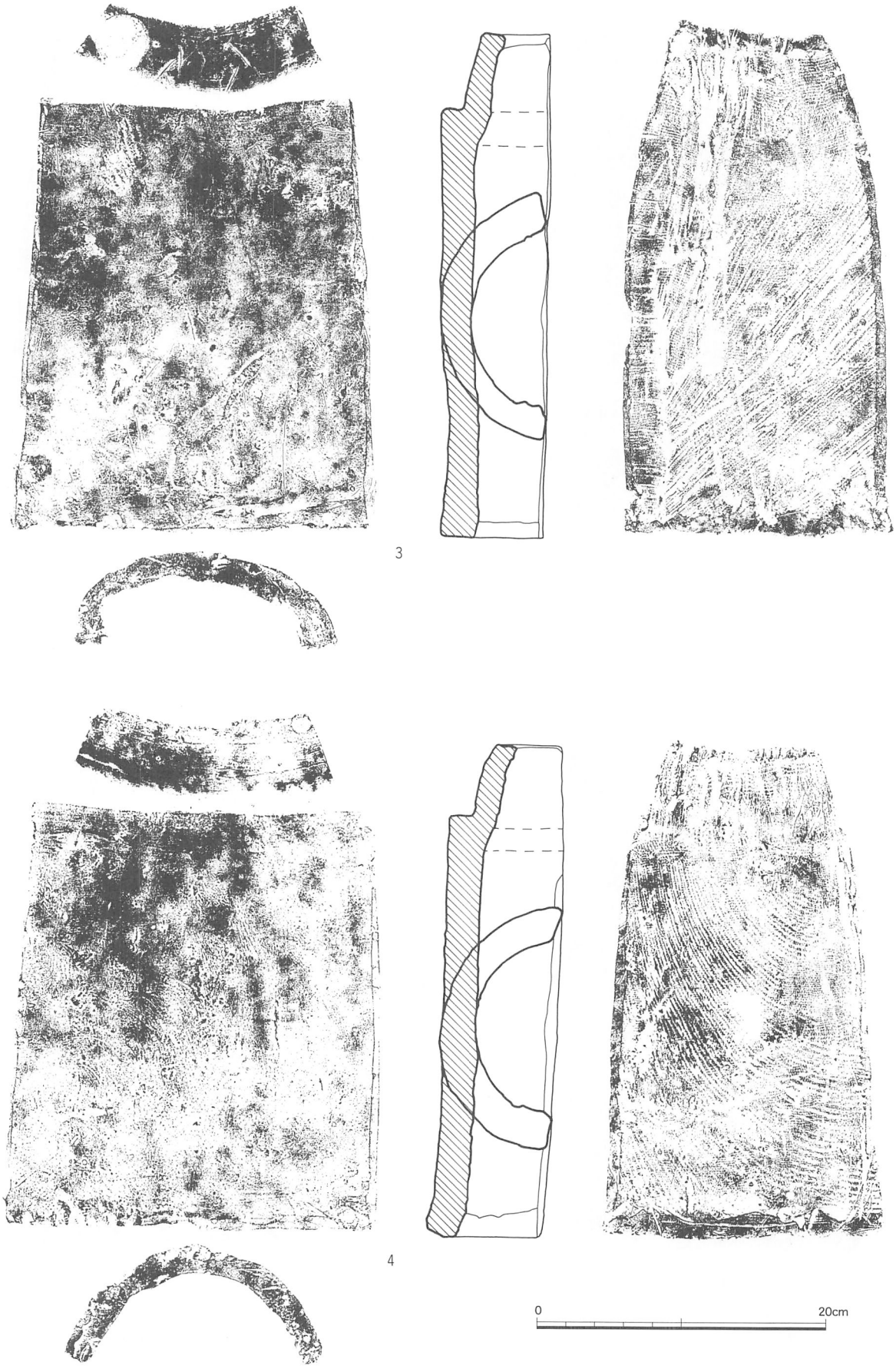
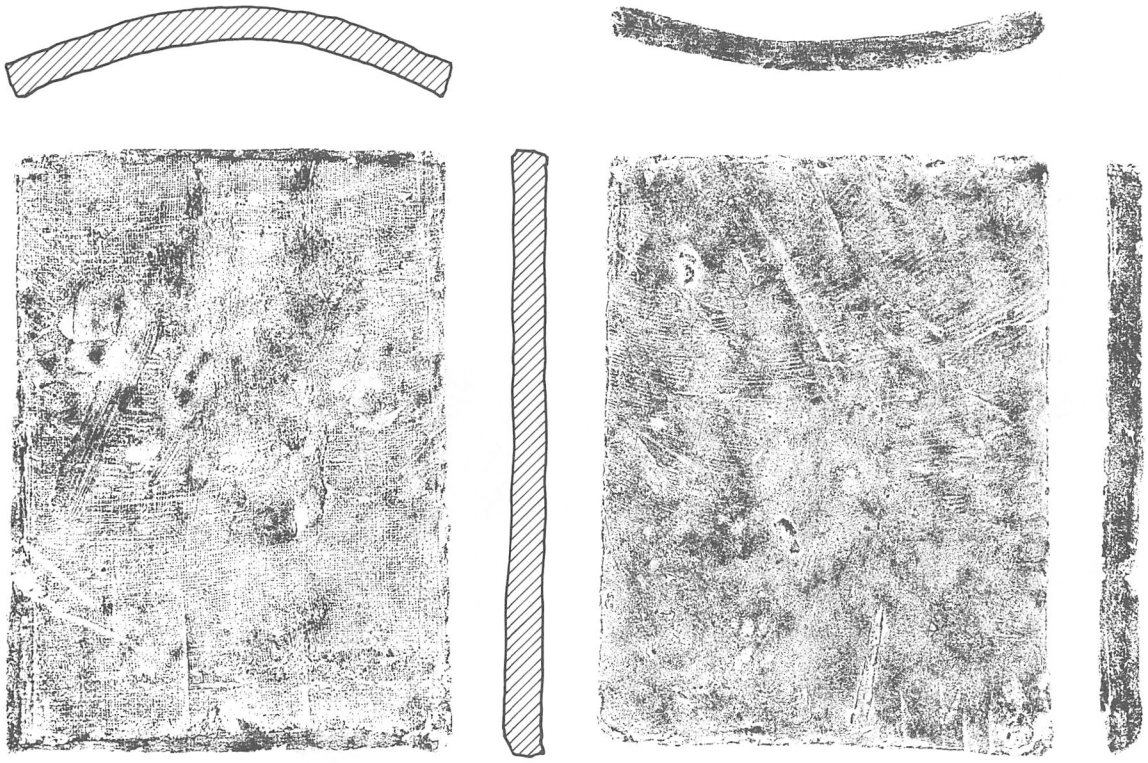
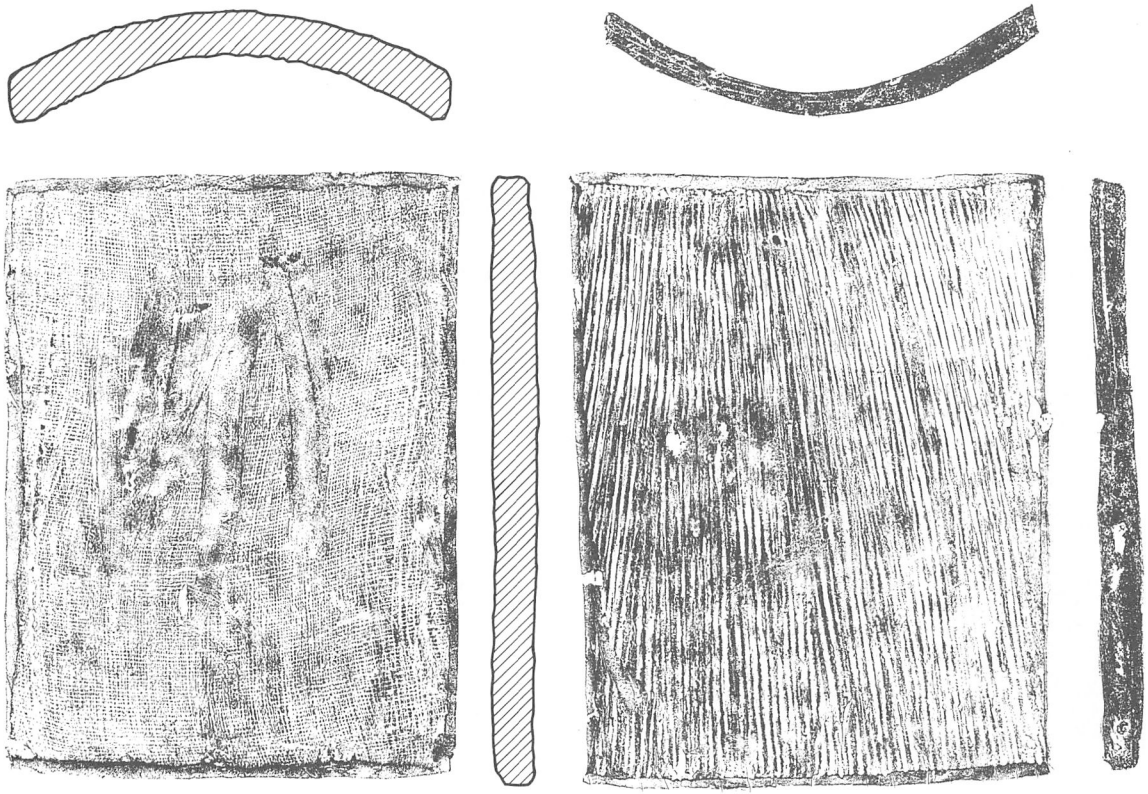


図25　出土丸瓦拓影・実測図（1：4）



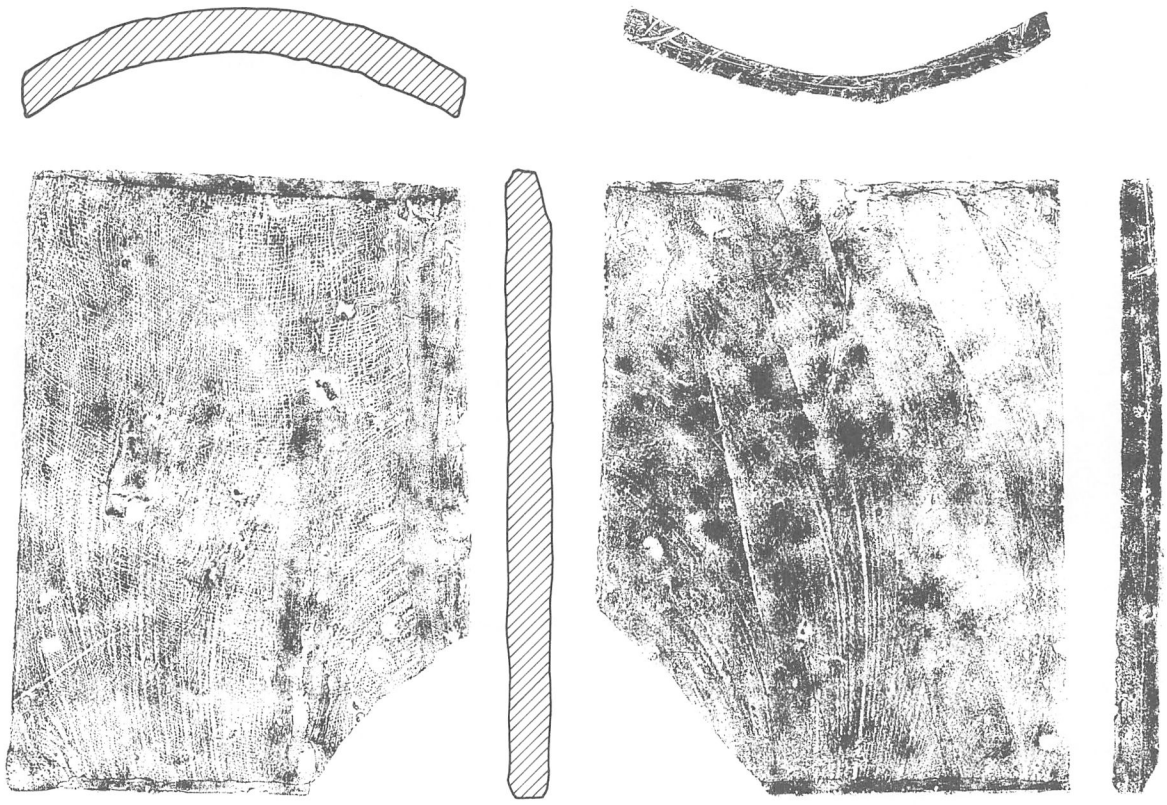
5



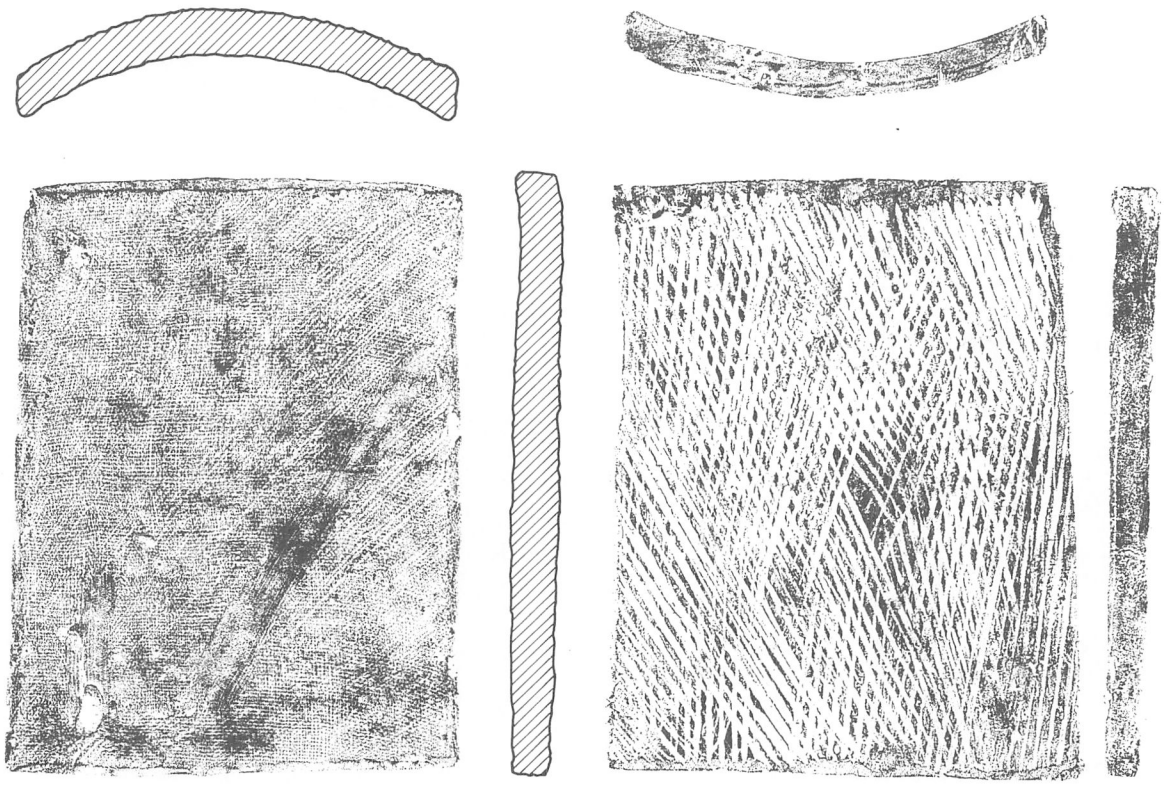
6

0　20cm

図26　出土平瓦拓影・実測図（1：4）



7



8

0 20cm

図27　出土平瓦拓影・実測図（1：4）

（3） 銭貨（図28、表1）

銭貨は、井戸4・5・7、溝状遺構3、遺物包含層などから16点出土している。初鋳の古い銭貨から開元通宝、天聖元宝、皇宋通宝、熙寧元宝、大観通宝、政和通宝、寛永通宝である。寛永通宝を除く唐銭・北宋銭の寸法は2.3～2.5cm、重量は2.3～3.7gであった。また、開元通宝は3点出土しているが、うち1点の背には「月」印が確認できる。これらの銭貨は一つの遺構からまとまった形ではなく単発的に見いだされていることが特徴である。

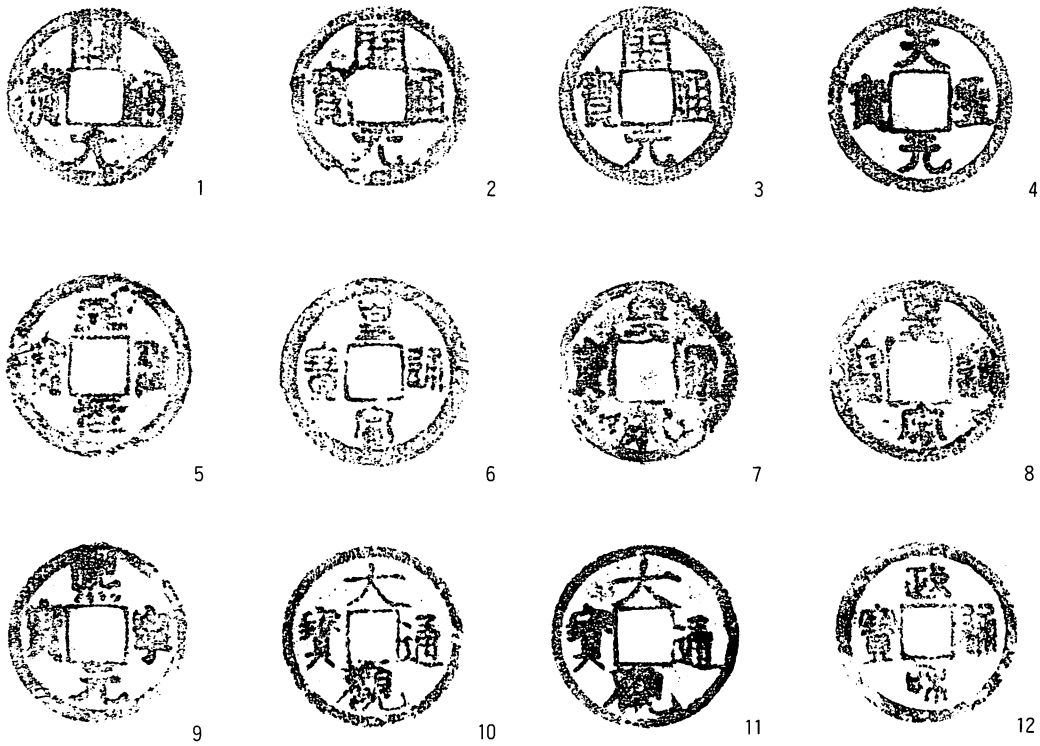


図28　出土銭貨拓影（1：1）

No.	銭貨名称	初鋳年	直径(cm)	重量(g)	出土地点
1	開元通宝	621（唐）	2.45	3.114	調査区北部溝状遺構灰色泥砂
2	開元通宝	621（唐）	2.45	2.728	H42NP溝状遺構3
3	開元通宝	621（唐）	2.44	3.374	H42NQ井戸4掘下げ北半
4	天聖元宝	1023(北宋)	2.46	2.718	H42NQ井戸4掘下げ北半
5	天聖元宝	1023(北宋)	2.49	3.733	H42NP清掃中
6	皇宋通宝	1039(北宋)	2.45	2.374	調査区南半部検出中
7	皇宋通宝	1039(北宋)	2.55	3.027	写真清掃中
8	皇宋通宝	1039(北宋)	2.48	2.888	H42MP・MQ遺構清掃中
9	熙寧元宝	1068(北宋)	2.42	3.527	H42QP・QQ井戸5
10	大観通宝	1107(北宋)	2.51	3.564	H42NP井戸7井筒内
11	大観通宝	1107(北宋)	2.45	2.670	H42NP溝状遺構3
12	政和通宝	1111(北宋)	2.45	2.320	調査区南半部検出中

表1　出土銭貨

4．まとめ

今次の調査では当初目的とした弥生時代・古墳時代の鳥羽遺跡の遺構、鳥羽離宮跡東殿に直接関連する遺構を見つけることはできなかった。しかしながら平安時代以降、中・近世に属すると考えられる多数の柱穴跡、井戸跡、溝跡などの検出により、当地の土地利用の変遷の一端を確認できたことは大きな成果であった。北殿、田中殿などの他の地区の遺構が13世紀代でなくなるのに対し、東殿地区では様相が異なっていることが明らかとなっている。東殿地区の北半部はこれまでの調査成果から、離宮を管理する人々の雑舎を確認している。今次の中・近世の遺構の検出は、離宮が造営されて以降、人々が当地で長く生活を営んでいたことがうかがえる。なお、井戸７の井戸枠に使用された瓦類は平安時代後期に属しており、井戸を造るに際して再利用されたと考えられる。このことは周辺で瓦葺きの建物が存在していたことを裏付ける資料が、新たに蓄積されたと考えている。

遺物包含層や遺構内から10数枚の宋銭が出土している。狭い調査区であるにもかかわらず、銭貨の出土が少なからずみられることは、中世の鳥羽遺跡の性格を考えていくうえで重要な手がかりになると思われる。今後、周辺の調査で得られた成果を積み重ねていけば、実態が解明されるものと考える。

註１　木下保明他「第71次調査」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』㈶京都市埋蔵文化財研究所　1983年

註２　吉崎　伸他「第77次調査」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』㈶京都市埋蔵文化財研究所　1984年

註３　鈴木久男他「第94次調査」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』㈶京都市埋蔵文化財研究所　1985年

註４　網　伸也「第130次調査」『平成元年度　鳥羽離宮跡発掘調査概報』京都市文化観光局　1990年

註５　磯部　勝「第136次調査」『平成２年度　鳥羽離宮跡発掘調査概報』京都市文化観光局　1991年

註６　小森俊寛「鳥羽離宮跡第141次調査」『平成11年度　京都市内遺跡発掘調査概報』京都市文化市民局　2000年

註７　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　㈶京都市埋蔵文化財研究所　1996年

註８　杉山信三他『栢杜遺跡調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所　1974年

参考文献

・杉山信三「鳥羽殿とその御堂」『院の御所と御堂－院家建築の研究』奈良国立文化財研究所学報　第11冊　奈良国立文化財研究所　1962年

・小牧実繁編『城南－鳥羽離宮址を中心にして－』城南宮　1967年

・長宗繁一　鈴木久男「鳥羽殿」『平安京提要』㈶古代学協会　古代学研究所　角川書店　1994年

II．平安宮宮内省跡

1．調査経過

調査地は、二条城の北側で堀を隔てて向かい合う位置にある。当地は平安時代は平安宮宮内省と廩院間の東西道路推定地北側で、北側溝および宮内省南面築地推定地にあたる。安土桃山時代には、この地の北方に豊臣秀吉が創建した聚楽第とそれをとりまく武家屋敷があったとされている。江戸時代には京都所司代下屋敷の敷地であった。

当調査地では、2001年６月に調査地北半で京都市埋蔵文化財調査センターの試掘調査が行なわれ、平安時代の溝状遺構を検出している。このことから築地や側溝、路面が遺存している可能性が高いと考えられ、今回の発掘調査を実施することとなった。対象地西側にある二条児童公園内では1981[註1]・1996[註2]年に調査が行なわれており共に江戸時代の南北方向の濠や室町時代の遺構が検出されている。

調査区は築地跡や側溝、路面が遺存すると推定される敷地北半に設け、南半を土置場とした。調査は2001年７月30日から開始し、江戸時代～現代の盛土は重機で掘削、その後は人力により遺構の掘り下げを行なった。調査区の東半部では江戸時代後期の遺構と土取跡で、それ以前の遺構は削平されていたものの、西半部では江戸・安土桃山・室町・平安の各時代の遺構を検出した。最後に築地と考えられる部分の断ち割り調査を行ない、必要に応じて実測図・写真撮影などの記録を採って、８月30日にすべての調査を終了した。

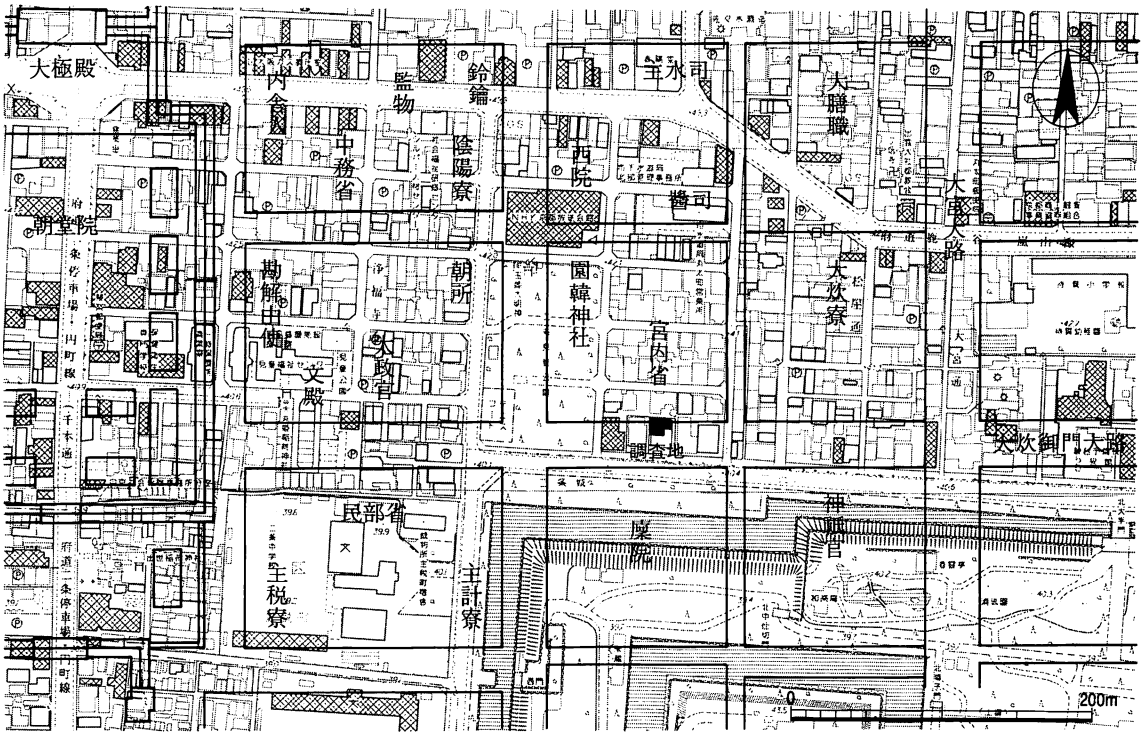
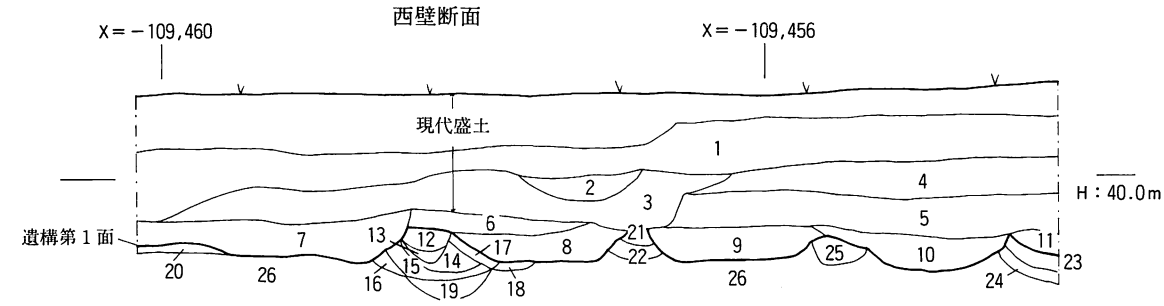


図29　調査位置図（1：5000）

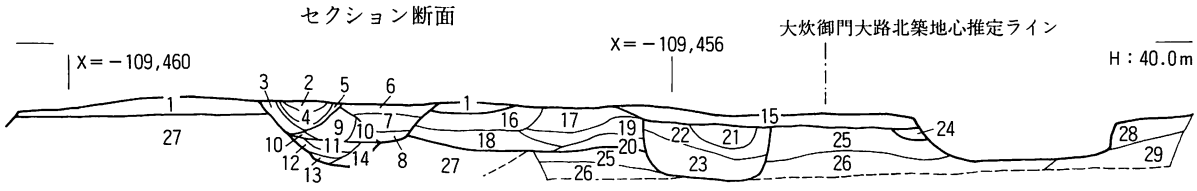
2．遺　構

（1）層位

調査区の基本層位は近現代盛土が厚さ0.7～0.9m、江戸時代の盛土が厚さ0.2～0.7mあり、その下の土層上面が遺構面となる。調査区東半部では江戸時代の土取跡で地山まで削平されており中世や平安時代の遺構・遺物包含層は遺存しない。調査区西半部の南では室町時代の遺物包含層が厚さ0.1m程あり、その直下が地山となる。北部では平安時代の瓦片の混じった土層が厚さ0.1m程あり、その下が平安時代の遺構面となる。調査は江戸時代の遺構面を第1面（現地表下約1.3m）、室町時代、安土・桃山時代の遺構面を第2面、平安時代の遺構面を第3面とした。



1　2.5Y3/2黒褐色砂礫
2　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、小礫・炭混
3　2.5Y3/2黒褐色砂礫、瓦混
4　2.5Y3/2黒褐色砂泥、炭・土師・瓦混
5　2.5Y3/2黒褐色砂泥、炭・土師・染付混
6　10YR4/2灰黄褐色砂礫
7　2.5Y3/1黒褐色砂泥、礫・瓦・染付混
8　2.5Y3/2黒褐色砂泥、小礫多量、炭少量混
9　2.5Y4/2暗灰黄色砂泥粘質、礫多量、土師・染付混
10　2.5Y3/2黒褐色砂泥、遺物多量混
11　2.5Y3/1黒褐色砂泥、小礫、遺物多量混
12　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
13　礫・瓦詰まる
14　10YR3/2黒褐色砂泥、礫・瓦多量混
15　10YR4/2灰黄褐色砂泥
16　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、小礫混
17　10YR4/2灰黄褐色砂泥、小礫少量混
18　10YR4/2灰黄褐色砂泥
19　10YR4/2灰黄褐色砂泥、底に砂が堆積
20　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、土師片混
21　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、土師片混
22　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、土師片混
23　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、小礫・土師片少量混
24　10YR4/4褐色砂泥＋10YR5/8黄褐色砂泥粘質混
25　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、土師片少量混
26　10YR5/8黄褐色砂泥粘質



1　10YR4/4褐色砂泥、土師片混（固く締まる）
2　10YR4/4褐色砂泥、小礫詰まる（固く締まる）
3　10YR4/4褐色砂泥
4　10YR3/2黒褐色砂泥、焼土混、小礫詰まる
5　10YR3/3暗褐色砂泥、焼土、小礫混
6　10YR4/4褐色砂泥、小礫少量混
7　10YR4/4褐色砂泥、小礫多量・炭・土師片混
8　10YR3/2黒褐色砂泥＋10YR6/8明黄褐色砂泥粘質少量混
9　10YR3/3暗褐色砂泥、焼土混、瓦片詰まる
10　10YR3/2黒褐色砂泥粘質（固く締まる）
11　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、拳大の礫・瓦詰まる
12　2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、下に砂が堆積
13　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥＋7.5YR5/6明褐色砂泥混
14　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、土師片混
15　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、礫・瓦混
16　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥粘質（固く締まる）
17　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、瓦・炭・土師片混（固く締まる）
18　10YR4/4褐色砂泥粘質、炭・遺物混（固く締まる）
19　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥＋10YR6/6明黄褐色砂泥粘質少量混（固く締まる）
20　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥粘質＋10YR6/6明黄褐色砂泥粘質多量混（固く締まる）
21　10YR4/4褐色砂泥粘質、小礫・瓦混
22　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥＋10YR5/6明黄色砂泥混
23　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、瓦混
24　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥＋10YR4/6褐色砂泥混
25　10YR4/4褐色砂泥＋10YR4/2灰黄色砂泥粘質混
26　10YR4/4褐色砂泥
27　10YR6/6明黄褐色砂泥粘質
28　10YR3/4黒褐色砂泥
29　10YR4/4褐色砂礫

0　3m

図30　西壁断面・セクション断面図（1：50）

（2） 遺構

第1面 溝、柱穴、井戸、土壙などがある。溝1は調査区西部で検出した南北溝で幅0.7～1.0m・深さ8～17cmあり、南北共調査区外に延長する。埋土から遺物が多量に出土した。井戸は調査区北部で2基、南部で1基、計3基検出した。井戸2は円形の掘形を持ち、径1.3mを測る。井筒には径0.8mの桶が使用されている。土壙3は円形の掘形を持ち、径0.95mを測る。内部には径0.65mを測る底板の付いた桶が設置されていた。水溜めなどに使用したと思われる。調査区東半で検出した土壙4と土壙5は、それぞれ長径約2.3m・短径1.0m・深さ約0.3m、長径約1.6m・短径0.6～0.9m・深さ約0.4mあり多量の砂利と共に木片・土器類が出土した。廃棄土壙と考えられる。土壙6は南北4.0m・東西4.5m以上、深さ約0.2mである。その南側でもほぼ平行に並ぶ土壙の北辺を検出している。どちらも方形状を呈する土取跡である。

これらの遺構は、出土した遺物から江戸時代後期（18世紀末～19世紀）に属する。また調査区南で溝1の底面において東西方向の溝状遺構や土壙を検出した。江戸時代後期の遺物が出土していることから、時期差はほとんどないと見られる。

第2面 調査区のほぼ中央で検出した東西溝7は、中央より西側で幅1.0～1.3m、東側では削

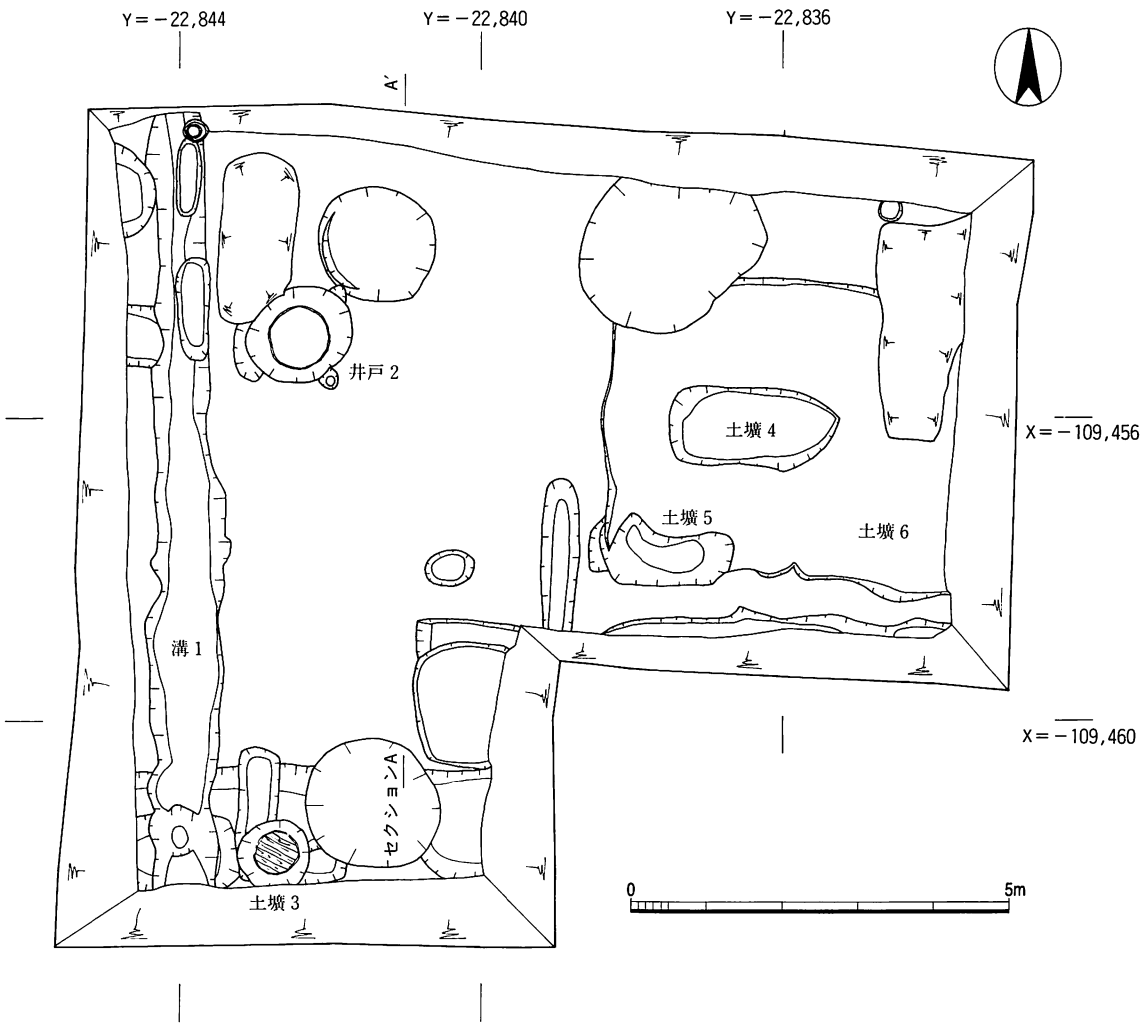


図31 第1面遺構平面図（1：100）

平を受け幅0.5～0.6mとなる。深さ0.3m、長さ10.7m以上で東・西側共調査区外に延長しており東に低くなっている。埋土から安土・桃山時代の金箔瓦や軒瓦を含む多量の瓦片が出土した。下層には水が流れていたことを示す砂が堆積する。この溝は3回にわたって造り替えられているが、遺物内容から時期差はほとんど認められない。

柱穴8・9は室町時代の遺物包含層（褐色砂泥層）の直下、地山上面で検出した。柱穴は共に径0.45mの円形で、深さはそれぞれ0.4m、0.35mである。両者共に柱あたりを検出しており、柱間は2.2mある。東西方向の柵列、あるいは建物の可能性がある。柱あたりから室町時代後期の土師器細片が出土した。

第3面　調査区北西部では、平安時代後期の瓦や少量の土器類を含む整地層下の地山上面で平安時代前期～後期の遺構を検出した。

後期の遺構には土壙が2基、溝が1条ある。調査区北西部で検出した土壙15は南北2.5m以上、東西1.9m、深さ0.35mあり、埋土から土師器や緑釉陶器の小片と瓦が出土している。土壙16は南北1.3m、東西1.0m、深さ約0.3mある。土器類の細片や瓦類が出土している。溝17は北東から南西に延びる溝で幅0.2～0.25m、長さ3.2m以上、深さ4～9cmあり、底部は南西に低くなる。

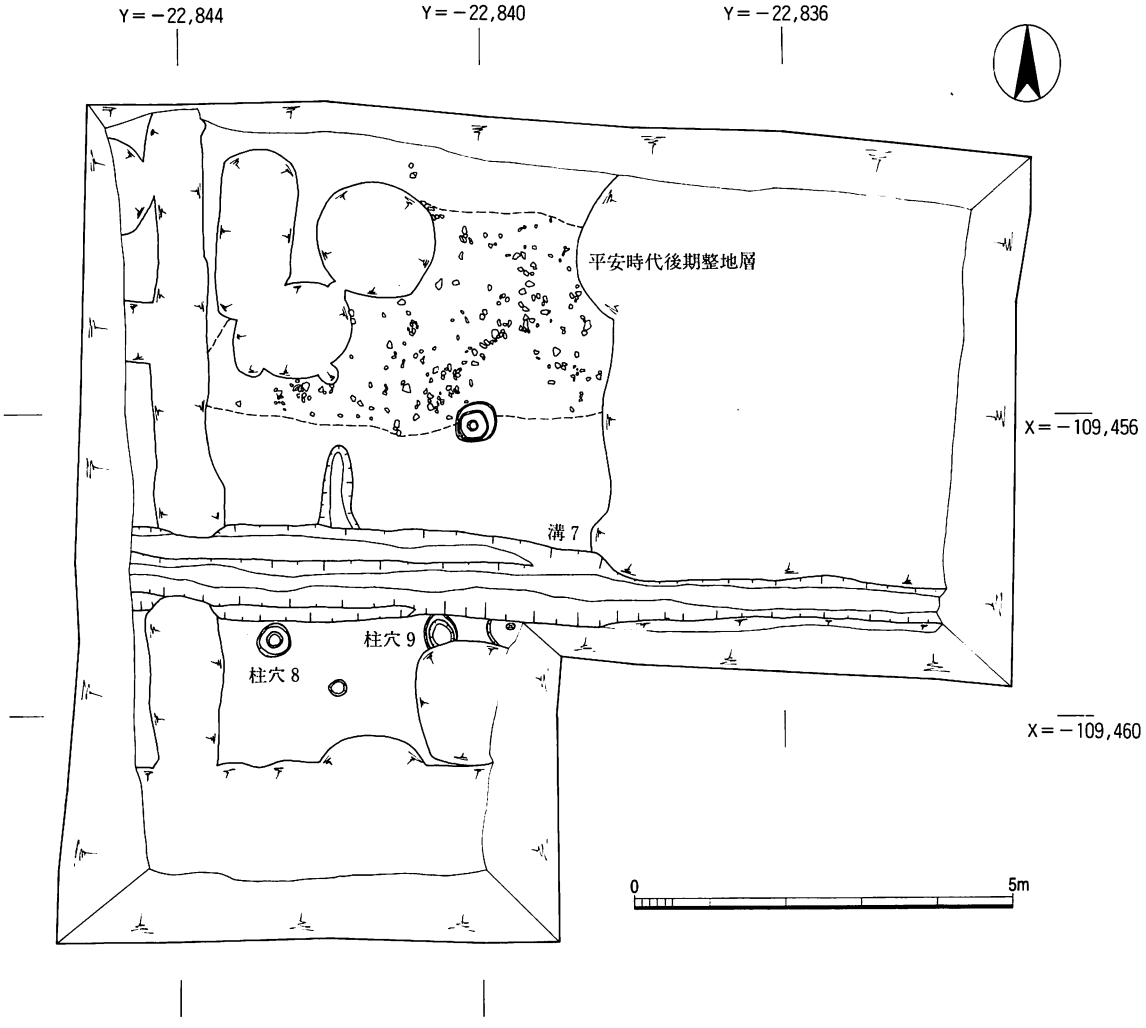


図32　第2面遺構平面図（1：100）

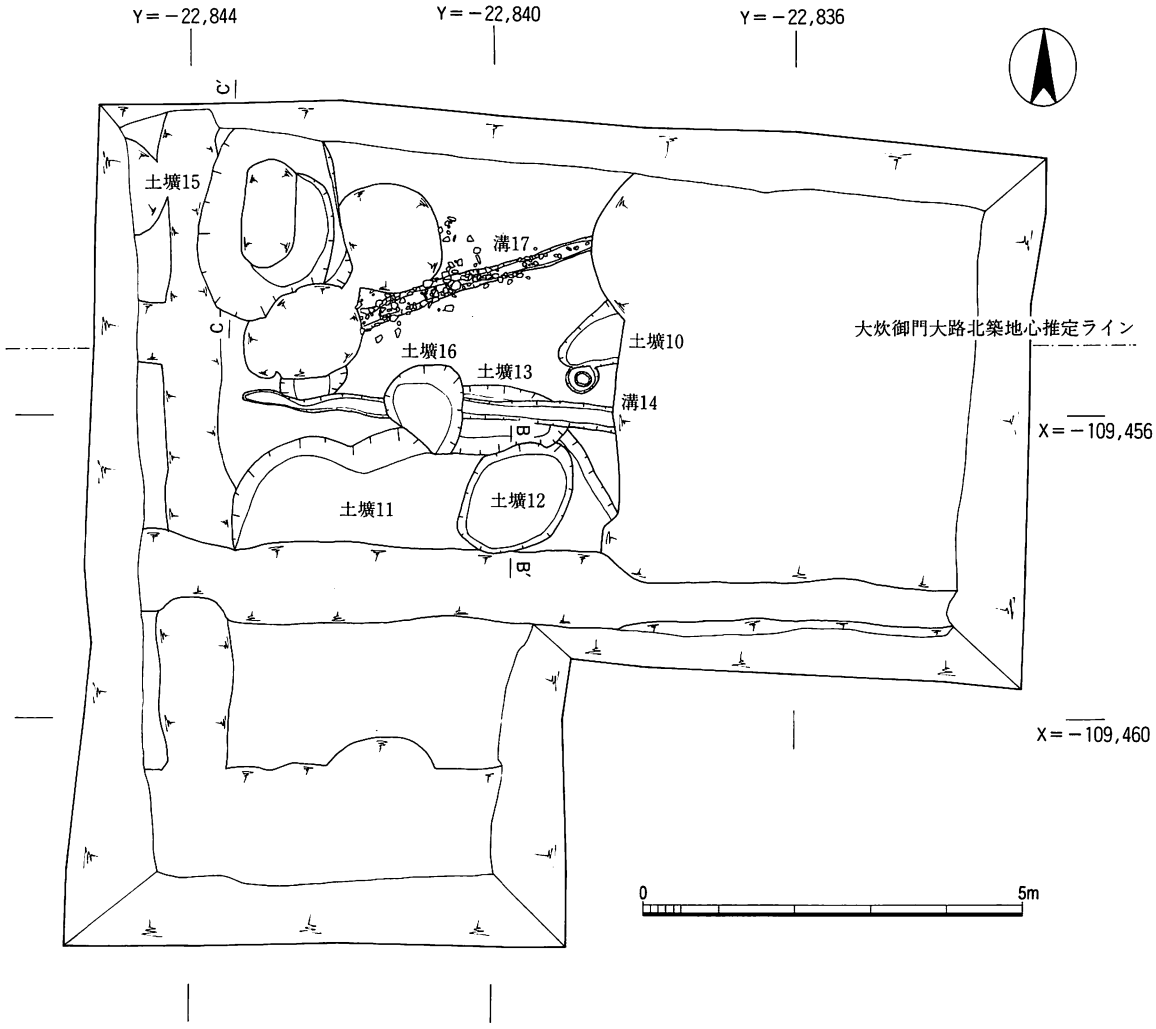
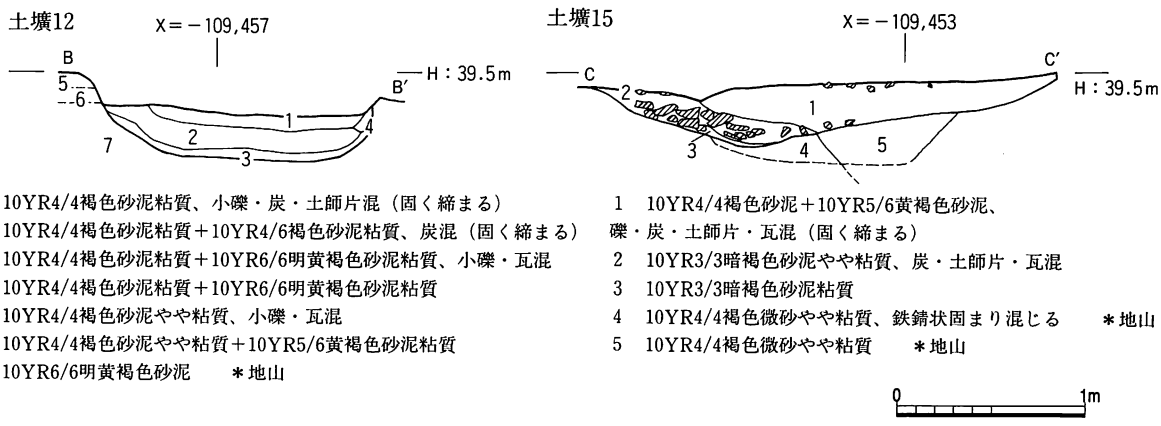


図33　第３面遺構平面図（1：100）



1　10YR4/4褐色砂泥粘質、小礫・炭・土師片混（固く締まる）
2　10YR4/4褐色砂泥粘質＋10YR4/6褐色砂泥粘質、炭混（固く締まる）
3　10YR4/4褐色砂泥粘質＋10YR6/6明黄褐色砂泥粘質、小礫・瓦混
4　10YR4/4褐色砂泥粘質＋10YR6/6明黄褐色砂泥粘質
5　10YR4/4褐色砂泥やや粘質、小礫・瓦混
6　10YR4/4褐色砂泥やや粘質＋10YR5/6黄褐色砂泥粘質
7　10YR6/6明黄褐色砂泥　＊地山

1　10YR4/4褐色砂泥＋10YR5/6黄褐色砂泥、礫・炭・土師片・瓦混（固く締まる）
2　10YR3/3暗褐色砂泥やや粘質、炭・土師片・瓦混
3　10YR3/3暗褐色砂泥粘質
4　10YR4/4褐色微砂やや粘質、鉄錆状固まり混じる　＊地山
5　10YR4/4褐色微砂やや粘質　＊地山

図34　土壙12・15断面図（1：40）

溝は両側共撹乱を受けているため、肩部を確認できないが、南西部では土壙15につながっていることも考えられる。溝全体に瓦や石が粗く敷かれており、須恵器の底部も敷かれていたものである。埋土からは土師器などが出土している。水の流れた形跡は認められない。

中期後半の遺構には土壙が３基、溝が１条ある。中央部分で検出した土壙11は、南北約0.5m

～1.7m以上・東西約5m・深さ約0.1～0.3mあり、南側は撹乱をうけている。またこの土壙の底部東側で、南北約1.5m・東西約1.4m・深さ0.25～0.4mのやや歪んだ円形土壙12を検出した。土壙11の北で検出した土壙13は南北0.9m・東西1.5m以上・深さ0.2mある。土壙11・13からは中期後半(11世紀)に属する土器類や瓦類が出土している。東西溝14は、幅0.15～0.3m・長さ4.9m以上・深さ4～10cmある。西側は削平されていると見られる。東側は撹乱を受けており、水の流れた形跡は見られず、炭が混入する埋土からは、土師器や瓦類が出土している。土師器は細片で時期は特定できないが、土壙11・13とほとんど時期差はないと考えられる。

前期の土壙10は中央北よりで検出した。検出面の形状は不整形で、南北約0.85m・東西0.8m以上・深さ約5cmを測る。東側は撹乱を受けているが、残存部からは9世紀後半の土器が出土している。

調査区東部では、溝7の両肩口で厚さ4～10cmの弥生時代の遺物包含層を検出している。同期の遺構等は検出していないが、当地を含む近辺に同期の遺跡が、存在していることを示すものと考えられる。

3．遺　物

出土遺物には、土器類・瓦類・土製品などがあり、その他に鉄釘、銅製把手などが数点出土した。コンテナ総数は33箱で、内訳は土器類・土製品17箱、瓦類16箱である。遺物は各時代の遺構や遺物包含層から出土しており、時代別では、平安時代・安土・桃山時代の瓦類や江戸時代の土器類が大半を占め、他の時期遺物は極少量である。土器類には、弥生土器、土師器、瓦器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器、焼締陶器、施釉陶器、磁器などがあり、土製品には人形、泥面子などがある。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦・丸瓦・平瓦などがある。

弥生時代の遺物は、江戸時代の土層に混入して壷の底部が出土した。この型式的特徴から第V様式に属すると見られる。また溝7両肩口の遺物包含層から弥生土器の細片が出土したが、器形等は不明である。

古墳時代の遺物は、須恵器杯の底部が混入品として平安時代後期の土壙16から出土している。

平安時代の遺物は瓦類が主体をなし、土器類は小片が多く、出土量は少量である。土器類は、各時期に属する土師器皿・椀・羽釜・高杯脚部、須恵器椀・甕・甑、灰釉陶器椀、緑釉陶器壷、輸入白磁椀、瓦器椀などがある。瓦類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがあり、土層や遺構から出土した。

室町時代の遺物は15世紀の土器類を包含する整地層と柱穴からの出土のみで、土師器の細片が大半を占め、極少量である。

安土・桃山時代の遺物は溝7から出土した瓦類がほとんどで、土器類は土師器皿、輸入白磁椀、焼締陶器甕などの細片が数点ある。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦・丸瓦・平瓦などがあり、それらの中には金箔や漆が残存しているものもある。

江戸時代の遺物は後期を中心とする各遺構から出土した。特に溝1や土壙4・5から出土した

土器類が大半を占める。土器類には、土師器皿・涼炉・塩壷、京焼系陶器皿・椀・土瓶・鍋・蓋、肥前系磁器皿・椀、瀬戸美濃系磁器、焼締陶器擂鉢・甕、輸入白磁椀、瓦器火鉢などがある。土製品では人形、泥面子があり、瓦類では平瓦・桟瓦などがある。その他、鉄釘、銅製把手などが数点ある。

（1） 土器類（図35）

ここでは実測図を掲載した平安時代、及び江戸時代の遺構から出土した土器類・土製品について記述する。

平安時代前期の土器類には土師器皿・高杯脚部などがある。6は9世紀後半に比定出来る高杯の脚部である。外面にはヘラケズリによる明瞭な面取りが見られ、内面はナデ調整である。土壙10から出土している。8は須恵器の底部で、口縁部は欠失している。平底で中央部に径約5㎝の孔が穿たれており、甑と考えられる。体部は底部から直線的に開いており、底部は内面に押圧痕が残り、外面にも圧痕が残り未調整である。体部内外面は回転ナデで仕上げている。形態的特徴及び胎土等から東海地方産と考えられる。溝17から出土したことから、混入品と見られる。

平安時代中期後半(11世紀)に比定出来る土器類には土師器皿・羽釜、緑釉陶器壷、須恵器椀・甕などがある。1は土師器皿で口縁部が強いナデ調整のため屈曲し、端部は摘み上げたような形状で突起する。底部内面から口縁部内面はナデ調整である。小型で器壁は薄く、残存部は1/6程である。2は須恵器椀で、体部下半以下は欠失している。口縁部は内弯気味に開き、端部はやや外反する。外内面共に回転ナデ調整仕上げである。残存部は1/6程である。3は土師器皿で、底部から緩やかに開き、口縁端部は外反する。口縁部外面にナデによる極浅い凹みが2条巡る、二段ナデで仕上げている。残存部は1/4程である。1・2は土壙11、3は土壙13から出土した。
平安時代後期の土器類には土師器皿、須恵器椀、瓦器椀などがある。4は土師器皿で緩やかに内弯して開き、端部は丸味をもった三角状を呈する。内面から外面はナデ調整で、口縁部外面にはナデによる凹みが1条巡る。器壁は比較的厚い。残存部は1/8程である。5は大型の土師器皿で、体部は立ち上がり、口縁端部は丸味をもった三角状を呈する。底部内面から口縁部内外面はナデ調整で、残存は口縁部の1/8程である。4・5は土壙15から出土している。7は須恵器椀で、体部は内弯気味に開き、口縁端部はやや外反する。底部外面は糸切り痕を残す未調整、底部内面・口縁部内外面は回転ナデである。平安時代の整地層から出土した。

江戸時代の土器類は整地層や各遺構から出土しているが、なかでも土壙4（9～26)、土壙5(27～37）からはまとまった遺物が出土している。共に江戸時代後期（18世紀末～19世紀）に属する。9～13・28は土師器皿で、口縁部は緩やかに外反して開き、内弯気味に収めている。底部内面周縁に明瞭な凹状圏線が付く。底部内面はナデ、体部内面から口縁部外面は横ナデ、体部～底部外面はオサエである。残存量は9・12・28が1/2、10・11が1/2、13が1/4程である。27は小型の土師器皿で、口縁部は内弯気味に開く。外面はオサエ、内面はナデである。残存部は4/5程である。

14～17・31は土師器の塩壷と蓋である。14はいわゆる花塩壷の一種で、器壁は薄く全形は扁平

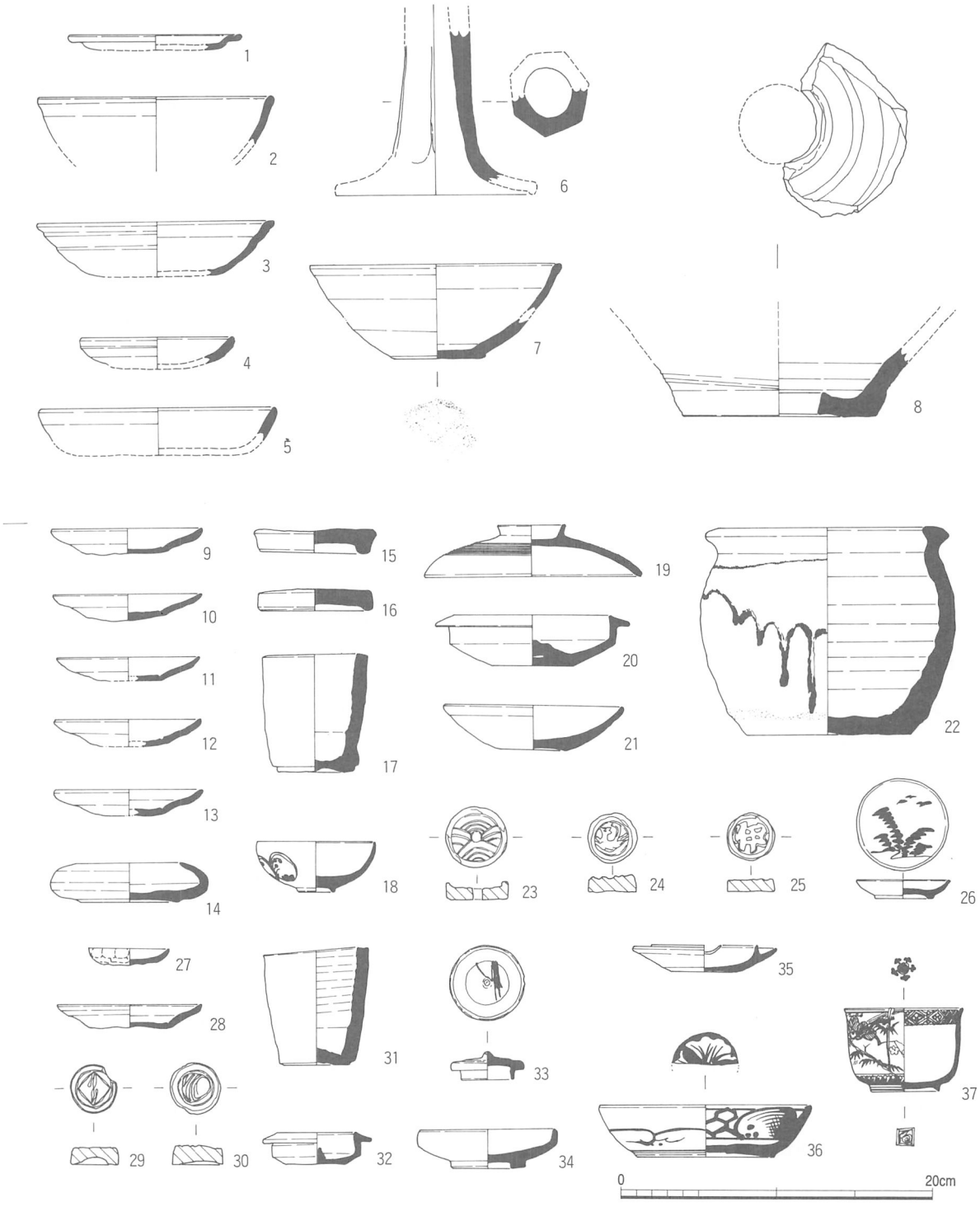


図35　出土土器・陶磁器実測図（1：4）

で、底部外面はナデ調整、体部・口縁部・底部の内外面は回転ナデである。残存量は2/3程である。15は焼塩壷蓋で、天井部中央が少しへこみ、口縁部はやや内に入り込む。天井部外面はオサエ後ナデ、内面には布目を残す。口縁部外面は横ナデ、ほぼ完形である。16は焼塩壷蓋で、天井部が平坦、口縁部は丸く突起する。天井部外面はオサエ後ナデ、内面には布目を残し、口縁部外面は横ナデ、完形である。17・31は焼塩壷で体部から口縁部は直線的でやや開く。体部・口縁部外面はオサエ、内面には縄目痕がある。底部は粘土塊を外から貼り付けたままの未調整である。

残存部が17は4/5程、31はほぼ完形である。

19～21・32～35は京焼系の施釉陶器である。19は鍋蓋で、天井部から口縁部は緩やかに内弯する。天井部外面に輪状のつまみが付き、櫛目が巡る。天井部内外面・口縁部内外面は回転ナデである。全面施釉であるが口縁端部は露胎としている。完形である。20は大振りの土瓶蓋で、天井部が周縁から下る、いわゆる落し蓋である。天井中央につまみが付く。内外面共に回転ナデで、外面全体に灰釉を施し、内面・口縁端部は無釉である。ほぼ完形である。21は皿で、口縁部は内弯気味に開き、内面に交差する櫛目がある。底部・体部外面は回転ケズリ、内面・口縁部内外面は回転ナデである。内面・口縁部外面に灰釉を施す。灯明皿の一種であり、口縁部外面にススが少量付着している。残存部は4/5程である。

32は土瓶蓋であり、小径の落し蓋で、天井中央につまみが付く。外面は回転ナデ、内面は回転ケズリで段がある。外面に鉄釉を施し、内面・口縁端部は無釉である。残存部は4/5である。33は蓋で、天井部中央につまみが付き、返り部は垂下する。天井部外面は回転ナデの後ケズリで1周段が付く。天井部内面・返り部内外面は回転ナデである。外面に鉄釉の線画があり、灰釉を施す。完形である。34は皿で、底部から緩やかに湾曲し口縁部は直立する。底部・口縁部内外面は回転ナデで、高台は貼りつけである。見込みに鉄釉の線画があり、内面・底部外面下位に灰釉を施す。残存部は2/3程である。35は灯明皿で口縁部は直線的に開く、口縁部内面中位に立ち上がり部あり、一部にヘラケズリで凹みをつける。底部・口縁部外面は回転ケズリ、内面は回転ナデである。内面・口縁部外面上位に透明釉を施す。残存部は1/2程である。

22は小型の甕で、体部は内弯、口縁部は外反し、端部は厚く上面が扁平な玉縁状を呈する。底部・体部・口縁部内外面は回転ナデである。内外面全体に鉄釉施釉後、口縁部に灰釉を施す。体部外面下端と底部内外面に砂が付着する。残存部は1/3程である。

18・26・37は磁器で、18・37は肥前系である。18は椀で、内弯気味に立ち上がる。内面・外面は回転ナデで、高台は削り出しである。体部外面に呉須で施紋後、透明釉を施す。高台端部は露胎。残存部は4/5程である。26は皿で、内弯気味に開く。高台は削り出しである。見込みに呉須で施紋後、透明釉を施す。高台端部は露胎。37は椀で、体部が直線的に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。底部外面はナデ、底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ、高台は削り出しである。呉須で施紋後、透明釉を施す。高台端部は露胎。焼き継ぎの補修跡が残る。

36は半磁器の皿で口縁部は直線的に開く。内外面回転ナデ、蛇の目高台である。呉須で施紋後、全面透明釉を施す。高台底部外面・端部は露胎。残存部は1/2程である。

23～25、29・30は土師質の土製品で、24・25・29・30は泥面子である。中実で上面は型押し文様を施し、側面ナデ、底部はオサエである。文様はそれぞれ狐・漢字の「伊」・合わせ鶴、30は不明。23は泥面子の雄型で、底部外面はオサエ、内面の文様は青海波、側面外面はナデで中央に穴があく。泥面子より一回り大きく底部内面・側面外面に雲母が付着する。

（2） 瓦類（図版23）

平安時代の軒瓦（図36）は大きく平安時代中期と後期に分かれる。

平安時代中期の軒瓦（１～５）は、軒丸瓦は４種４点、軒平瓦は唐草文１種１点である。１・５は土壙11、２・４は　土壙15、３は江戸時代の土壙から出土した。

１は単弁蓮華文軒丸瓦で、中房に蓮子を配する。間弁は界線と接し、外区に珠文が巡る。接合は成形台による一本造り技法、調整は、瓦当部側面上半縦ケズリ、瓦当裏面は布目である。２は複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、中房が平坦で圏線が巡り蓮子は１＋６である。子葉が盛り上がり、外区に珠文が巡る。接合は瓦当部裏面上部に溝を付け、丸瓦を挿入し粘土を付加する。瓦当面に離れ砂を使用している。調整は、瓦当部裏面オサエ、側面は摩滅して不明である。３は単弁八弁蓮華文軒丸瓦で、中房が平坦で圏線が巡り、中央に「下」銘を配する。子葉が盛り上がり、間弁はＹ字形、外区に珠文が巡る。瓦当面は楕円形である。接合は瓦当部裏面上部に丸瓦をあて粘土を付加する。瓦当面に離れ砂を使用している。調整は、瓦当部側面上半縦ケズリ、下半横ケズリ、裏面縦ナデである。森ヶ東瓦窯跡出土瓦と同笵である。[註3] ４は単弁８弁蓮華文軒丸瓦で、中房が凹形、中心部は不明である。接合は瓦当部裏面上部に丸瓦をあて粘土を付加する。調整は、瓦当部側面上半縦ナデ後横ケズリ、下半横ケズリ、裏面縦ナデである。栗栖野瓦窯跡[註4]・森ヶ東瓦窯跡[註5]・安井西裏瓦窯跡[註6]に同文がある。

５は均整唐草文軒平瓦で、唐草が中心から両側に３転する。主葉が巻き込み、支葉が取り付く。外区に珠文が巡る。曲線顎。調整は、顎部凸面横ケズリ、裏面ナデである。同文例は栗栖野瓦窯跡[註7]にある。

平安時代後期の軒瓦（６～10）は、軒丸瓦は１種１点、軒平瓦は唐草文２種２点、剣頭文２種である。平安時代の整地層から出土した。

６は軒丸瓦で内区は不明、外区に珠文が巡る。調整は不明である。

７は唐草文軒平瓦で、主葉が大きく巻き込む。瓦当部成形は半折り曲げ技法で、調整は瓦当部端部横ケズリ、顎部凸面横ケズリ、裏面ナデである。８は唐草文軒平瓦で、主葉が緩やかに回転して巻き込み、取り付いた支葉も巻き込む。外区に珠文が密に巡る。調整は瓦当部側面ナデ、顎部凸面横ケズリである。９・10は剣頭文軒平瓦で、曲線顎である。瓦当部成形は折り曲げ技法である。９は瓦当面凹部に布目があり、調整は、瓦当部横ケズリ、顎部裏面オサエ、曲げじわがある。10の調整は、瓦当部凹面横ナデ、顎部凸面ケズリ、裏面横ケズリ。平瓦部凸面横ナデである。

安土・桃山時代の軒瓦（図37）は、軒丸瓦は３種10点、軒平瓦は２種２点、道具瓦は２種３点である。すべて溝７から出土している。12～16・18・19は金箔瓦である。

11は軒丸瓦で内区の文様は不明、周縁内側は六角形である。調整は瓦当部側面は横ナデ、裏面はナデである。12は軒丸瓦の瓦当周縁部上部で内区の文様は不明。接合は瓦当部裏面上部に、横方向に数本のカキメを入れて、丸瓦をあて粘土を付加する。調整は、瓦当部凸面は縦ケズリ後、瓦当周縁は横ナデ後、共にミガキである。周縁部に少量の漆や金箔が残存する。13は右巻きの巴文軒丸瓦で、外区はやや大ぶりな珠文が巡る。調整は、瓦当部側面下半横ナデ、裏面ナデである。瓦当部全面に少量の金箔や漆が残存する。14は軒丸瓦の文様部分で、右巻きの巴文である。金箔が少量残存する。15・16は菊花文軒丸瓦で上下の二重菊、共に瓦当面全面に少量の金箔が残存す

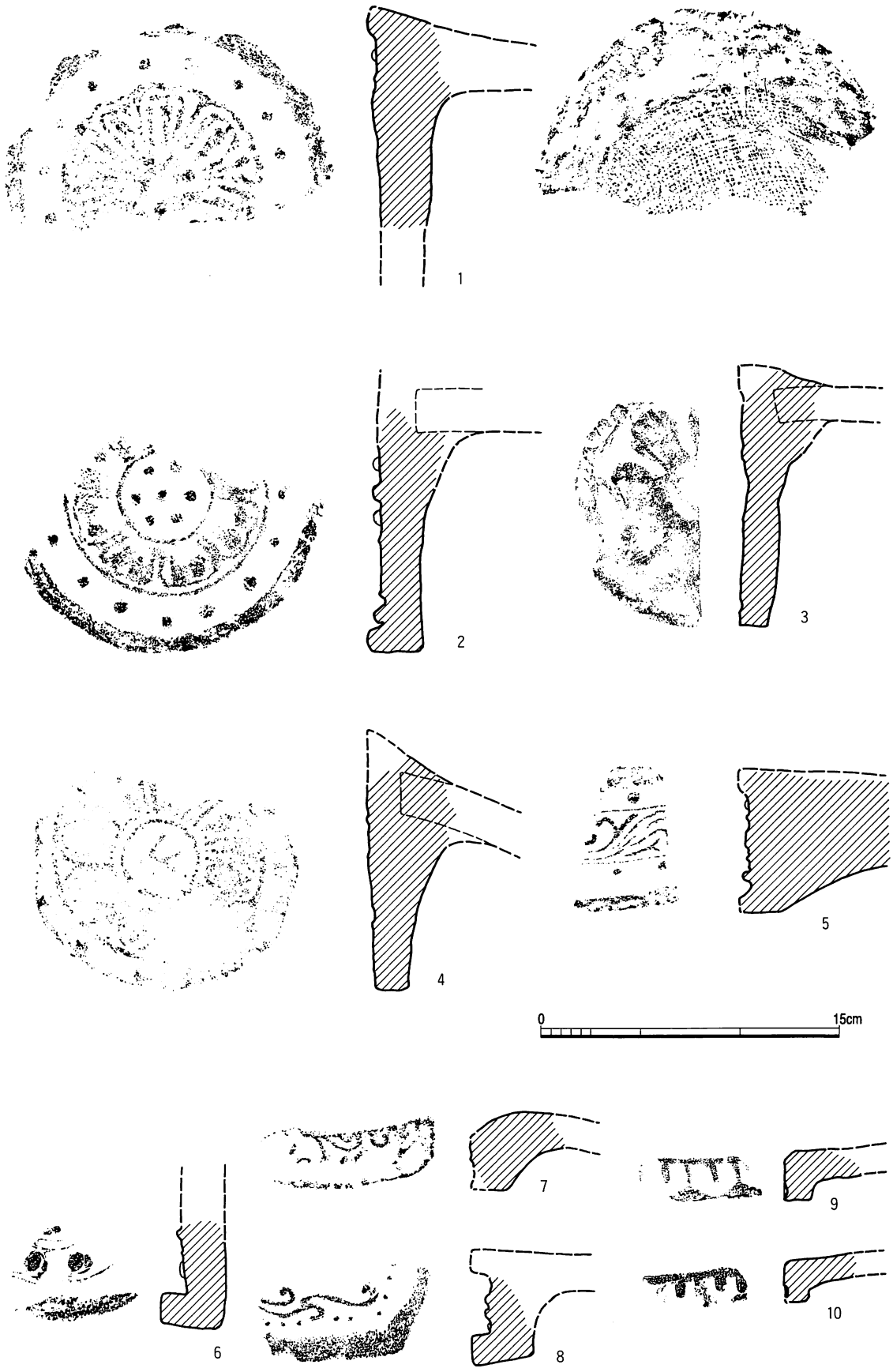


図36　出土軒瓦（平安時代）拓本・実測図（1：3）

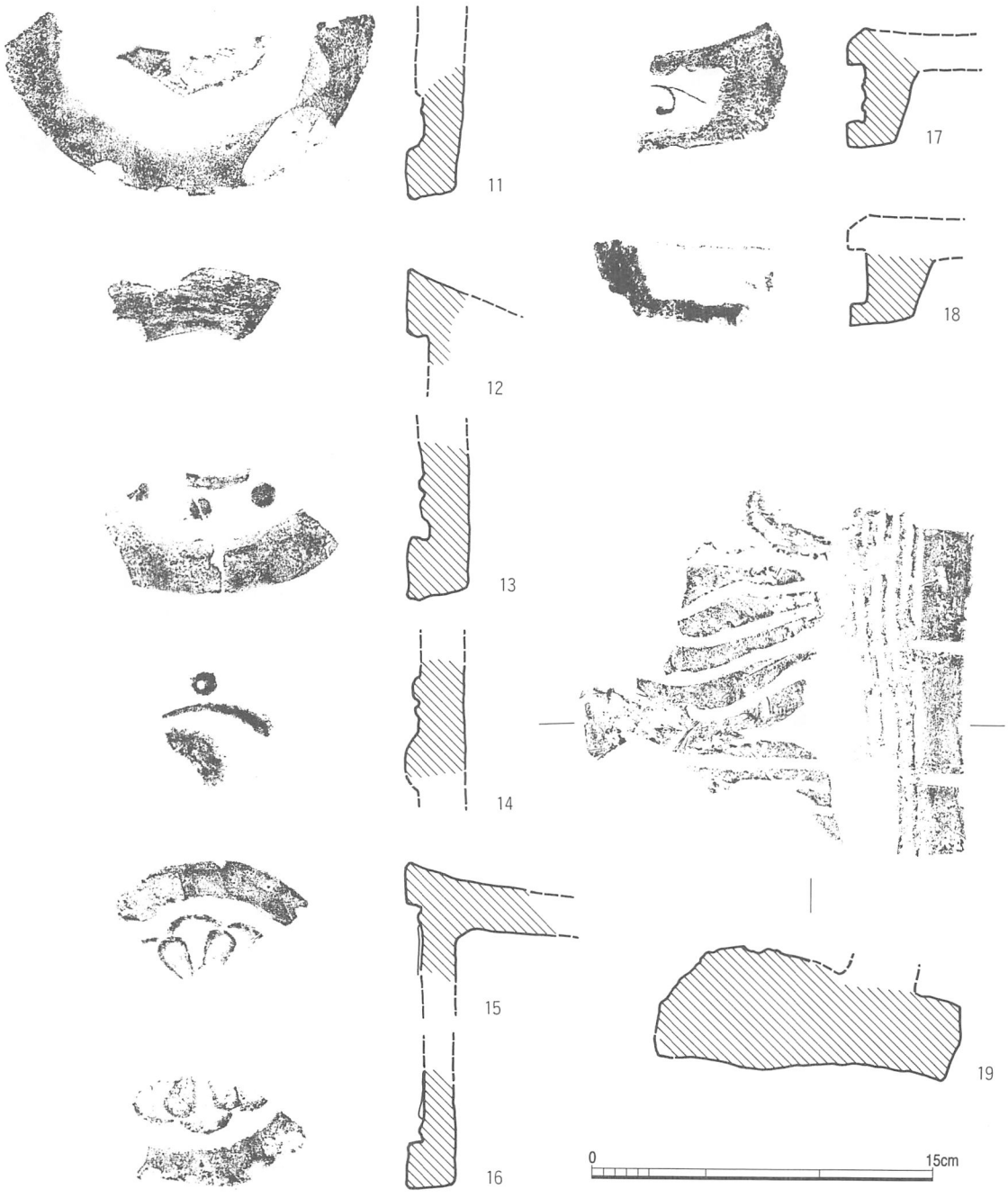


図37　出土軒瓦・鬼瓦（安土・桃山時代）拓影・実測図（1：3）

る15は瓦当部裏面に丸瓦をあて、粘土を付加して接合する。調整は、瓦当部凸面は縦ケズリ、凹面は横ナデである。16の調整は瓦当部側面は横ナデ、裏面はナデである。

17は唐草文軒平瓦で主葉は内に巻き込み、支葉はそのまま延びて周縁に付く。段顎である。瓦当部成形は平瓦凸面に粘土を貼り付ける。調整は、顎部凸面・裏面ヨコナデ、側面ヨコケズリである。18は軒平瓦で内区の文様は不明。段顎で、瓦当部成形は顎貼付技法である。瓦当貼付部分には横方向に４本のカキメがある。調整は、顎部凸面横ナデ・裏面オサエ後ヨコナデ、側面ヨコケズリである。周縁部に金箔や漆が残存する。

19は鬼瓦の一部と考えられ、少量の金箔や漆が残存する。

4．まとめ

大内裏における宮内省は、陽明文庫『宮城図』[註8]や『大内裏図考証』[註9]に記載されている内容から、太政官の東、大炊寮の西、主水司の南、廩院の北に位置し、方四十丈あったことが知られている。宮内省の四至に関する調査は今回が初めてであるが、『平安宮Ⅰ』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊）では、太政官跡、中務省跡、民部省跡の調査成果として、それらの西面築地は同一線上にあり、太政官北面築地は春日小路宮内延長路南築地と同じ位置にあることを確定している。そして、これらのことと文献史料から、太政官の東西幅は約57丈、南北幅は約40丈、南面築地は大炊御門大路宮内延長路の北築地線上にあると想定している。この成果をふまえて、宮内省南面築地が太政官南面築地と同一線上にあると推定すると、宮内省南面築地も大炊御門大路宮内延長路の北築地線上にあると考えることができる。このことから今回は、調査区内に推定される宮内省の南面築地や外溝、路面などの遺構検出を中心に調査を行なった。

平安時代では各時期の遺構を検出したが、築地や外溝、路面は削平されていて検出できなかった。しかしながら平安時代中期後半から後期にあたる東西溝が、南面築地心から南へほぼ3尺(約0.9m）のところに位置しており、構築時の築地の南端ラインと一致すると考えることができる。また内裏を含め宮内は、たびたび火事に見舞われている。『中右記』[註10]によると大治二（1127）年二月十四日、醤司小屋から出火し、宮内省は陰陽寮、勘解由庁、園韓神社、神祇官、八神殿、郁芳門などと共に焼失している。また『玉葉』[註11]では、安元三年（1177）四月二十八日条に、五条あたりから出火した火事で、「東富小路、南六條、西朱雀以西、北大内、併以焼亡」とあり、大極殿や八省院を含む大内裏、公卿家など左京の三分の一が焼亡したことになる。この火事は「太郎焼亡」と呼ばれ、これを最後に、ほとんどの官衙は再建されることなく消滅し、大内裏の荒廃が進んでいくのである。調査地中央北よりで検出した瓦類の混じった平安時代後期の整地層は、このような過程の中で行われたのであろう。

室町時代後半（15世紀）の遺物を包含した整地層は、調査区南よりで検出した。1996年の二条児童公園内の発掘調査で検出した類似の層からは、安土・桃山時代の遺物が包含しているとあるが、今回のこの層からは、安土・桃山時代の遺物は確認できなかった。しかし、この層の上面で検出した遺構に安土・桃山時代の東西溝がある。調査地北方には、豊臣秀吉によって築かれた聚楽第や大名屋敷があったことから、この溝は、聚楽第を含む秀吉のこの時期の大きな京都改造事業の一部ではないだろうか。

江戸時代に入ると、二条城や京都所司代下屋敷の造営でこの辺りは開発がすすんでいくのである。この時代の遺構は後期のものがほとんどであり、当地は京都所司代下屋敷の東限である日暮通内にあることから、これらの遺構、遺物は下屋敷に関連するものと考えられる。

また、弥生時代の遺物や同包含層は二条城北遺跡、古墳時代の遺物は聚楽遺跡との関連と捉えることができる。

註１　辻　純一「太政官跡」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』㈶京都市埋蔵文化財研究所　1983年

註２　高 正 龍「平安宮太政官跡」『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』㈶京都市埋蔵文化財研究所　1996年

註３　梶川敏夫「森ヶ東瓦屋跡立合調査　図30-３」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-１』㈶京都市埋蔵文化財研究所　1978年

註４　「図版９　洛北の窯（３）-44」『木村捷三郎収集瓦図録』㈶京都市埋蔵文化財研究所　1996年

註５　註３に同じ（図30-１）

註６　田中利津子他「平安京右京二条四坊・安井西裏瓦窯跡　図74-９」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』㈶京都市埋蔵文化財研究所　1999年

註７　註４に同じ（図版11　洛北の窯（５）-77）

註８　『陽明叢書　記録文書篇　別輯』「宮城図」思文閣出版　1996年

註９　『改訂増補　故実叢書　28巻』「大内裏図考證　第二十六」明治図書出版　1993年

註10　『増補　史料大成　第13巻』「中右記五」臨川書店　1974年

註11　『玉葉　巻第二十三』東京活版　1906年

参考文献

・『平安宮（Ⅰ）』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊　㈶京都市埋蔵文化財研究所　1995年

・『平安京提要』㈶古代学協会・古代学研究所　角川書店　1994年

Ⅲ．栢ノ杜遺跡

1．調査経過

調査対象地は、山頂近くに上醍醐寺の御堂が建ち並んでいることでよく知られている、醍醐山の西側やや南の山裾の丘陵部に位置しており、京都市伏見区醍醐柏森町31-1・3に所在する。醍醐山山頂付近から下醍醐寺がある西側山麓一帯は、醍醐寺境内である。栢ノ杜遺跡が所在する柏森町の東半部も醍醐寺旧境内に含まれており、広大な境内では、南西角付近に位置している。

調査対象地の北東隣接地は、史跡醍醐寺境内栢ノ杜遺跡であり、その北側には　醍醐寺子院の一つである真言宗醍醐派の金剛王院、一言寺が現存しているが、調査対象地の東の山側を含む他の三方は宅地化している。南側から西側は、京都市醍醐南市営住宅となっている。調査対象地の面積は、2875m²程である。

今回の発掘調査は、史跡醍醐寺境内栢ノ杜遺跡の南西隣接地において、栢ノ杜遺跡の広がりの有無を把握すること、いわゆる遺跡の範囲確認が主な調査目的である。史跡内における既発掘調査は1974年に鳥羽離宮跡調査研究所によって実施[註1]されている。民間による宅地開発に伴う発掘調査ではあったが、八角円堂とその南隣りに方形堂及びそれらに関連した園池を有する庭園跡など、重要性の高い種々の遺構を検出するなど大きな成果を上げている。

既調査によって検出された八角円堂跡は、『醍醐寺雑事記』に記されている源師行が久寿２年

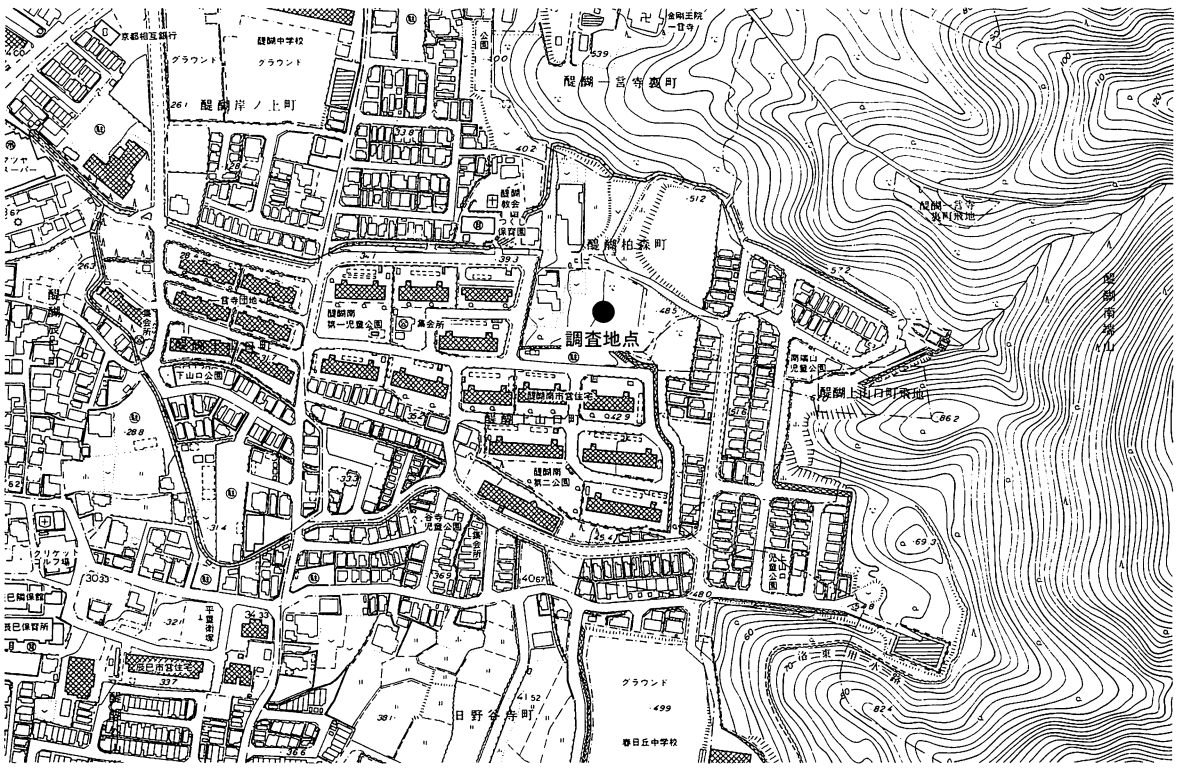


図38　調査位置図（1：5000）

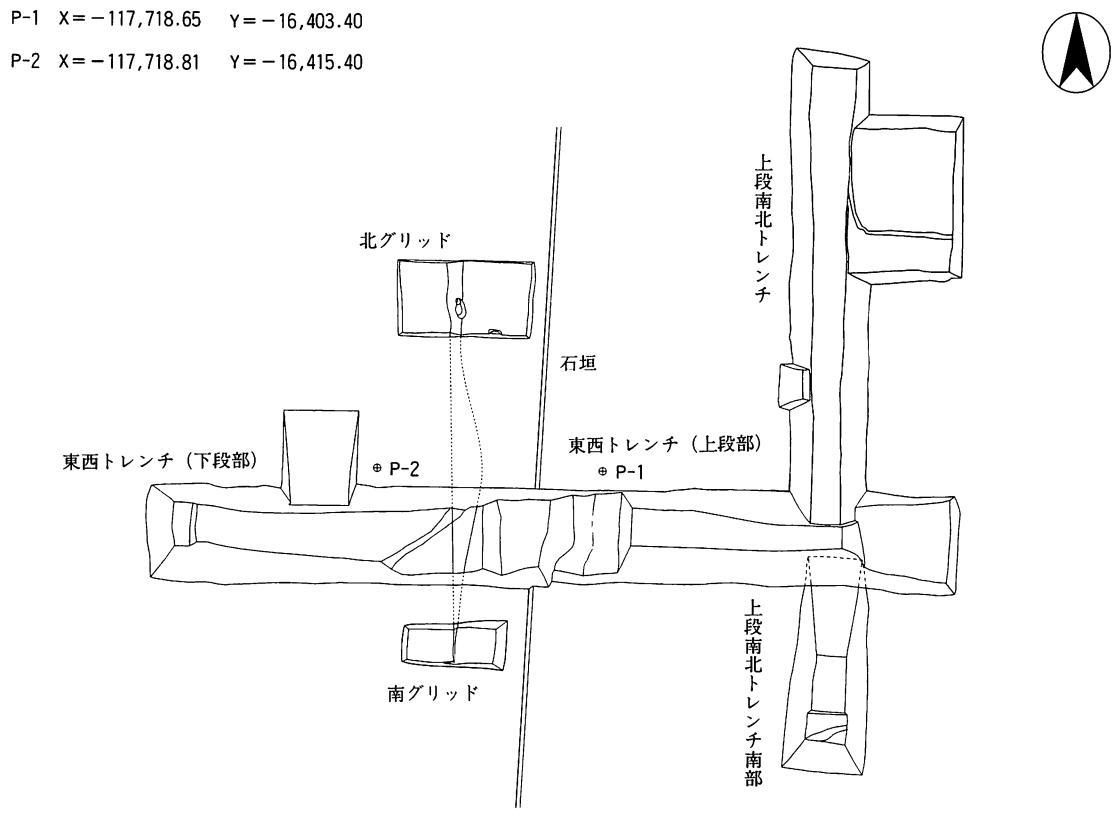


図39　調査区位置図（1：400）

（1155）に建立した大蔵卿堂（栢杜堂）に、また方形堂は俊乗坊（源）重源が建久6年（1195）に建立した九体丈六堂に比定できることが明らかとされた。このように栢ノ杜遺跡の重要性が確認された結果、1973年の発掘調査地全域他加えて醍醐寺境内栢ノ杜遺跡として、1983年に国の史跡に追加指定された。

今回の調査対象地となっている史跡南西隣接敷地は、東半と西半はそれぞれほぼ平坦だが、中央部付近に小規模な石垣を伴う、比高差4m程を測る南北ラインの段差部が存在しており、地勢に沿って西半が低い。東半の上段部では、1995年に京都市埋蔵文化財調査センターによって試掘調査が実施[註2]されている。しかし、小規模なトレンチ調査であったためか、掘削深度を確保できずに、近世以降の厚い整地土層に阻まれ、地山等も把握できなかった。またさらに目的の遺構面には、土石流がかぶっている可能性が高いと推定されていた。

このため今回の調査では、諸々の条件から試掘調査同様のトレンチ調査とせざるを得なかったのだが、地山及びその直上に広がると見られる整地土層等の検出深度を考慮し、トレンチ幅は通常の試掘調査よりもやや広い幅で設定することとした。また検出遺構の広がりに応じて、必要な部分に拡張調査区を設けて、遺跡の遺存状態をより明確に把握していくことにした。実際の発掘調査作業は、2001年11月30日から開始し、同年12月26日に終了している。

今回実施できた発掘調査では、八角円堂、方形堂等の基盤土層に連続すると推定できる、平安時代末期の整地土層及びその西限（端）を検出し、またその整地土層上面で成立していた平安時代末期から鎌倉時代の複数の遺構を検出している。栢ノ杜遺跡は、史跡の南側から西側へ広がっ

ていることが明らかとなった。またその寺域範囲についても、ほぼ把握することができた。以下では、その調査成果の概要を報告する。

2．地層と遺構

調査対象地は、先にも記したが現地表面はそれぞれほぼ平坦だが、高い東半と低い西半の間には、小規模な石垣を伴う段差部（崖）があり、東西の比高差は4m程を測る。この段差は東半に厚く積み上げられた、近世初頭以降と推定される整地土層によって、より大きく造りだされた人工的な段差部（崖面）である。

高い東半側では、厚さ0.2m前後の表土層の直下で、その整地土層の上面が検出される。この整地土層は、土質やその色調及び含まれている礫の大小や多少によって幾層かに分層できるが、大半の土層は砂泥土あるいは泥砂土に礫が含まれている、比較的よく似た土層によって構成されている。

これらの整地土層は、各土層とも西側あるいは南側に向かって、下りながら序々に厚さをまして行く。この様な整地土層群の様相は、敷地の北東から順次土を入れて、西側から南側を厚く高く積み上げていき、その上面に平坦面を造り出そうとした、積土による一連の整地作業（地業）が行われたことを示しているものと理解できる。掲載した地層断面実測図上では、これらの整地土層群をまとめて整地土層2-Aとした。

上段の西側段差部に現存している石垣は、調査の結果からは、上述の整地土層と一連で構築されたものと判断される。この石垣は使用石材が比較的小型であるが、醍醐寺に現存している安土・桃山時代末期に豊臣秀頼の寄進により築造された、幾つかの堂宇の基礎周辺の石垣やその周辺施設の石垣等に、使用石材の規模が異なるものが多いが、石垣面の様相は近似した一面を持っている。長軸を縦方向に使用する例を含んだ石材の積み上げ方法にも、共通した面を持っている。このような点を見ると石垣の様相は、その築造年代と東側の厚い整地土層2-Aの形成年代をも示している可能性が高い。

低い西半側においても、表土層下に整地土層と見られる土層群が検出される。東半側の厚い整地土層2-Aに比べると、併せても1/2程度かそれ以下とかなり薄いものである。これらの土層群も、混入礫群に差異はあるものの土質に大きな差異は見られない。その堆積状況からは、整地土

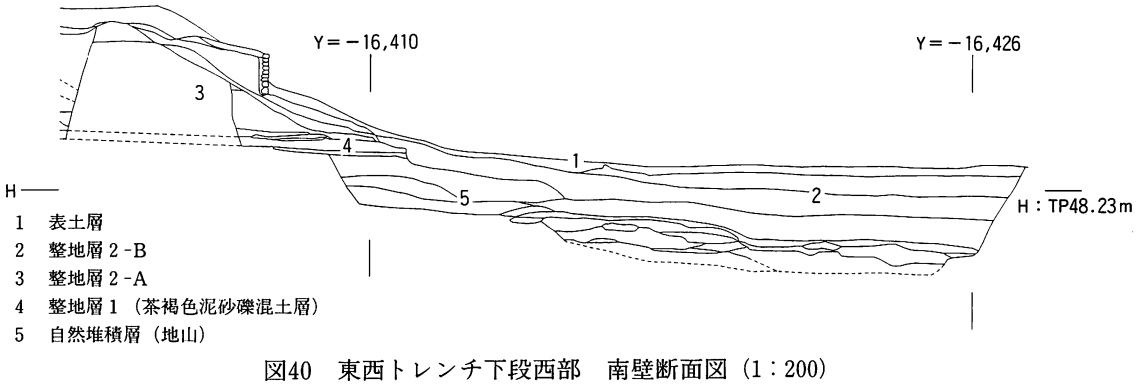
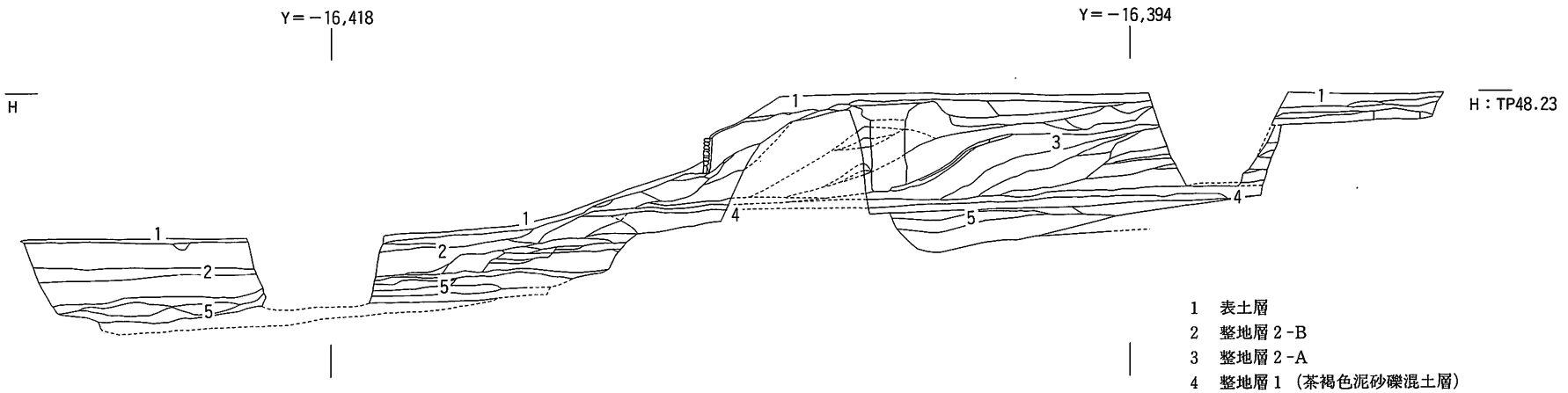
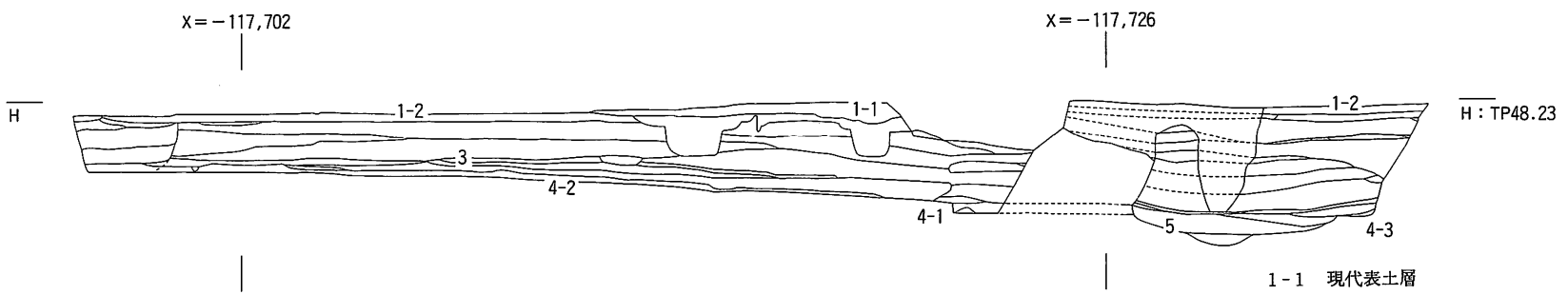


図40　東西トレンチ下段西部　南壁断面図（1：200）



東西トレンチ北壁断面図

1　表土層
2　整地層２-B
3　整地層２-A
4　整地層１（茶褐色泥砂礫混土層）
5　自然堆積層（地山）



南北トレンチ東壁断面図

1-1　現代表土層
1-2　表土層
3　整地層２-A
4-1　整地土層１上層（礫少ない）
4-2　整地土層１（茶褐色泥砂礫混土層）
4-3　整地土層１（茶褐色粘質土礫混土層）
5　東西溝状遺構１

図41　東西トレンチ北壁・南北トレンチ東壁断面図（1：200）

層２-Ａと同様に一連の作業によって形成された整地土層群と見て良いだろう。これらの整地土層群を、まとめて整地土層２-Ｂとする。

整地土層２-Ａと整地土層２-Ｂ及び段差部の石垣に関しては、全体としても一連の作業過程によって形成されたものと見られる。切り合いの前後関係からは、整地土層２-Ａをまず最初に積み上げ、次に整地土層２-Ｂを積み上げた後に、段差部石垣を構築したものと理解される。

基本的には、両整地土層の上面では平面調査を行っていないので、整地土層上面に形成されていたであろう主体的な遺構群については言及できないが、東半上段部では石垣沿いに南北方向の低い土塁状の遺構を断面調査に於いても確認している。この遺構は、表土面にも影響を残しており上段部の西辺石垣沿いでは、表土面に於いても南北方向に帯状の若干の盛り上がりが認められる。上段南辺から下段南辺及び下段西辺部に於いても、表土面に１～２m程度の幅で帯状の盛り上がりが認められる。これらも、表土層下に土塁状の遺構が埋没していることを示しているものと推測される。残存が推測されるこれらの遺構については、土塁状と表現したが築地等の基底部の可能性も考え得る。両整地土層と一連で構築された遺構と推測されるが、将来の平面調査を待って遺構性格等を理解したいと考えている。

これらの整地土層や石垣及び土塁状遺構などの築造年代に関しては、整地土層最上層とその上面及び表土層からは、近世以降の遺物が少数ながら出土しているが、整地層上層から下層は、平安時代から鎌倉時代の土器類や滑石の羽釜片等の遺物が少数出土しているにとどまり、出土遺物からの時期推定はかなり難しいが、概ね近世以降と見ることはできるだろう。上段の整地土層２-Ａの地業規模の大きさ、一連で構築されたと見られるその西辺の石垣の様相等からは、近世の内でも初頭の安土・桃山時代頃と考えられ、豊臣期に行われた醍醐寺境内での、一連の堂宇建設等の工事と関連した、同時代の構築物ではないかと推測している。

薄い間層の見られる部分も多いがこの近世整地土層下に、平安時代末期の整地土層と見られる茶褐色泥砂礫混土層が、上段部から段差部に近い下段部東辺にかけて広がっている。この茶褐色泥砂礫混土層は、今回設定した全調査区で確認している。茶褐色泥砂礫混土層は、自然堆積層である地山直上に行われた積み土による整地土層と理解される。上面は、幅の広い平坦面が階段状に形成されており、上面からは平安時代末期から鎌倉時代の遺構が検出される。同層内からの出土遺物には、主に平安時代前半期に比定できる土器片が少量見られるだけだが、最上層部及び上面からは平安時代前半期の遺物の他に、平安時代末期から鎌倉時代頃に比定できる土器片や瓦片が少量ではあるが出土が見られる。遺物の出土状況からは、同層が平安時代末期に形成された土層であることが理解できる。この茶褐色泥砂礫混土層を、整地土層１とする。

整地土層１は、下段部に設定した調査区、北グリット、東西トレンチ、南グリットにおいて、石垣ラインから西へ４m程の位置で、西限を南北ラインで検出している。西限部は、関連施設などは残存していなかったが、比高差0.5m程の人工的な印象が強い小崖状を呈している。

整地土層１の南限部は、明確には確認できなかった。しかし、上段部の南北トレンチの南部において、整地土層１の上面から成立している、やや南へ振れるが東西方向の溝状遺構１を検出し

ている。整地土層１の主体を成す茶褐色泥砂礫混土層は、その溝状遺構１の北肩で止まるが、溝状遺構１の南肩部で茶褐色粘質土礫混とした、やや土質は異なるが色調が非常に良く似ている土層を検出している。同層は茶褐色泥砂礫混土層とは、土質がやや異なるとはいえ地山直上土層であり、茶褐色泥砂礫混土層と同様に地山へ直接的に積み上げられた一連の整地土層の一部である可能性が高く、整地土層１とまとめて見ておきたい。この土層は、調査区南壁際でわずかに検出したに止まるが、壁外の南へ広がっていることは明らかである。しかし、調査対象敷地の南限に現存する崖面（近世初頭に原形が造り出され、現代の宅地造成で崖面下部が削られてより高くなったと見られる崖面だが、原地形もこの付近から南側へ傾斜がきつくなると推測される）からは同層もその崖面かあるいはその近くで広がりがとどまっていると考えられる。同土層の南端が、栢ノ杜遺跡に関連した整地土層１の南限と推定される。

この整地土層１は、上段部に設定した南北トレンチ及び同トレンチの東拡張区等での検出状況からは、史跡となっている北方から東方へ連続して広がっていると見て良いだろう。上面は、低くではあるだろうが１段あるいは２段程高くなり、史跡内の方形堂、八角円堂の基盤面へと連続していくものと推測される。

整地土層１とした茶褐色泥砂礫混土層は、地山直上に形成された寺院跡である栢ノ杜遺跡の基盤をなす整地土層であり、その西限及び推定南限は、寺域の西限と南限と理解して良いだろう。

なお地山土層は、主に東西トレンチで確認している。地山土層の最上層は黒褐色泥砂土に大小の礫が多量な含まれている土層である。下方へ行くに従って色調が濃くなり淡褐色を呈する土層が主となる。混入礫はより多くなり、礫層とすべき土層が中心となっていく。以下では、実測図を掲載した調査区を中心に、調査区ごとに検出遺構を概述する。

上段南北トレンチ東拡張区では、土壙、ピット、溝、落ち込み等の各種の遺構を検出している。土抗１は、平面形は少し変形した長円を呈し長軸は北東方を向く。長軸は1.2m、短軸は0.7m程を測り、深さは検出面から0.2mほどである。構内からは、平安時代の土師器坏、甕片ほか少数の遺物が出土したにとどまる。ピットは、平面形がほぼ円形で、径10数cmから20数cm、深さが10～20cm程を測るものが主である。柱当たり等を確認出来たものはない。溝１は、調査区南部で東壁から西方へ直線的に延び、途中から南方へまわり込んで南壁外へ直線的に延びる。幅は20cmから30cm程で、

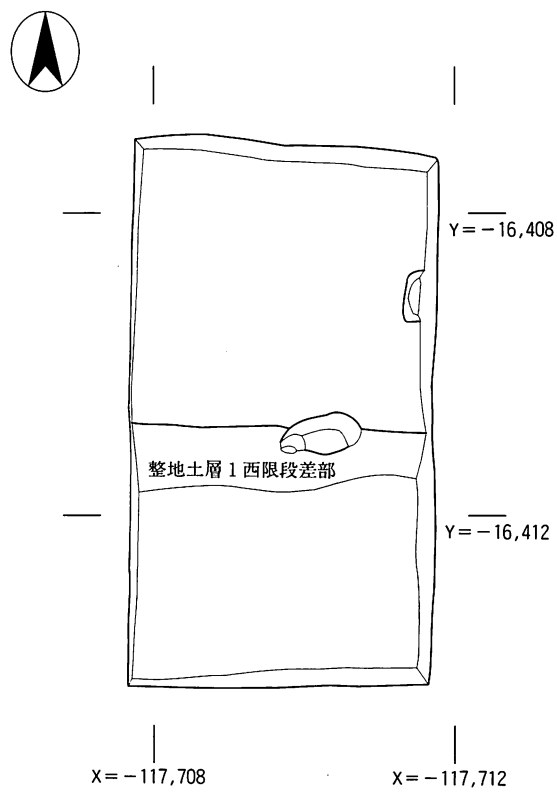


図42　下段北グリッド平面図（1：100）

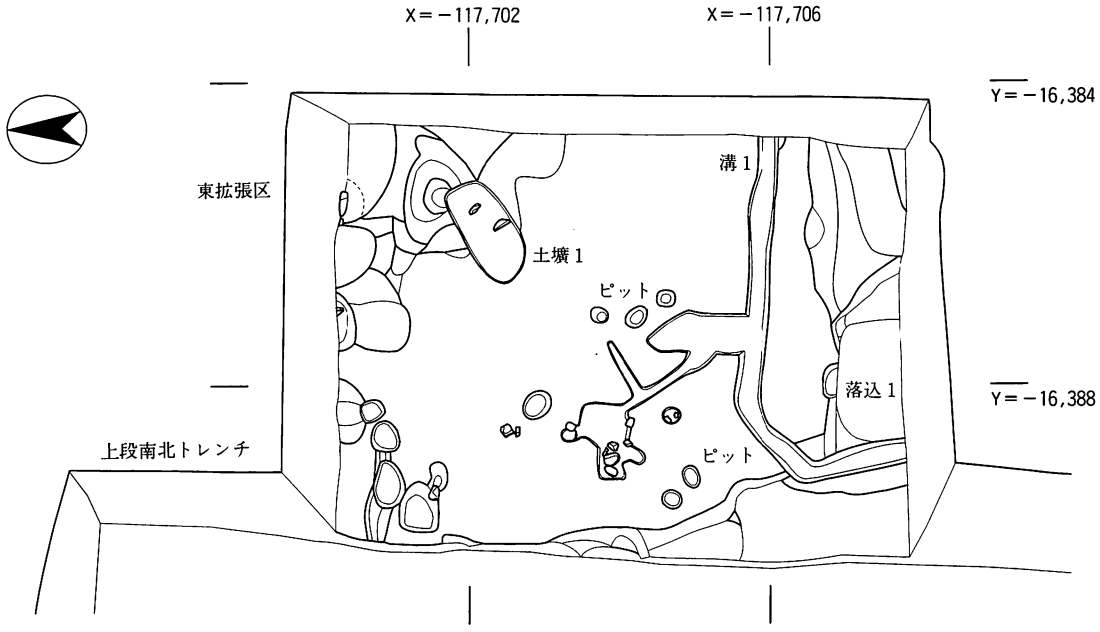


図43　上段南北トレンチ東拡張区平面図（1：100）

深さは10cmから15cm程である。敷地内の区画との関連も考えられるが、断定的理解は今のところ難しい。構内からは、平安時代以降の土師器皿の小片が出土している。

これらの遺構内の堆積土は、茶褐色から褐色の泥砂土に礫が多く含まれた、ほぼ共通したものである。出土遺物は、全体的に少なく小片が主であり判断が難しい。土器類では、混入品と見られる平安時代前半期のものほうが多いが、平安時代末期から鎌倉時代と見ている土師器皿片や瓦類が、遺構の埋没年代を示していると理解される。

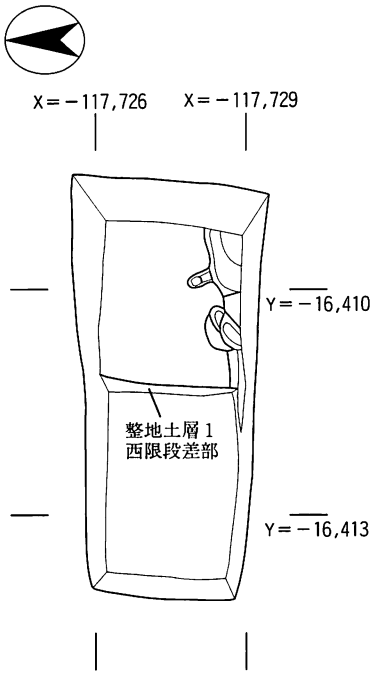


図44　下段南グリッド平面図（1：100）

落ち込み1は、成立面は他の遺構と同様に整地層1上面であるが、溝1に切られている。平面形は、検出部分では径1.7m程の半円形を呈するが、南側は南壁に入り込み全形は不明である。浅い皿状を呈する遺構で深さは深い部分で10cm程である。遺構内堆積土は、上層部には炭片がかなり多く入っており全体も黒灰色を呈した泥砂土だが、下層は暗褐色の泥砂土に礫を多く含んだ土であり、先に記した遺構群の遺構内堆積土と類似したものである。出土遺物には、平安時代前半期の土器片も混じるが、少数ながら平安時代末期から鎌倉時代の土師器皿片が見られるので、遺構の成立年代もその頃と理解してよいだろう。

下段南グリッドでは、整地土層1の西限段差部を検出している。段差部の肩ラインは直線的で南北方向に延びる。西側へ下る側壁は、かなり急角度であり、斜面下の下段面も西方へ緩く下っている。段差部が人工的に造り出され印象は明瞭だが、側壁保護施設等の痕跡は見い出せなかった。しかし、

元来は石積み等の施設が存在していた可能性は高い。検出している肩部の中程で西半を切られたような状況で、ピット状の遺構の残欠とも見える小穴を検出しているが、肩部の小さな崩れと見ている。

下段南グリッドでも、整地土層１の西限である段差部を検出している。段差部の形状は、下段北グリッド及び東西トレンチ下段での検出部分と近似したものである。しかし、この調査区での段差部は、北壁から南壁近くまでは北側の調査地から連続する、南北方向の直線的ラインで検出されたが、南壁近くで西へ折れ曲がり0.6m程でさらに南へ折れ南壁外へ延びる。ラインの折れ曲がり部分は、段差部の西側への小さな張り出し部となるものと推定される。寺域南西角に近い位置に階段等を伴う出入り口が存在していた可能性が考えられる。

南壁沿いで、整地土層１上面から成立している落ち込み１を検出している。不定形な形状の凹みである。凹みの下部は地山に達している。上部は北側から東側にかけて極浅く広がっている。堆積土には、茶褐色泥砂礫混土に灰や炭などが多く含まれているものである。何かを焼成した後の廃棄物を処理した掘り込みという印象である。出土遺物は、平安時代末期に限定できるものを含んでいるが、新相と見られるものも共伴出土しており平安時代末期から鎌倉時代初頭の時期幅で理解しておきたい。

３．遺　　物

今回の発掘調査では、整地土層１内、同層上面、同層上面から成立している遺構、整地土層２-Ａ・Ｂ、表土層などから飛鳥時代後半期、平安時代前半期、栢ノ杜遺跡に直接関係する平安時代末期から鎌倉時代、安土・桃山時代から江戸時代以降など、各時代に比定できる各種の土器・陶磁器類、瓦類、石製品等が出土している。出土数では、平安時代末期から鎌倉時代と見ている遺物が他より少し多い印象はあるが、各時期共に出土遺物は少数に止まっている。以下では、図示した個々の資料の概説を中心にして、出土遺物を概述しておく。

須恵器坏蓋（図版26-１）は、下段北グリッドの整地土層２-Ａから出土している。口縁部小片であるが内面のかえり部も残存している。復元口径や口縁端部からかえり部の形態的特徴から、奈良文化財研究所の土器分類名称で、坏Ｇとされている宝珠形つまみが付く小型の坏蓋の破片と判断でき、同形式では新しい型式に属する資料と見られる。この須恵器坏Ｇ蓋の推定年代は、飛鳥時代後半の７世紀後半代である。

須恵器坏Ｂ蓋（図版26-２）の口縁部片、同-３の突帯の付く須恵器壷の体部片、同-４の小振りな須江器壷の体部片、同-５・６の黒色土器Ａ類坏あるいは碗の体部片等は、上段南北トレンチ東拡張部の整地土層１の最上層かその上面から出土している。これらの土器類は、それぞれの型式特徴とその年代観から、平安時代前半期に比定することができる。上段南北トレンチ東拡張部、上段南北トレンチ、東西トレンチ上段部などの整地土層１及びその上面からは、これらの他に平安時代前半期に位置付けられる、土師器坏、皿、甕、黒色土器Ａ類甕などの土器片も出土している。

緑釉陶器碗（図版26-７）は体部片であり、下段南グリットの落ち込み１上層から出土している。この緑釉陶器碗は、型式的特徴の看取が容易な口縁部や体部を欠失しているが、極薄い釉調やその発色、釉下の粗めなヘラ磨きの状態、体部径、器壁の厚さ、胎土などから９世紀代後半代の、やや大振りな山城産緑釉陶器碗片と見て良いだろう。

上述の飛鳥時代及び平安時代前半期に比定できる土器・陶器類は、史跡となっている平安時代末期以降の栢ノ杜遺跡とは直接関連する遺物ではない。しかし、これらの土器・陶器類は、栢ノ杜遺跡を含む当地近辺に、栢ノ杜遺跡に先行する古い時代の遺跡が存在していたことを示す資料と言える。

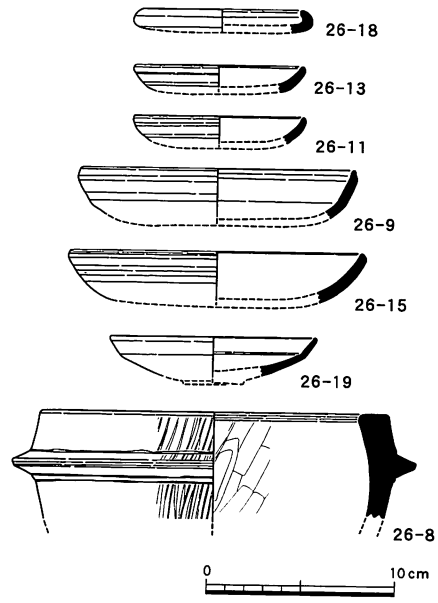


図45　下段南グリッド出土遺物実測図

滑石製の羽釜（図版26-８）は、下段南グリッドの整地土層２-Ｂへの混入品として出土している。このような石製羽釜は、京域では平安時代末期から鎌倉時代の資料との共伴出土例が多く見られる。新しい時代の土層への混入品としての出土ではあるが、栢ノ杜遺跡で同時代に使用されていた用具類であろう。

土師器皿（図版26-９・10）は、下段南グリッドの落ち込み１上層から出土している。同-11～18も土師器皿であり、同じ下段南グリッドの落ち込み１の中・下層から出土している。同-19は、輸入白磁皿であり、同じく下段南グリッドの落ち込み１の中・下層から出土している。落ち込み１内からの出土遺物は、出土層位による型式差がほとんど認められないのでまとめて記す。また、これらの土師器皿類の型式特徴は、同時代の平安京京域主流と共通するものであり、京域主流の土師器食器類と同じ生産地からの搬入品と見て良いだろう。

９～17は、土師器皿Ｎの大小、18はコースター形の土師器皿Acである。土師器皿Ｎは口縁部が少し丸みを持った三角形状を呈するものが主であり、口縁部外面に巡るまわしナデによる極浅い凹みも１段から２段のものが混在し、１．５段に見えるものも含まれている。全形は、立ち上がりの緩いものが多く京都Ⅴ期的様相のものが主であるが、細部の技法痕跡とその結果形態等は京都Ⅴ期新から京都Ⅵ期古へ過渡的様相を示していると言える。土師器皿Acは、小片であり型式特徴を看取することは難しいが、胎土や口縁部の折れ曲がり幅等からは、皿Ｎと同様の型式に属すると見て問題ないだろう。これらの土師器皿類は、型式要素の面から見ると京都Ⅴ期新から京都Ⅵ期古古相の幅には収まり、年代観に関しては所属型式の推定年代から、平安時代末期から鎌倉時代初頭頃と見ておく。共伴出土している輸入白磁皿（19）は、中国華南産の白磁であり京域での土師器皿類との共伴出土状況からみると同時期の資料と見てよいだろう。1974年に行われた史跡内の既調査においても、ほぼ同時代のものと見てよい壷、碗など華南産の白磁類がかなり出土している。

平安時代末期から鎌倉時代初頭頃に比定できる遺物は、上述の下段南グリットから出土してい

る他に上段南北トレンチや同東拡張区などの、整地土層１の上面及び上面の遺構内等から、土師器皿類や瓦類などが出土している。平安時代前半期の遺物が一定量出土している上段南北トレンチ東拡張区の落ち込み１からは、下段南グリットの落ち込み１等から出土している、京都Ⅴ期新から京都Ⅵ期古の土師器皿と同型式の土師器皿Ｎが少数出土している。瓦類とともに少数ながらこの地区の、整地土層１上面から成立している遺構の年代を理解できる重要な資料となっている。また、瓦類は、上段南北トレンチの北辺で整地土層Ａ上面から成立している、礫と近世以降の瓦類が数多く埋設されていた大形の掘り込みへの混入品、また各調査区の整地土層２Ａ・Ｂへの混入品としての出土が少数ながら認められる。平安時代末期から鎌倉時代の瓦類は、巴文の軒丸瓦等も見られるが小片のものが多く、当概報には掲載していない。

今回の調査で出土した平安時代末期から鎌倉時代の土器・陶磁器類や石製羽釜などは、醍醐寺の子院跡である栢ノ杜遺跡内で当時に使用されていた器物であり、瓦類は八角円堂や方形堂あるいは未発見の三重塔など栢ノ杜遺跡内の建物に使用されていたものであろう。

４．遺跡復元概念図について（図46）

今回の発掘調査では、寺域西限部をかなりの距離で直線状に確認するなどの成果を得られた。これらの成果と、史跡内の既調査によって検出されている建物等の遺構群との関係を理解すべく、両調査の成果を同一地図上に図示することによって、寺院跡である栢ノ杜遺跡の復元を試みた。しかし、今回の調査では、実測用に設定した基本ポイントの国土座標（日本国土座標第６座標系）上での位置を測量しており、調査区を地図上に正確におとすことは容易なのだが、1974年段階の資料には座標データがなく、地図上の絶対位置に図化することが難しく、方位についても誤差幅はかなりあるようである。このため既調査の遺跡の全体平面図を、復元に使用する地図と同縮尺とし、敷地の境界ラインや角及び地形の共通する部分の重なりを手がかりとして、地図上にトレースして図化することとした。このようにして作成した復元図を、遺跡復元概念図として図46に掲載している。

この復元図に示した寺域西限は調査事実であるが、南限は各種のデータを根拠とした推定ラインである。この復元図を点検、検討してみると、方形堂と八角円堂の西側正面を繋ぐほぼ直線のラインの方位が、西限ラインと微妙にずれていることが判る。これは図面の合成作業上生じたずれと考えられる。両ラインは本来的には、正確に平行していた可能性が高い。寺域とその内部施設は、正確な割り付け（設計図）の元に築造し建設されたものである可能性が高いことも推測できる。

敷地の北限ラインは不明確であるが、八角円堂北側を西流する現存の谷川北肩以北は、斜面がきつく高くなり尾根状の丘陵となっている。このことから現谷川あたりを寺域北限と考え、寺域内での両堂の位置をみると、方形堂が寺域の中央付近に位置していることが判る。方形堂の東西方向の中軸線が、寺域の中軸線に重なり位置する可能性を十分に考え得る。

そのように見て方形堂中軸線を西へ延長すると、中軸線に重なる位置に少し変形しているが細

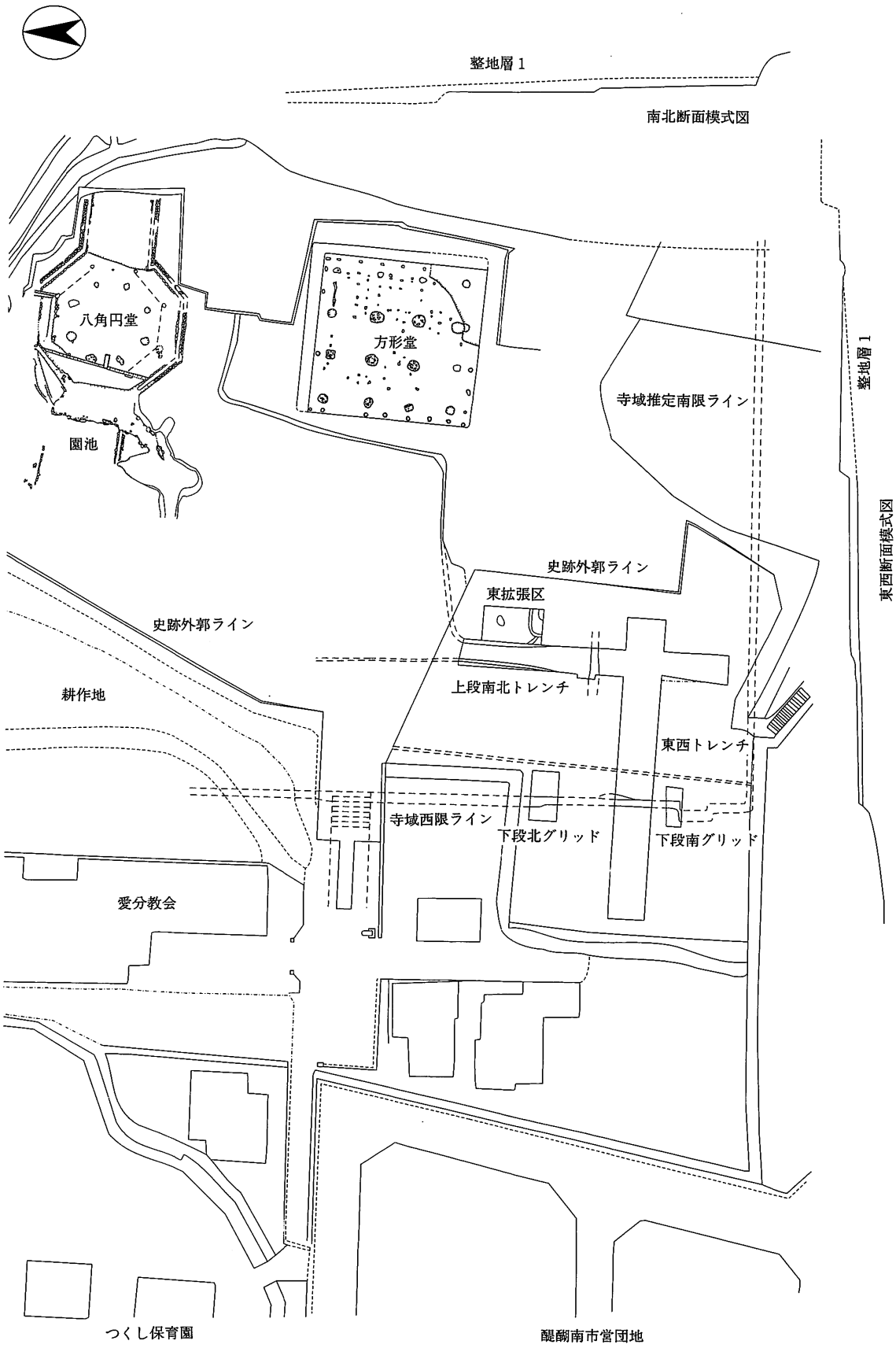


図46　栢ノ杜遺跡復元概念図（1：850）

い東西方向の道路が現存していることが判る。この小道は、現在も栢ノ杜遺跡へ至るメインアプローチとなっているが、栢ノ杜遺跡の創建に伴って設定された、寺院正面への参道であったとの理解も大過はないものと考えられる。

このよう理解からすれば、文献史料からは方形堂が八角円堂に比べると40年程後に建立されているが、八角円堂を初めとする創建段階で、すでに寺域及び諸施設は計画され割り付けられていた可能性がかなり大きいと考えられる。

栢ノ杜遺跡には、文献史料から既発見の堂宇の他に三重塔も存在していたことが指摘されている。しかし、既調査でも今回の調査でも、塔に関係するだろう痕跡は全く確認できなかった。今回作成した復元図を見ると、今回の調査対象地の東側隣接地となる方形堂の南側、推定南限までの間が大きな空地となることが判る。このような状況認識からは、方形堂の南側の未調査区には、未発見の三重塔が残存している可能性も推測できるだろう。将来の調査課題とすべき問題であるが、三重塔跡が旧知の復元図[註3]のごとく両堂の東側の山側高みに存在していたとしても、この地区には僧坊等の寺域内の別施設が検出される可能性が高い。

この復元図を検討する作業から、栢ノ杜遺跡とされる寺院跡の平面的復元を試みた結果からの寺院の想像図は、史跡北側の尾根状丘陵の北側に現存している醍醐寺子院の一つである金剛王院、一言寺に多くの共通点が見出せる。一言寺は、低地の西側からほぼ真東に延びる坂になった参道を登り、さらに寺域内のかなり高い階段を登りつめた平地端に、正面の山門が開いている。山門を入ると、平坦地の中央辺りはほぼ真東に延びる石畳みの通路となる。その東奥に位置する御堂は、山門から入った平坦地から、数段の階段を上がった数十センチ高い平坦地に建っている。通路の南側は小池を伴う園池となっており、北側には僧坊的な住職の役宅他の建物が建っている。現状では塔も無く御堂も一堂であり、栢ノ杜遺跡とは規模に若干の差が見られるが、基本的構造はかなり共通したものと考えられる。同じ醍醐寺の子院であり、醍醐山の西斜面の山麓部で一つの尾根線を挟み並存しているという、基本的立地条件が共通していることに起因しているものと理解される。

5．まとめ

今回実施した発掘調査は諸々の条件による限定から、少し規模の大きい試掘調査と成らざるを得なかったが、遺跡の西、南方向への広がりを確認するなど、主な調査課題はほぼ達成することができた。

調査対象地の東半の上段部から、西半の下段部の東辺地域にかけて広がっている、平安時代末期に形成されたと推定できる整地土層１を検出することができた。この整地土層１は、史跡となっている地域へも連続していることも明らかにできた。この整地土層１が、寺院跡である栢杜遺跡の基盤を成すと理解することができる。下段部東辺地域では、この整地土層１の西限となる、南北方向の直線的に延びる段差部を検出している。この結果、寺域の西限を明らかにすることができた。上段部における整地層１の南方への広がりや、現存する敷地南辺の崖面等との関係から、

寺域南限も大過の無い推測が可能となった。

今回の調査では、整地土層１上面で建物等の遺構は検出することが出来なかったが、1974年の史跡内の調査成果と合わせることによって、より具体的に寺域の規模、西側正面の山門の位置、三重塔の位置などの推定が可能となった。未調査地域における将来の発掘調査にとって、論理的で具体的な調査課題となるだろう。

このような調査成果から、史跡に指定されている地区は、平安時代末期から鎌倉時代の栢ノ杜遺跡の範囲から見れば、かなり限定された範囲に限られていると言えるだろう。史跡内の未調査区から遺跡内の未調査区における発掘調査の実施、及び遺跡全体の史跡化と保存が望まれる。

なお、醍醐寺旧境内という立地をも考慮し、近世初頭頃の地業と見られる大規模な整地土層２-Ａに関しても、西端の石垣及び整地層上面で成立しているであろう遺構の問題を含めて、解明が必要な遺跡である。推定年代からは、豊臣秀吉、同秀頼に関連する遺跡である可能性もあり、この近世遺跡を調査課題に組み込んだ栢ノ杜遺跡の発掘調査が必要であろう。また、出土遺物から想定される、飛鳥時代、平安時代前半期の下層遺跡についても、発掘調査による解明が必要であろう。

註１　杉山信三他『栢杜遺跡調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所　1974年

註２　『平成７年　京都市内遺跡試掘調査概報』京都市文化市民局　1995年

註３　京都市埋蔵文化財調査センター　梶川敏夫氏の作図による鳥瞰的視点での三次元的絵図による復元図である。

参考文献・資料

・『平安京提要』㈶古代学協会・古代学研究所　角川書店　1994年
・『醍醐寺新要録上・下』醍醐寺文化財研究所編　法蔵館　1990年
・編著中島俊司『醍醐雑事記』総本山醍醐寺　1973年
・『ふるさと醍醐』京都市醍醐小学校育友会視覚委員会編　京都醍醐ライオンズクラブ　1997年
・『京都市遺跡地図　台帳』京都市文化市民局　1996年
・『日本歴史地名大系27　京都の地名』平凡社　1987年

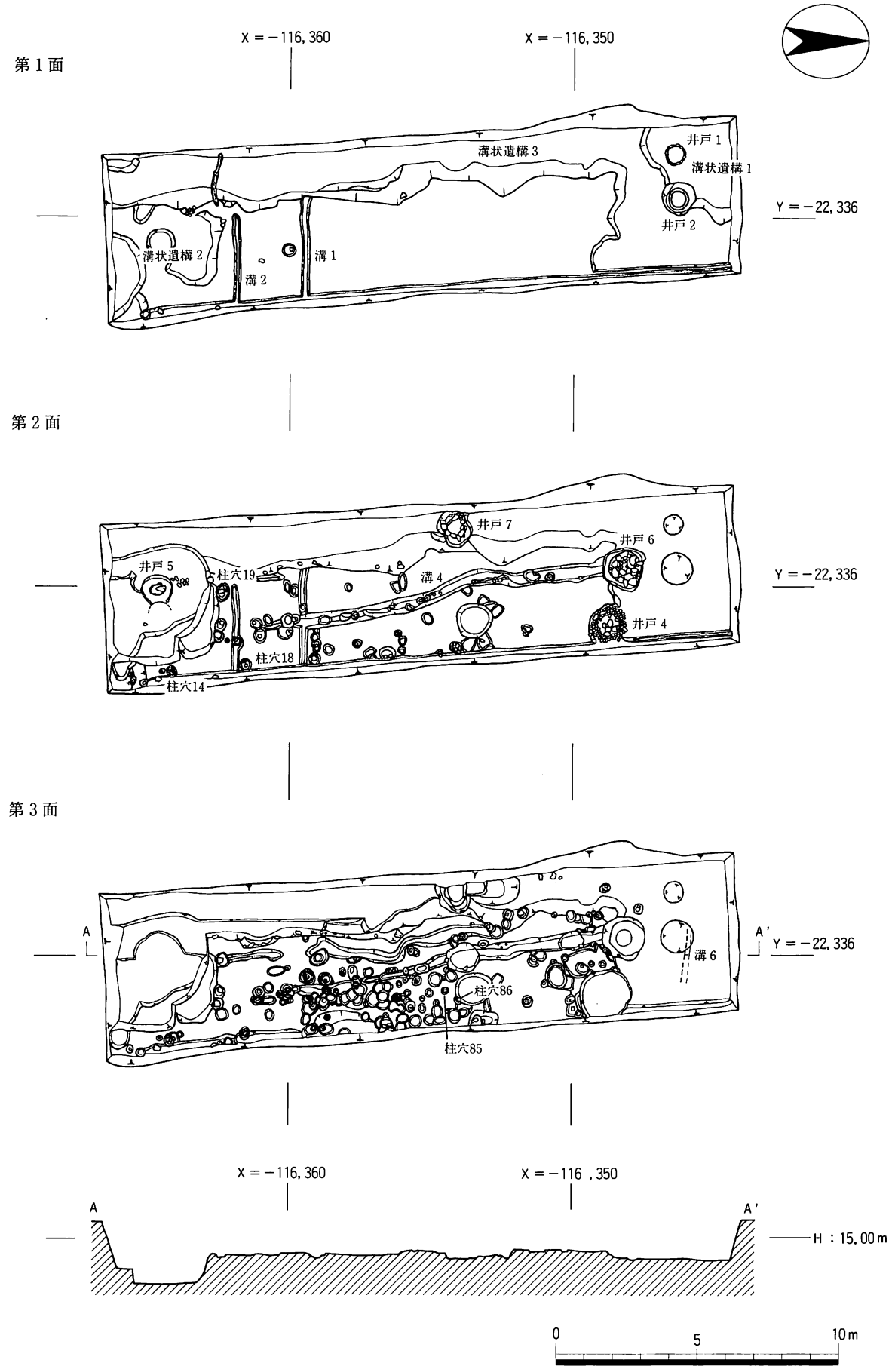
報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさがいほう
書名	京都市内遺跡発掘調査概報　平成13年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	南出俊彦・田中利津子・小森俊寛
編集機関	(財)京都市埋蔵文化財研究所
所在地	〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　TEL075-415-0521
発行機関	京都市文化市民局
所在地	〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　TEL075-222-3108
発行年月日	西暦2001年3月31日

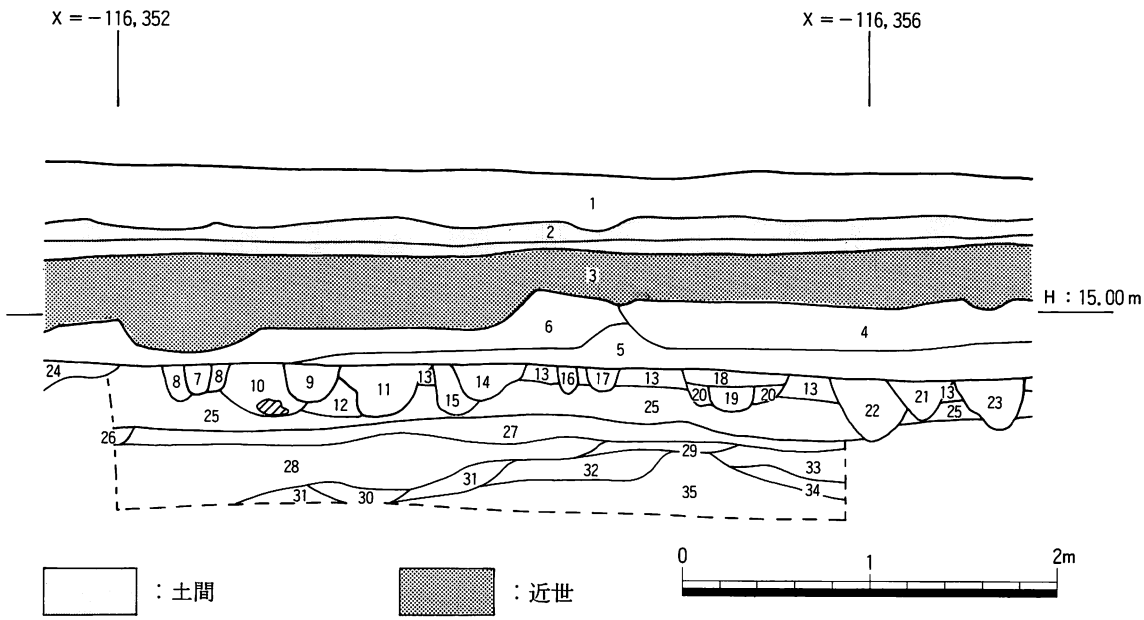
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鳥羽離宮跡 第144次	京都市伏見区竹田中内畑町4番地	26100		34度 57分 3.355秒	135度 45分 19.484秒	2001/1/10～ 3/16	121m²	マンション建設
平安宮宮内省跡	京都市上京区竹屋町通千本東入主税町1254	26100		35度 0分 46.812秒	135度 44分 58.953秒	2001/7/30～ 8/30	112m²	住宅建設
栢ノ杜遺跡	京都市伏見区醍醐柏森町31の1・31の3	26100		34度 56分 19.08秒	135度 49分 13.463秒	2001/10/30～ 12/21	431.25m²	遺跡確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥羽離宮跡	宮殿跡	平安時代 鎌倉・室町時代	溝・柱穴・井戸	土師器・瓦 土師器・施釉陶器・瓦	
平安宮宮内省跡	宮殿跡	平安時代 桃山・江戸時代	井戸・溝・土壙・整地層	土師器・須恵器・灰釉陶器 緑釉陶器壺・輸入白磁椀 瓦器・瓦類	
栢ノ杜遺跡	寺院跡	平安後期～鎌倉時代 桃山・江戸時代	整地層 整地層	土師器・輸入陶磁器 近世陶磁器	

図　　版



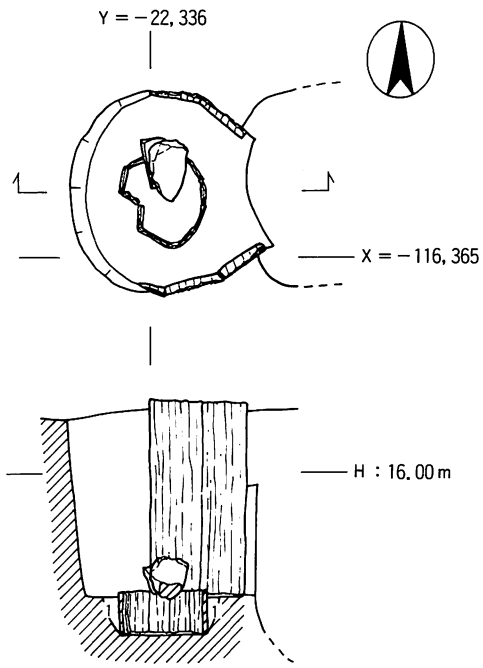
第1・2・3面遺構実測図（1：200）



1　現代盛土
2　土間入土
3　2.5Y4/2暗灰黄色砂泥　炭混
4　10YR4/1褐色泥砂（やや砂質）
5　10YR4/2褐色泥砂（1～6cmの礫を含む）
6　2.5Y5/2暗灰黄色泥砂＋10YR3/3暗褐色泥砂（やや粘質）
7　10YR3/1黒褐色砂泥　炭混（柱当り）
8　10YR3/1～3/2黒褐色砂泥　炭混（柱穴）
9　10YR3/2黒褐色粘質砂泥　砂混
10　2.5Y4/2暗灰黄色砂泥砂混（やや粘質）
11　10YR3/2黒褐色砂泥　炭・砂多量混（柱穴）
12　2.5Y4/1～4/2　暗灰黄色泥砂
13　2.5Y4/1黄灰色砂泥　土器微片混
14　2.5Y3/2黒褐色砂泥　炭・砂礫混
15　2.5Y4/1～3/1黒褐色砂泥（やや粘質）炭混
16　2.5Y4/1～3/1黒褐色粘質泥砂　炭混
17　2.5Y4/1～3/1黒褐色粘質砂泥　炭混
18　2.5Y4/1黄灰色粘質砂泥　炭混（柱穴）
19　2.5Y3/2黒褐色粘質泥砂　炭混（柱穴）
20　2.5Y4/1～3/1黄灰色粘質砂泥　炭混（柱穴）
21　2.5Y4/1～4/2　暗灰黄色砂泥　炭混（柱穴73）
22　10YR3/2黒褐色砂泥　炭混（柱穴174）
23　2.5Y4/1黄灰色砂泥　炭混（柱穴176）
24　2.5Y3/2黒褐色砂泥　炭混
25　2.5Y4/1黄灰色砂泥　土器片混
26　2.5Y4/3オリーブ褐色粘質砂泥
27　2.5Y5/1～5/2暗灰黄色粘質泥砂　砂礫少量混
28　10BG4/1暗青灰色粘土　炭混
29　2.5Y4/1～4/2暗灰黄色粘質泥砂
30　5B5/1青灰色粘土＋5B5/1青灰色微砂
31　5B5/1青灰色微砂
32　2.5Y4/1黄灰色砂
33　2.5Y5/3黄灰色シルト
34　2.5Y5/1～5/2暗灰黄色粘土
35　10BG4/1～3/1暗青灰色粘土　炭混

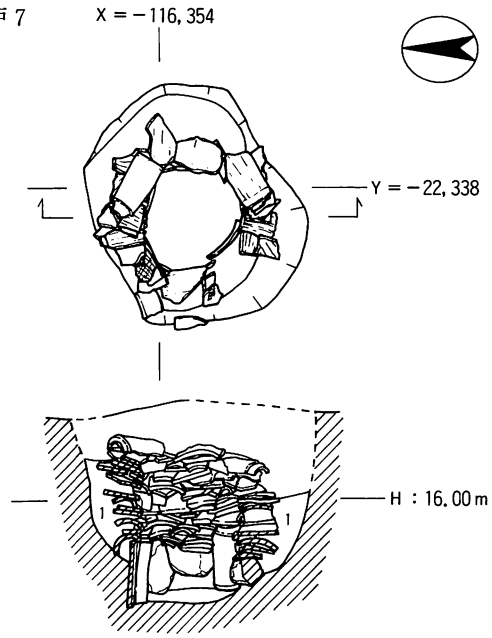
調査区東壁層位実測図（1：40）

井戸5



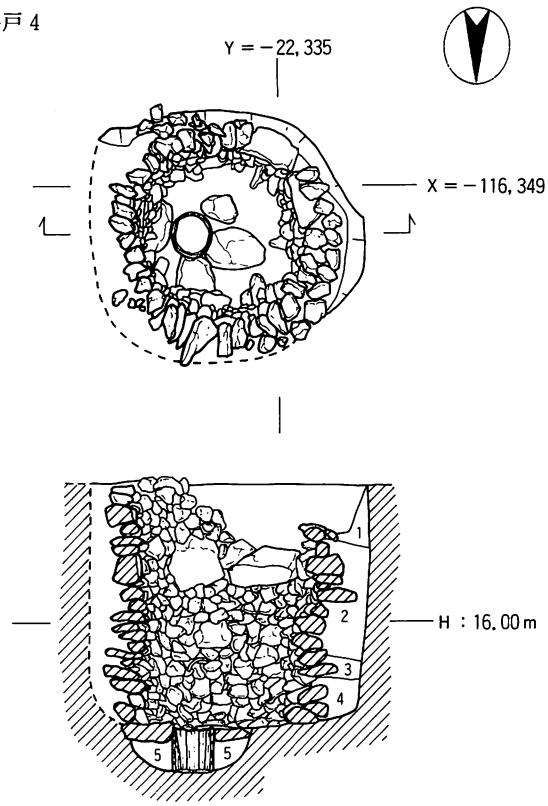
1　砂礫

井戸7



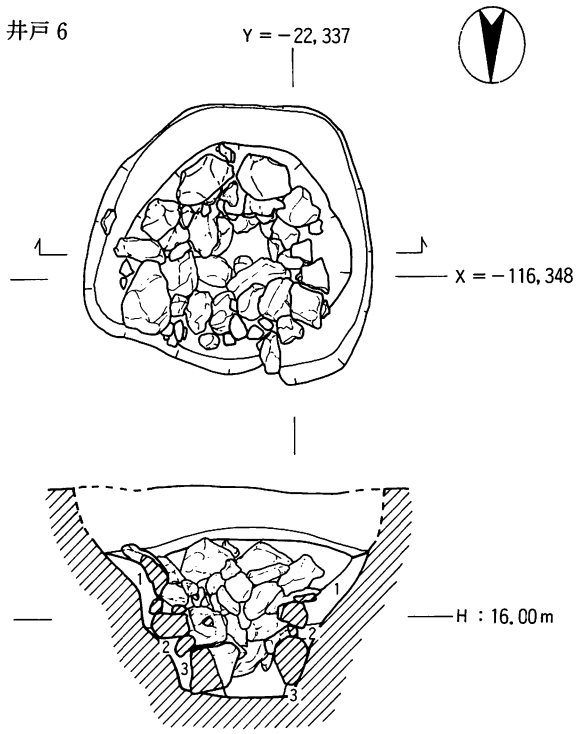
1　2.5Y3/2黒褐色粘土＋5B4/1暗青灰色粘質泥砂

井戸4

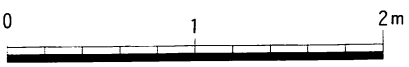


1　2.5Y4/2暗灰黄色砂礫＋5GB4/1暗青灰色粘土
2　10YR4/1灰色粘土（7.5Y4/2灰オリーブ色泥砂混）
3　10YR4/1灰色泥土
4　7.5Y4/1灰色粘質泥砂＋10BG暗青灰色粘土
5　10GB暗青灰色粘土

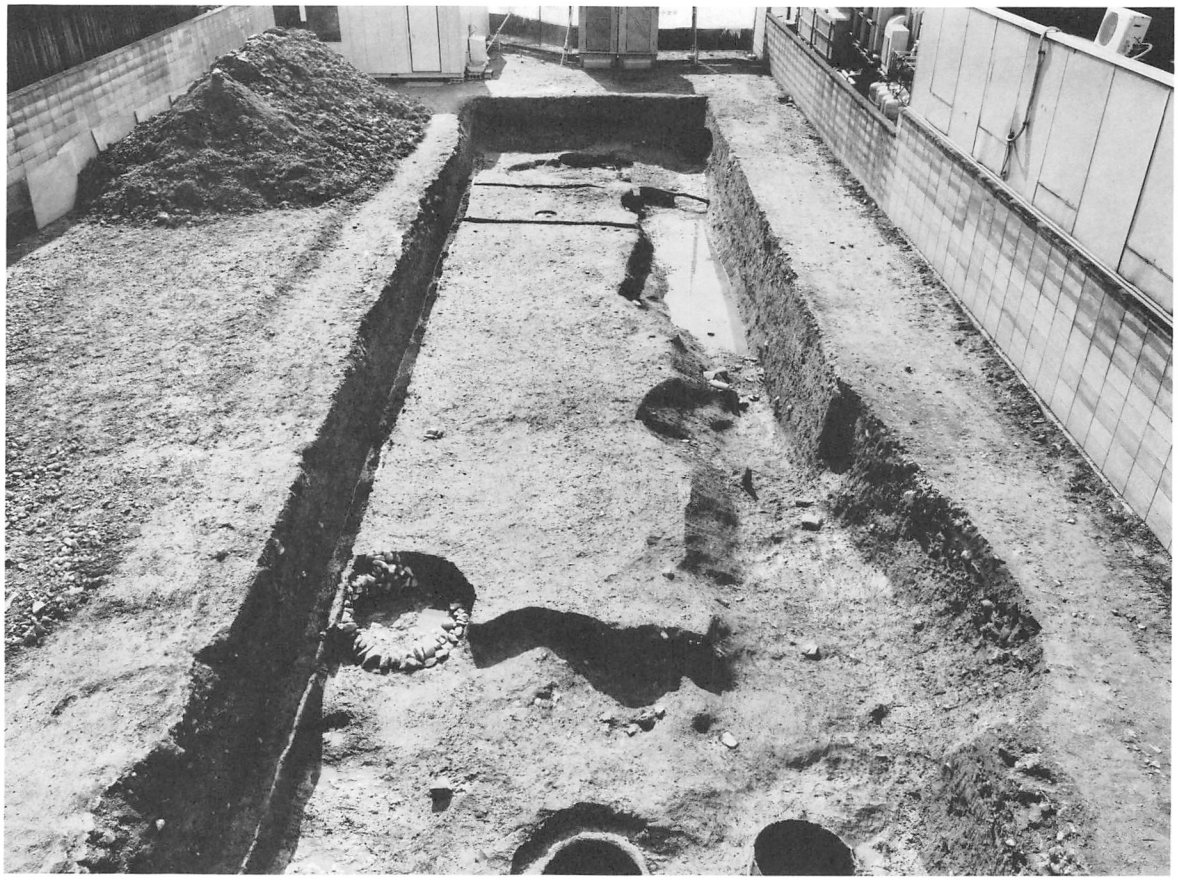
井戸6



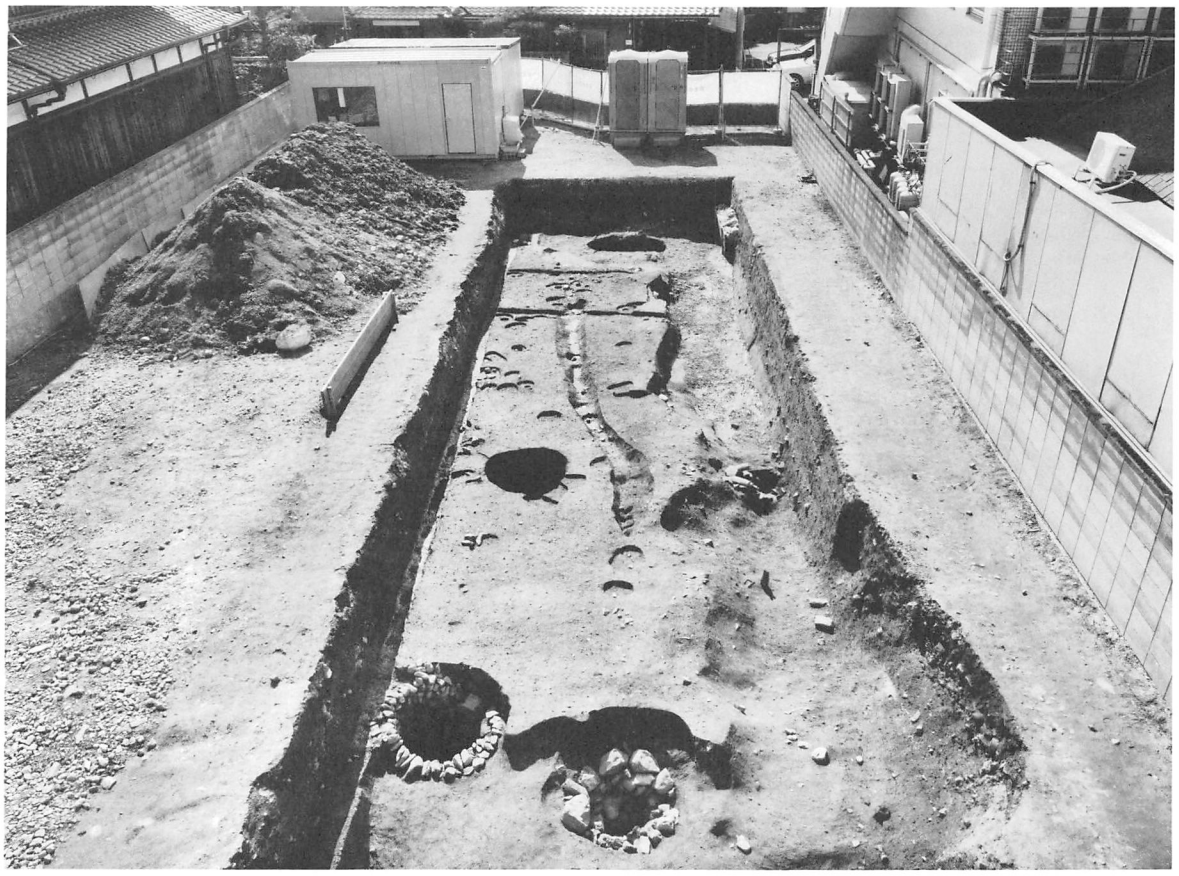
1　5GY1/4暗オリーブ灰色泥土
2　7.5GY1/4暗オリーブ灰色微砂
3　7.5Y1/3オリーブ黒色泥土



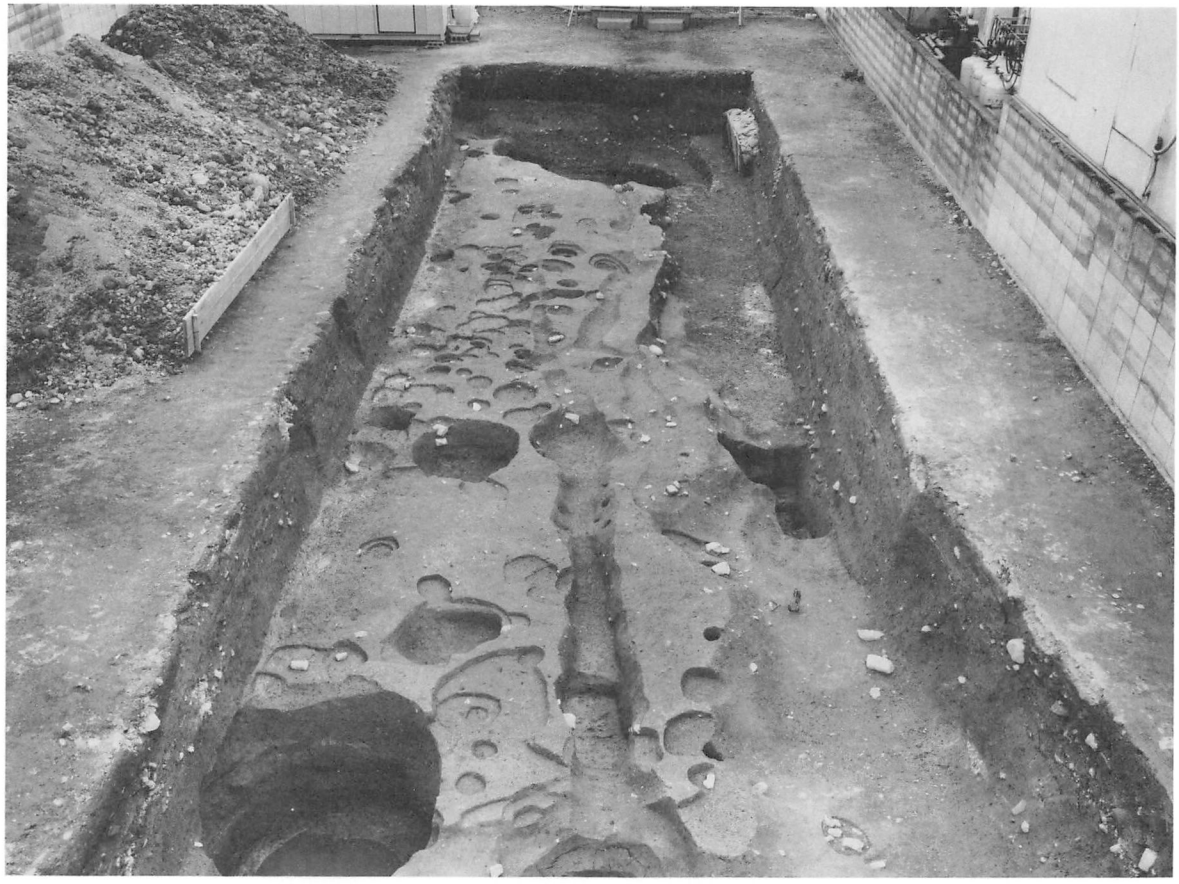
井戸4～7　平面・立面実測図（1：40）



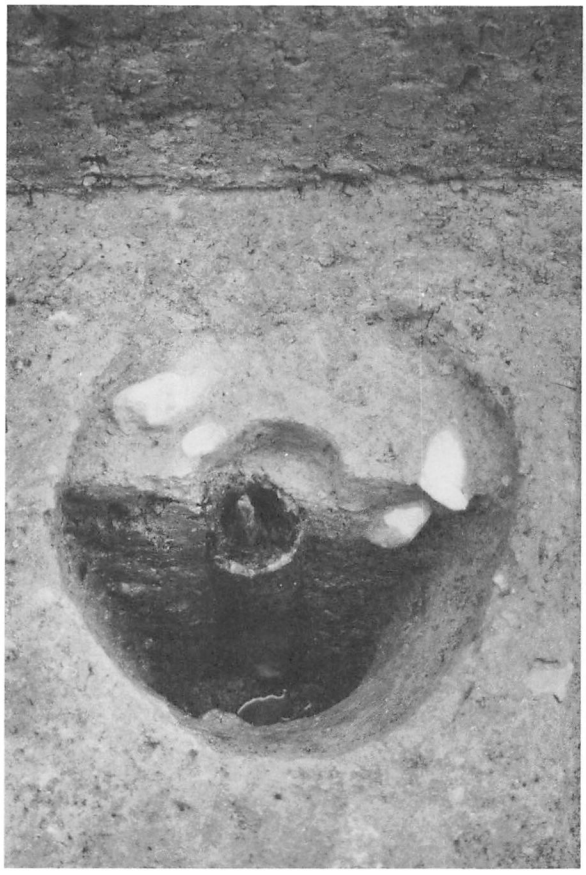
1　第1面（北から）



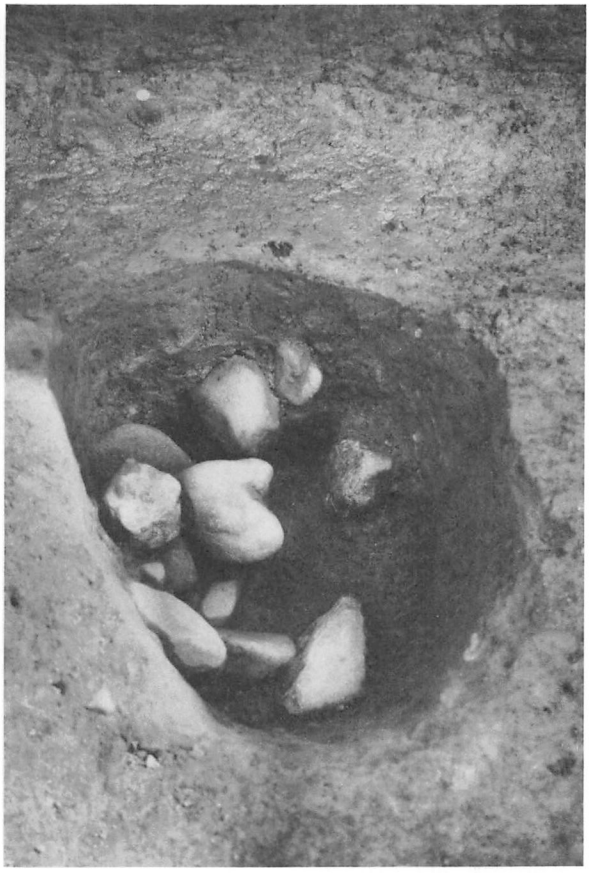
2　第2面（北から）



1　第3面（北から）

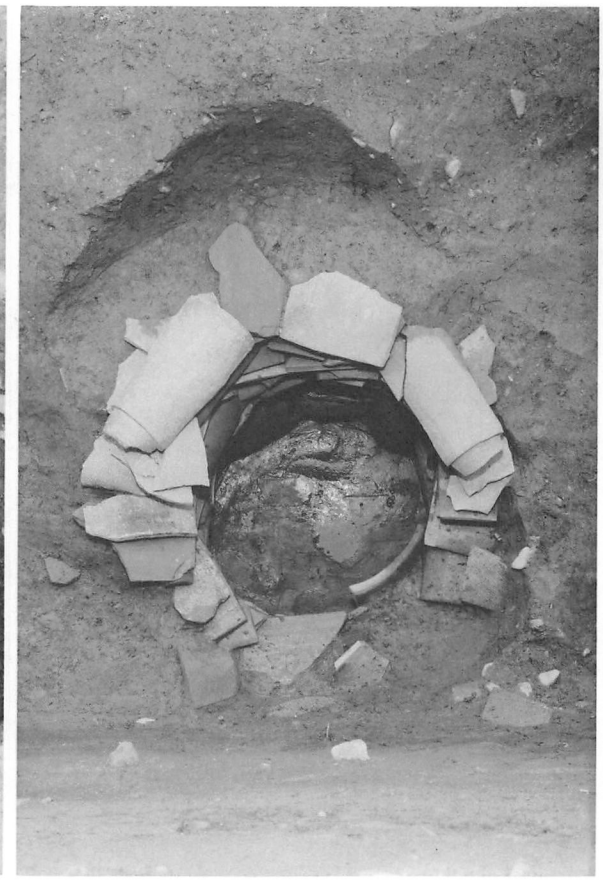


2　第2面柱穴18柱根検出状況（西から）



3　第2面柱穴14根石検出状況（西から）

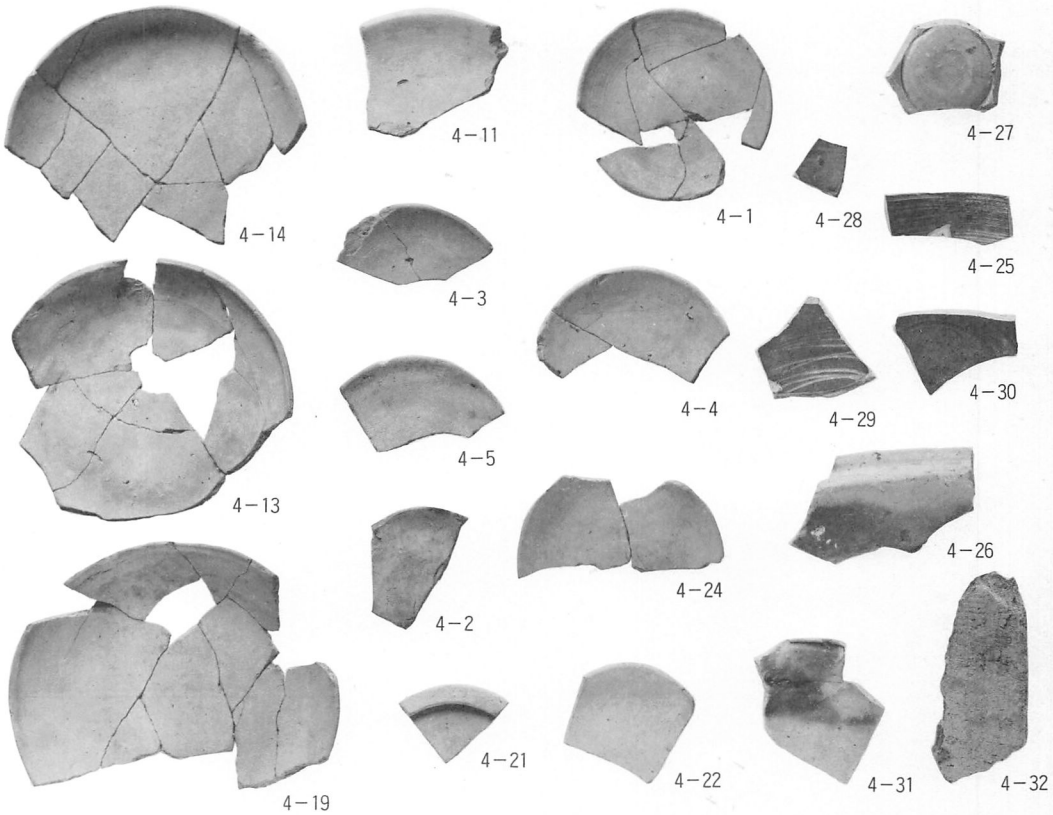
1　井戸5（北から）



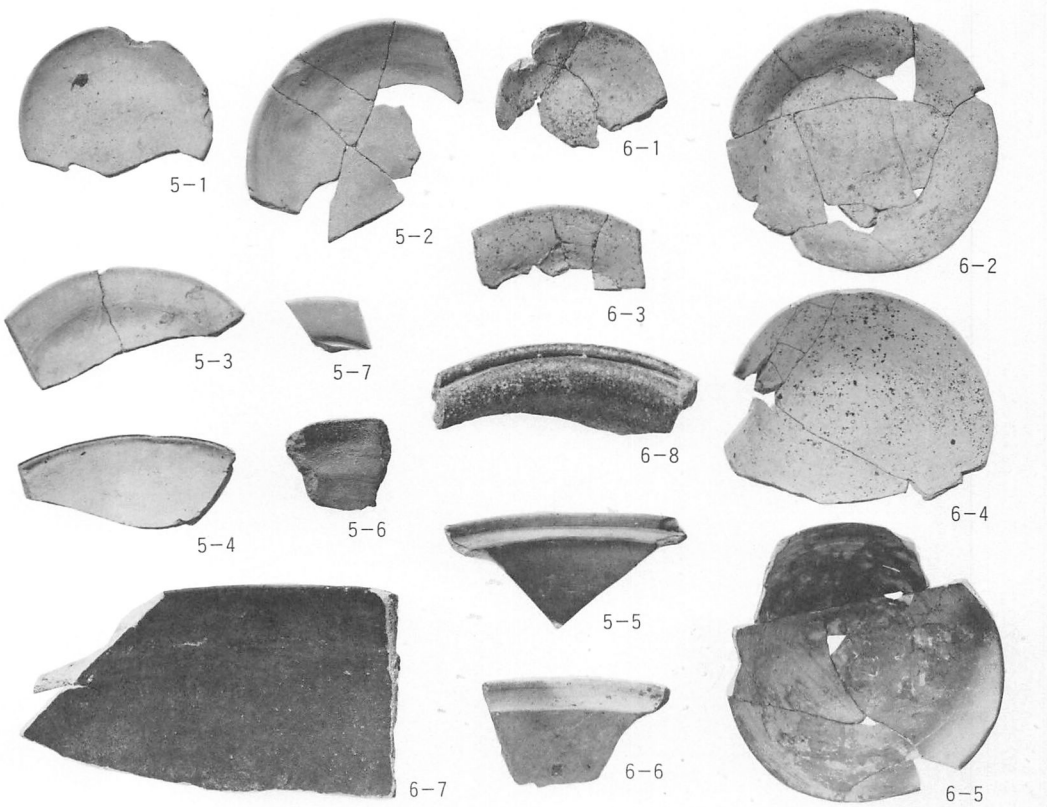
2　井戸7（西から）

3　井戸4（東から）

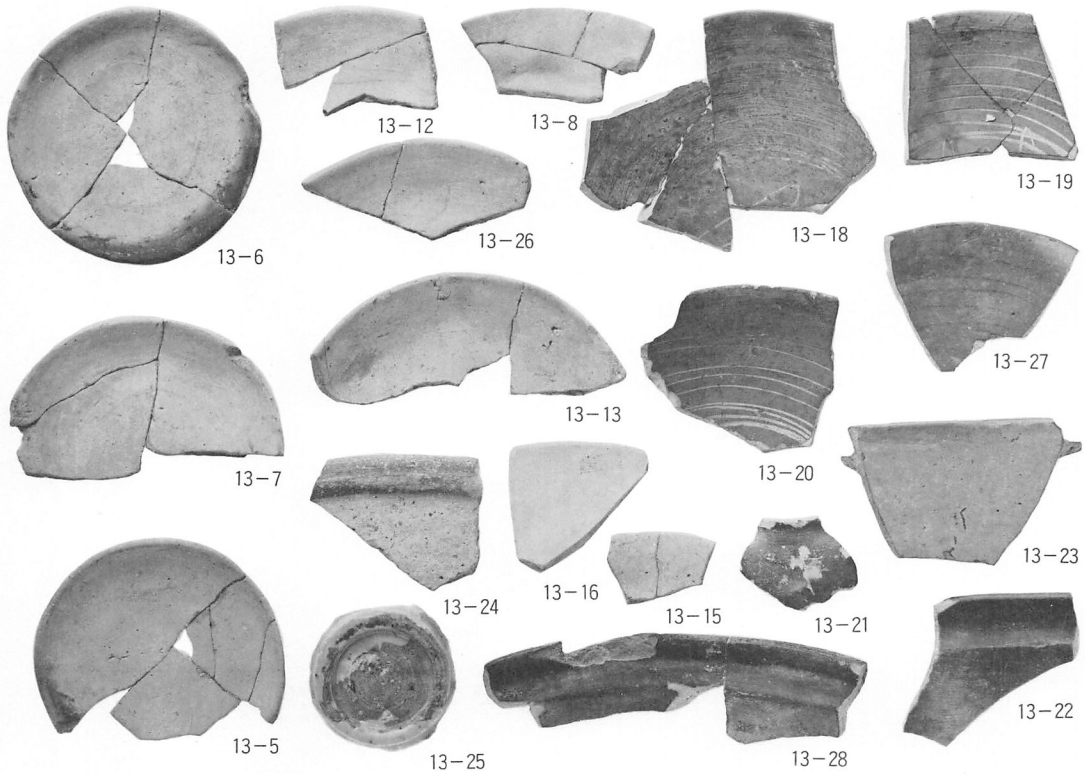
4　井戸6（西から）



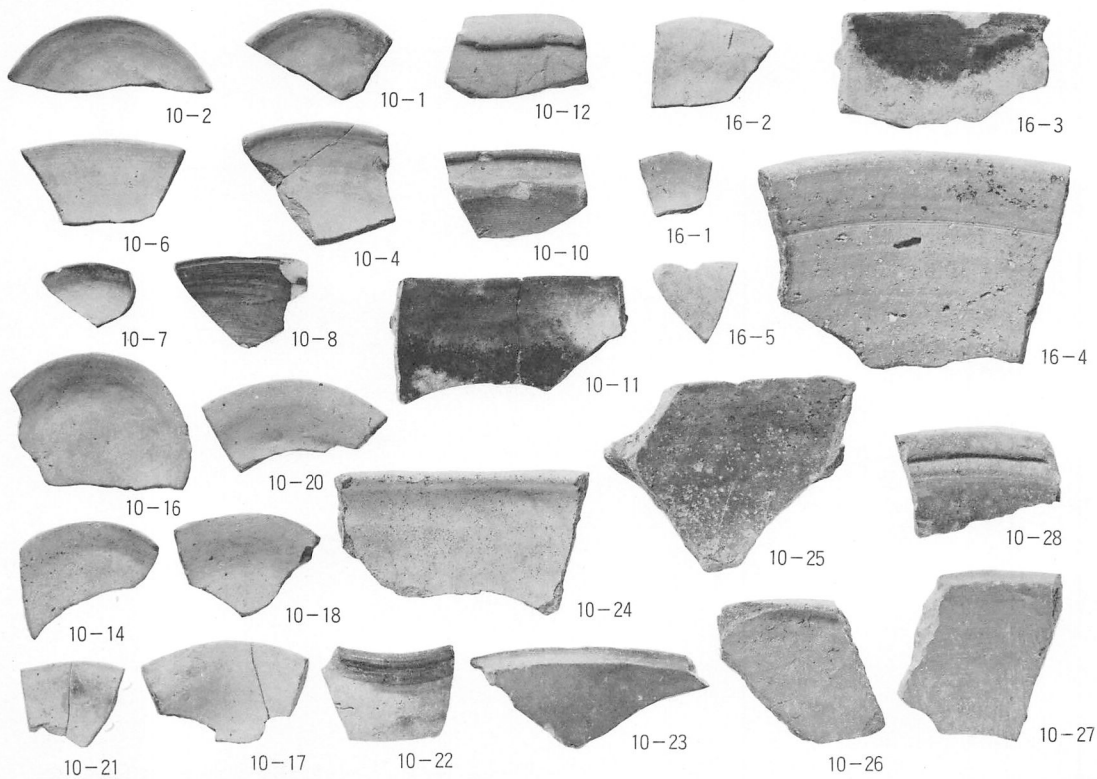
1　溝6出土土器・陶磁器



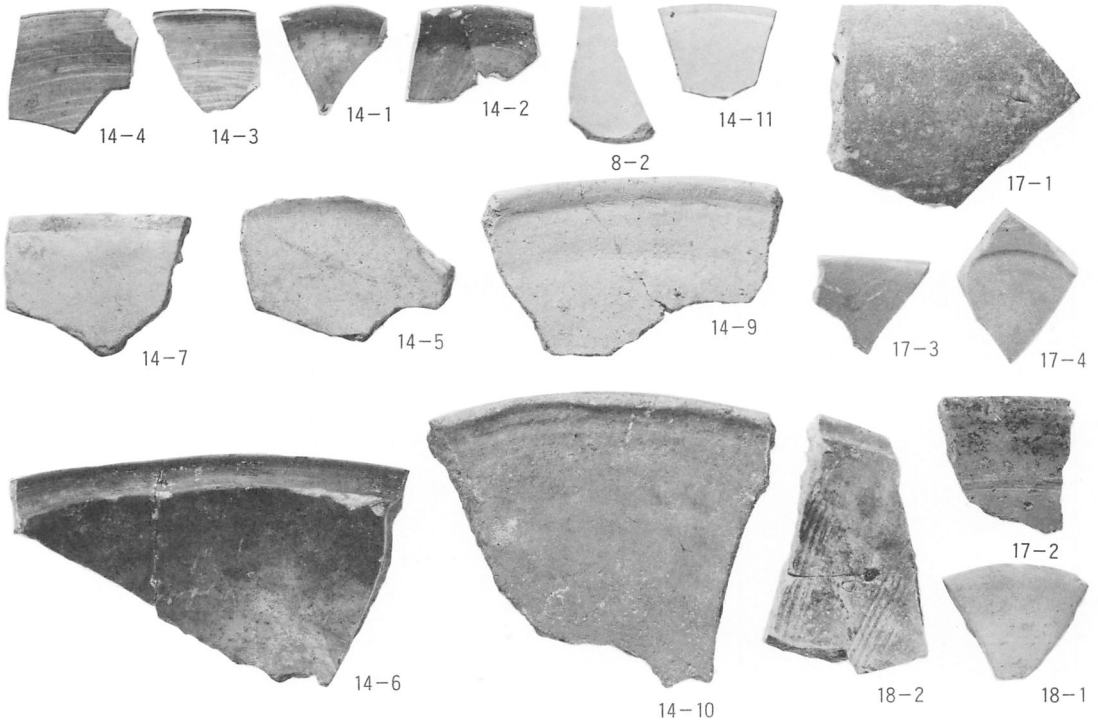
2　溝4出土土器・陶磁器



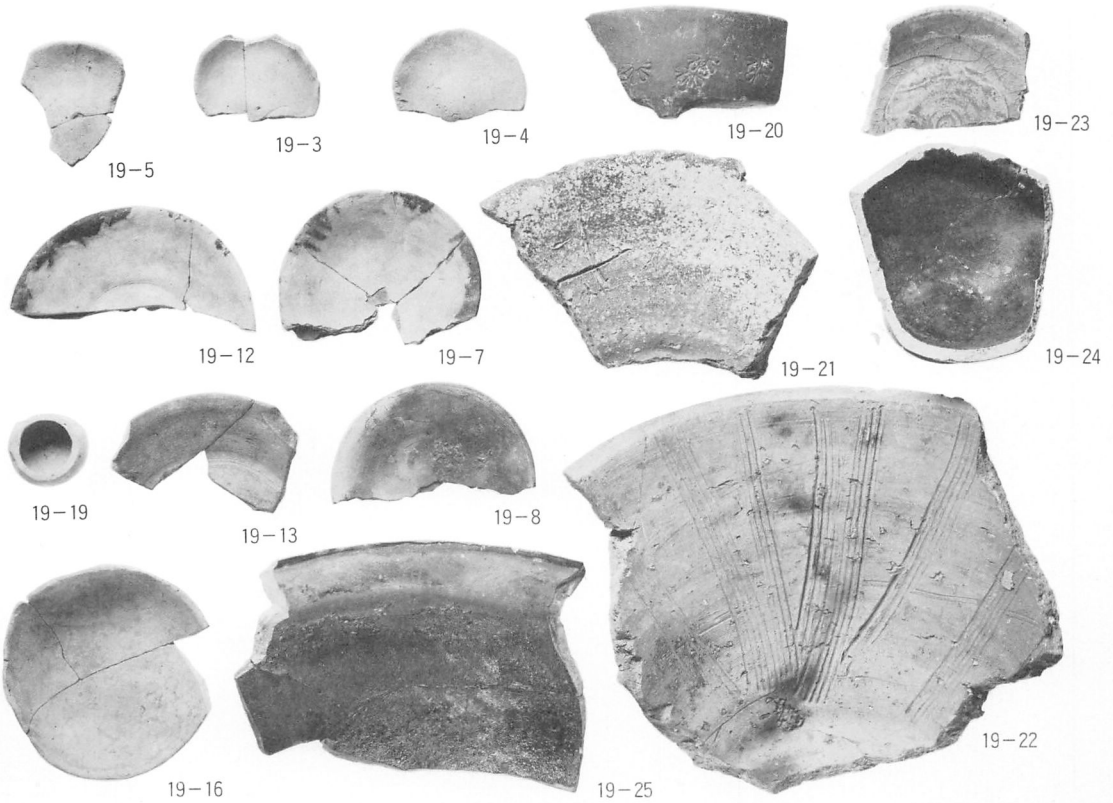
1　溝状遺構１出土土器・陶磁器



2　溝状遺構１出土土器・陶磁器



1　溝状遺構1出土土器・陶磁器



2　溝状遺構3出土土器・陶磁器

1

2

5

6

8

3

7

4

出土軒丸瓦

9

15

11

12

14

19

10

21

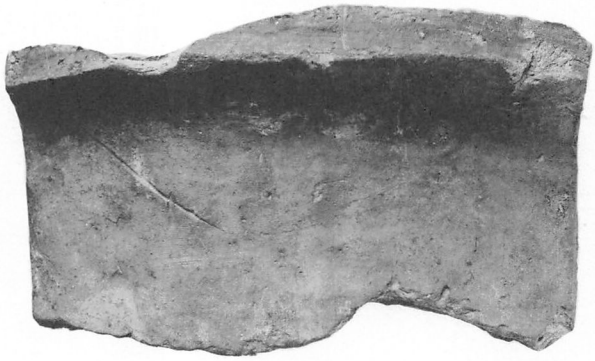
出土軒平瓦

17

16

18

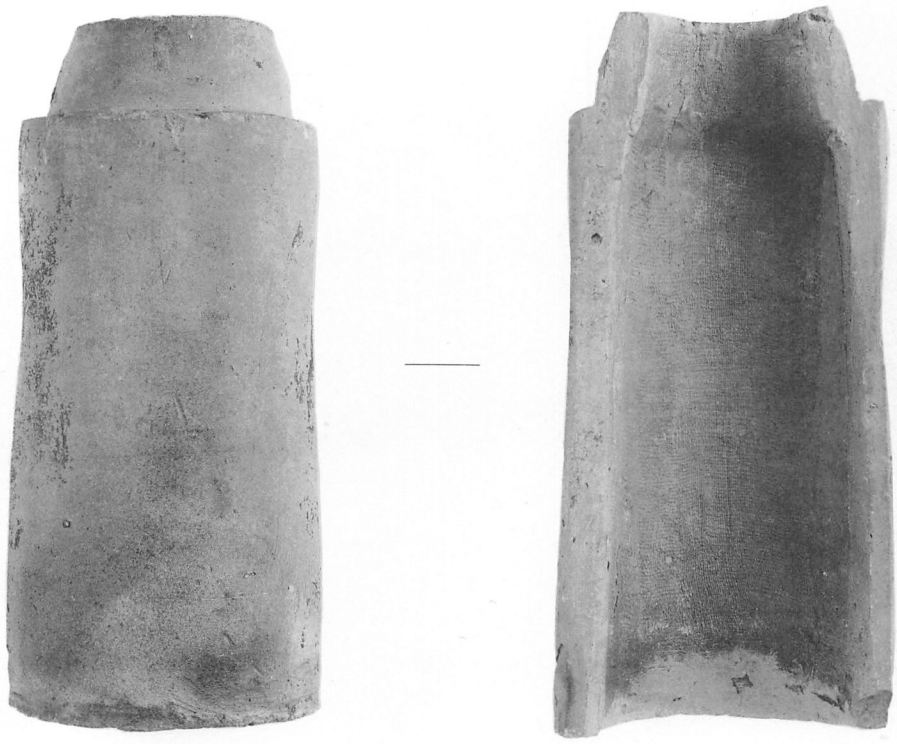
21



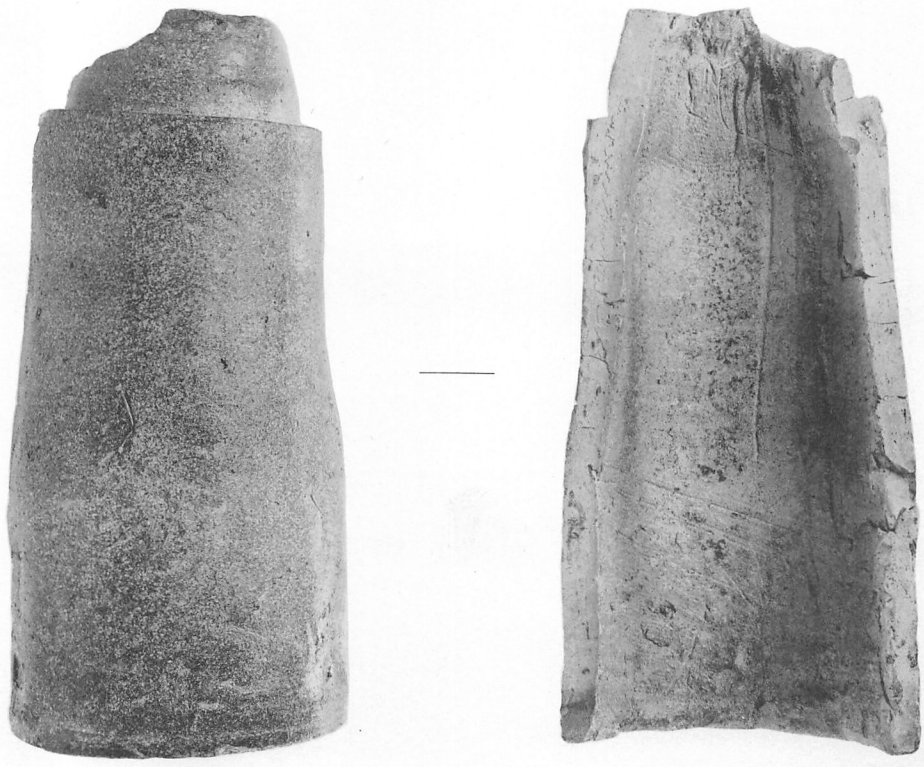
22

20

出土軒平瓦



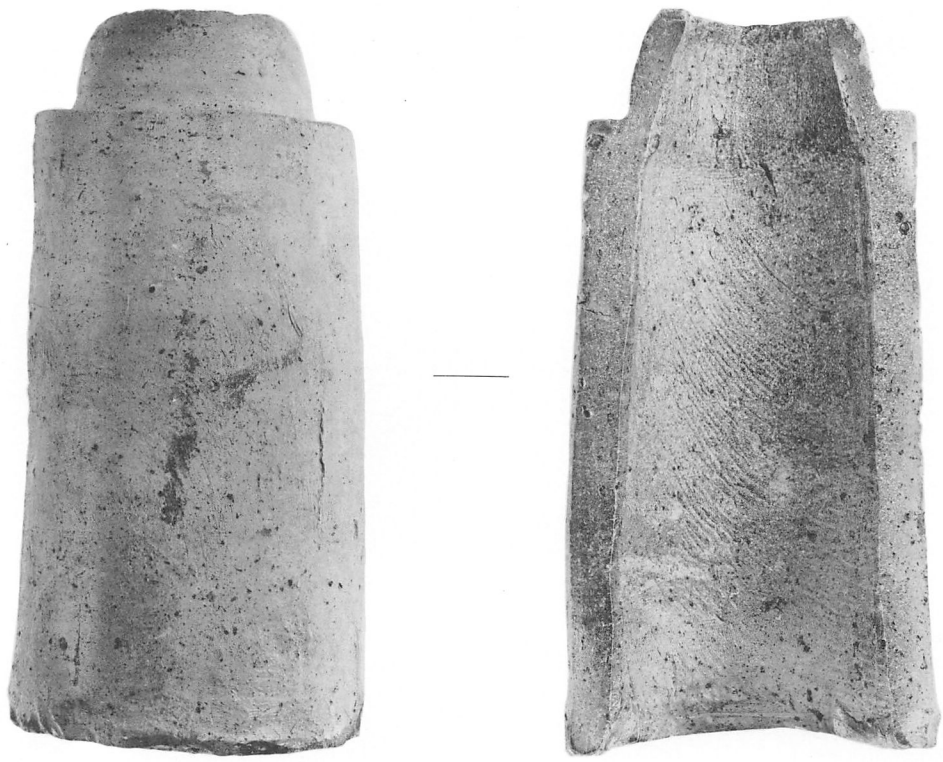
1



2

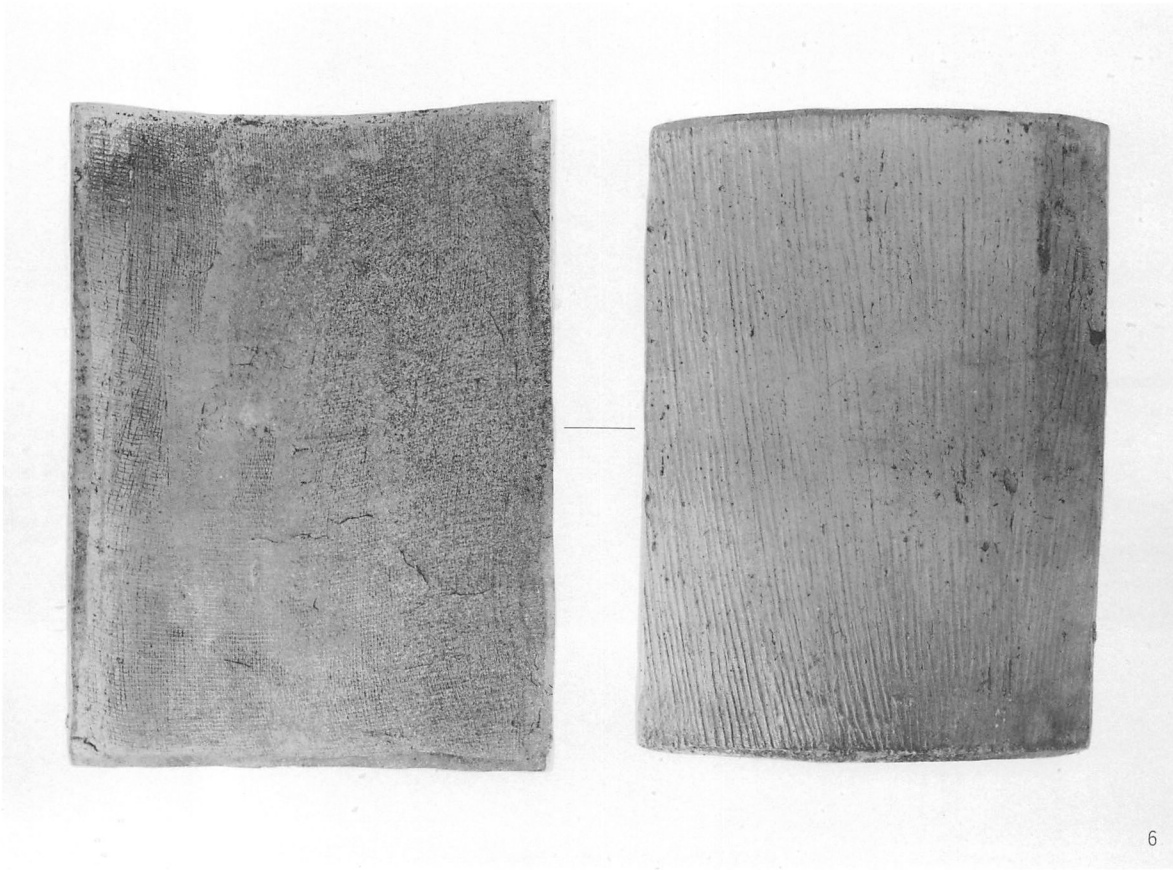
出土丸瓦

3

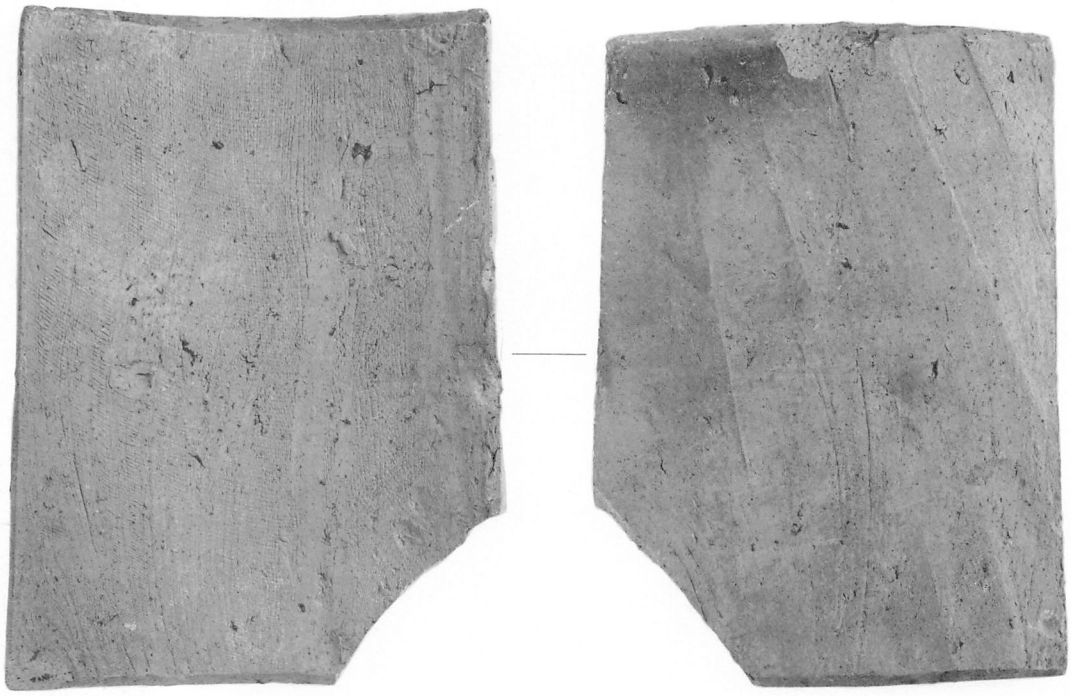


4

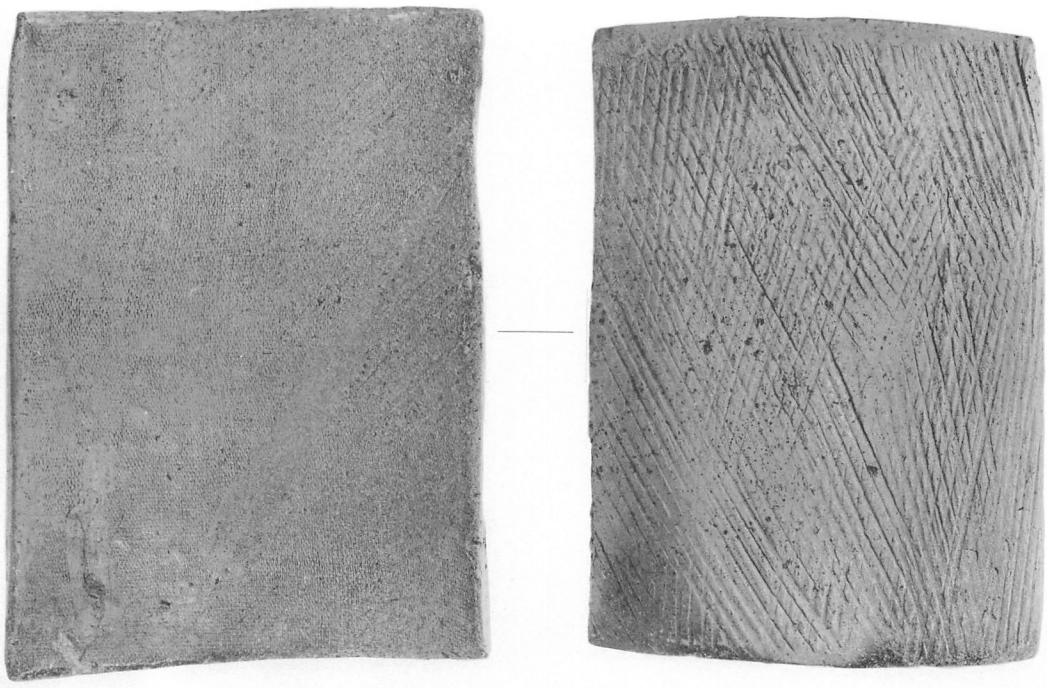
出土丸瓦



出土平瓦



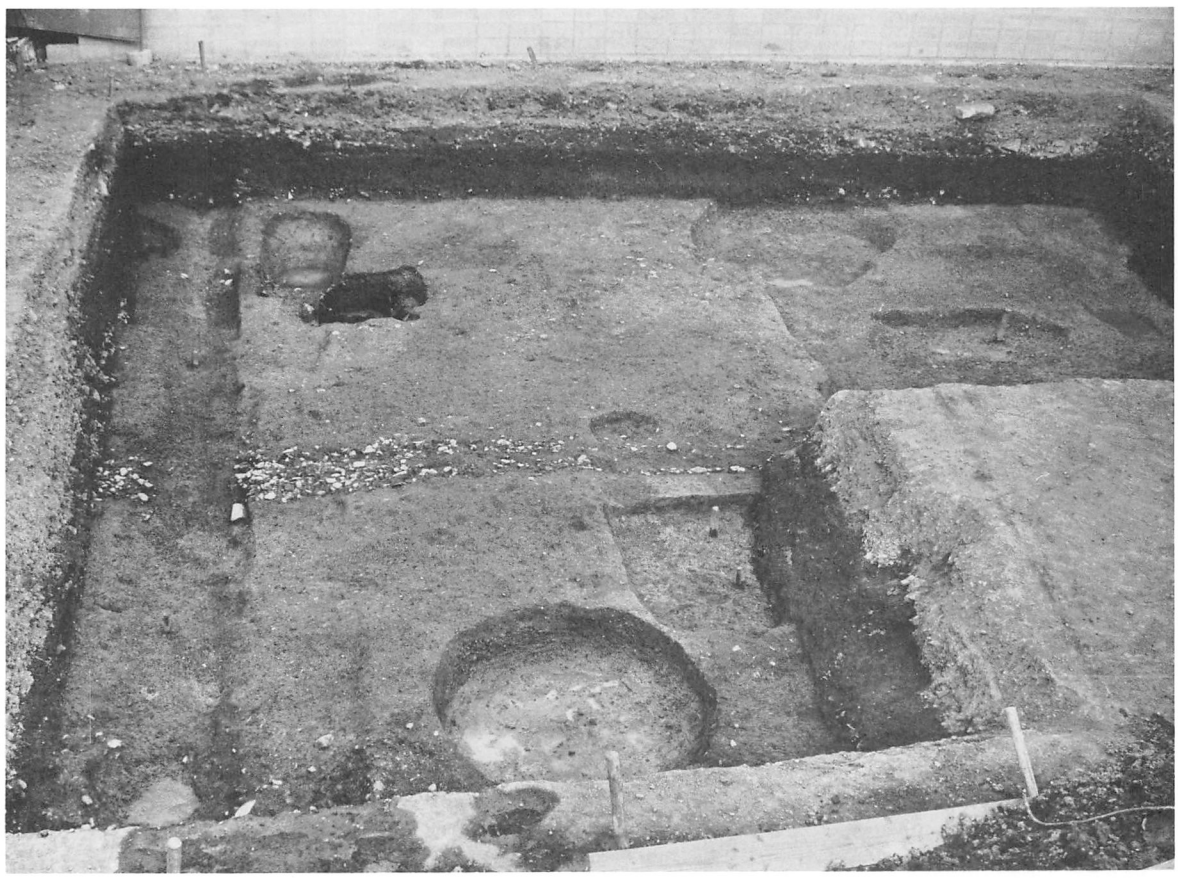
7



8

出土平瓦

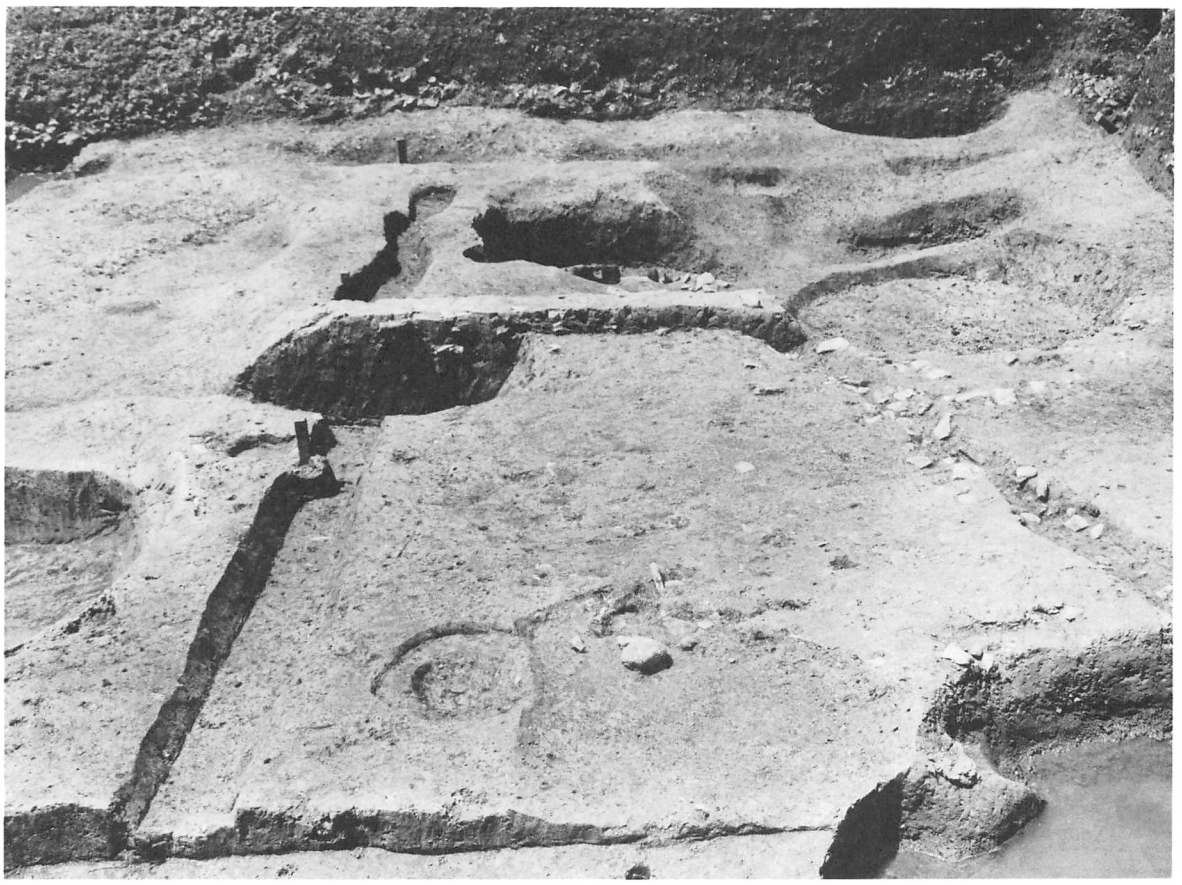
1　調査前風景（北から）



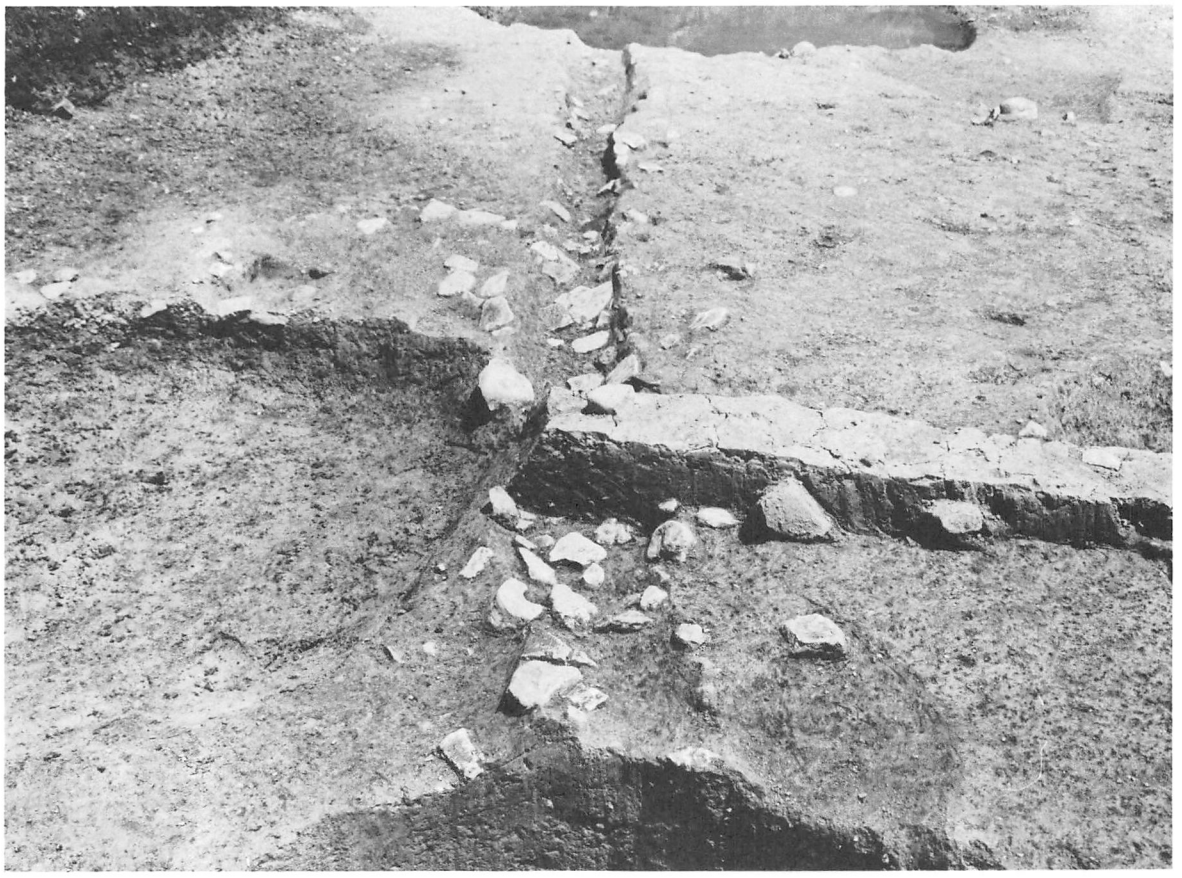
2　第１面全景（南から）

1　第2面全景（北東から）

2　平安時代後期整地層（東から）



1　第3面全景（東から）



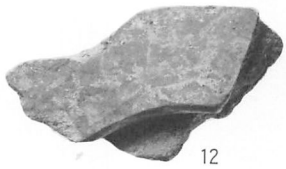
2　溝17（南西から）

1

2

3

5



12

18

14

16

19

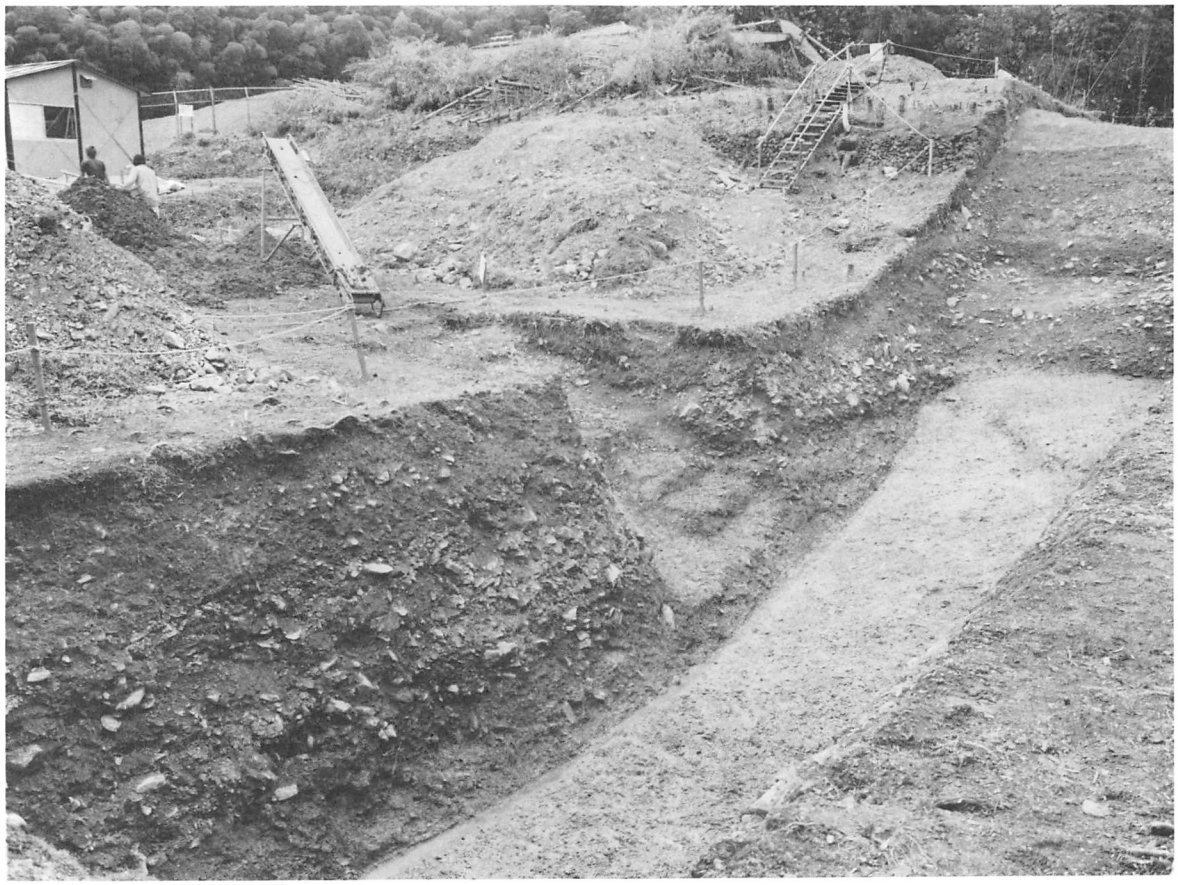
13

15

出土軒瓦・鬼瓦

1　全景東半（北東から）

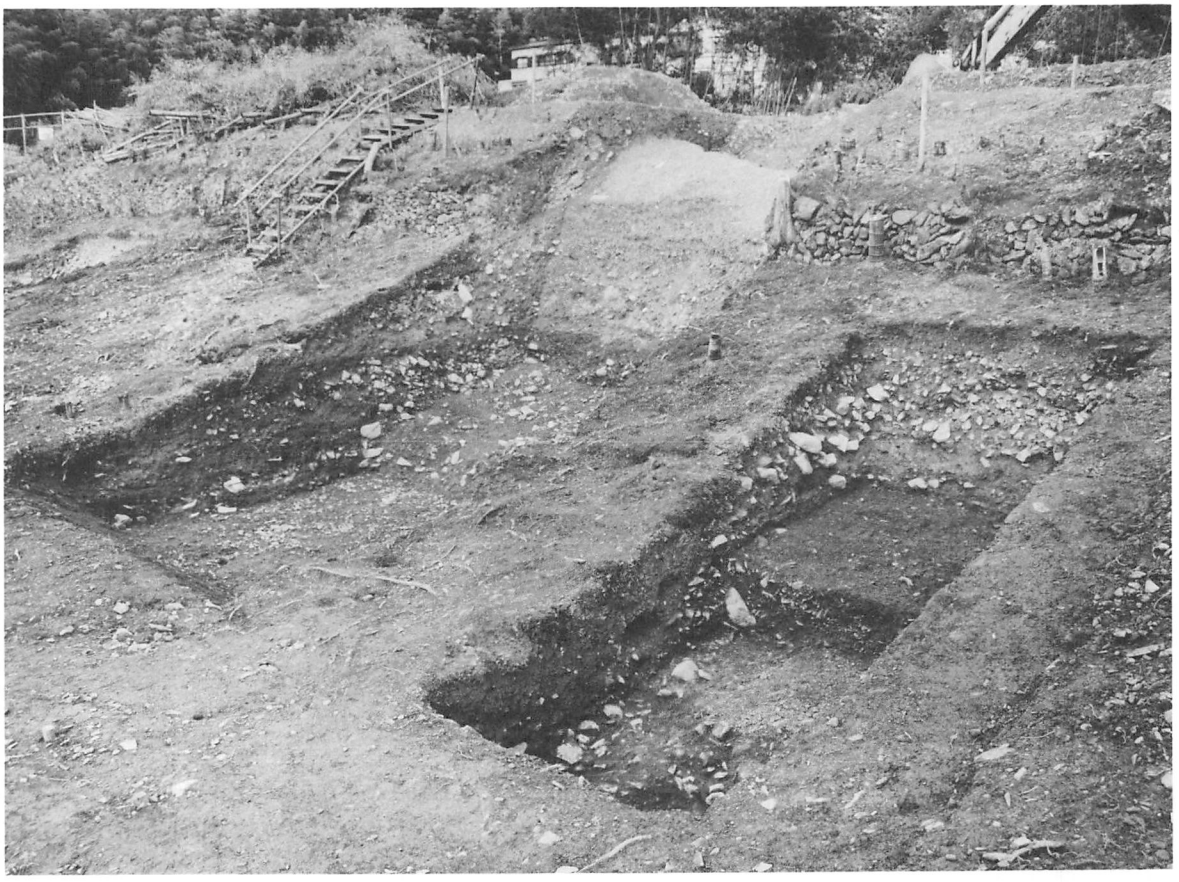
2　全景西半（西北から）



1　東西トレンチ下段部全景（西南から）

2　東西トレンチ下段部東半　南壁（北から）

1　下段　北グリッド全景（南南西から）



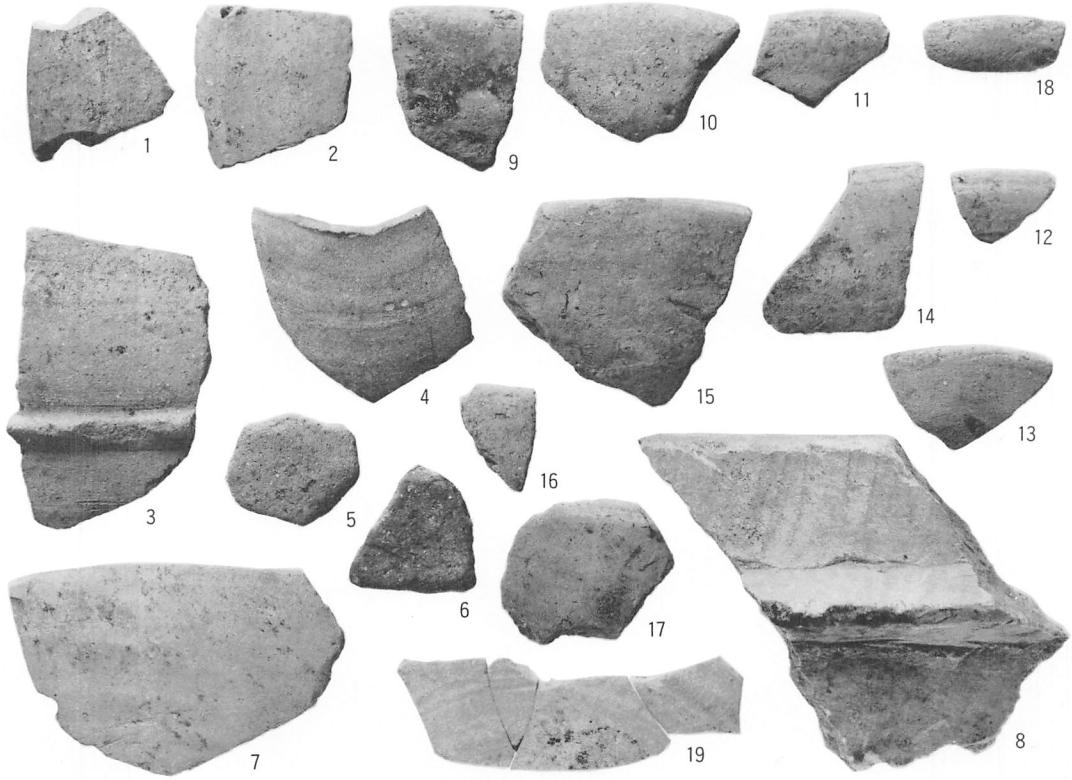
2　下段　南グリッド全景（南西から）

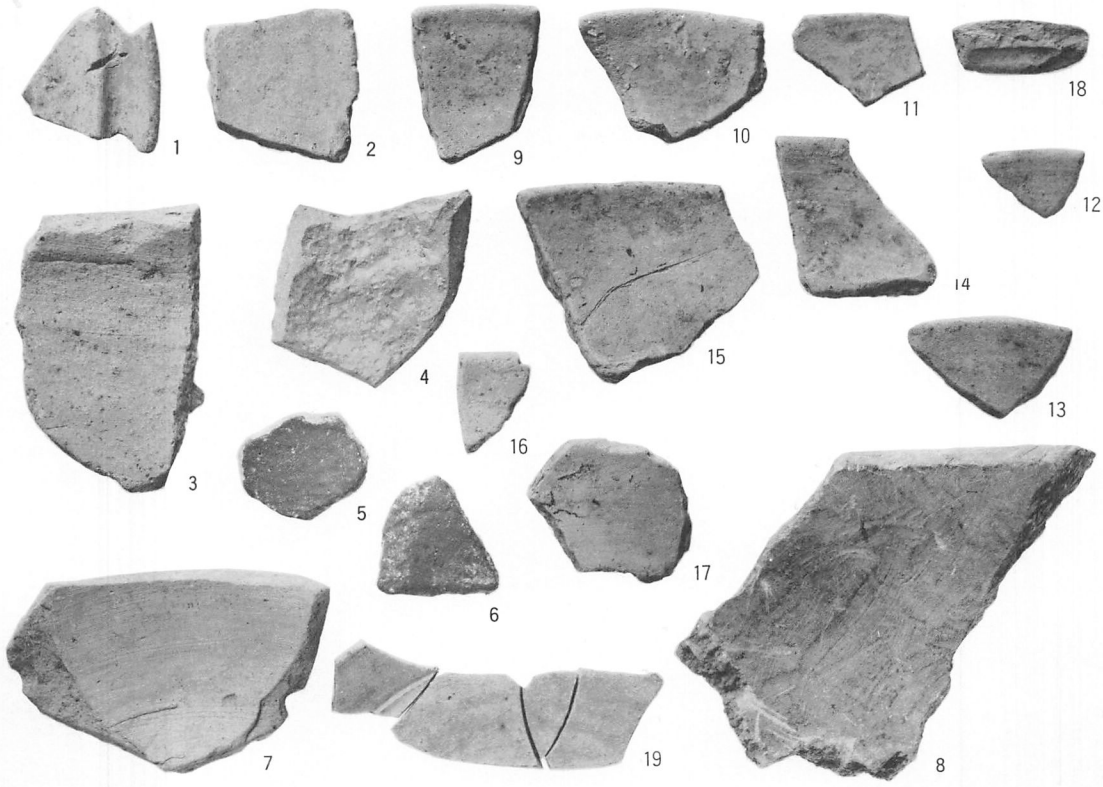
1　上段　南北トレンチ南部（北北西から）

2　上段　南北トレンチ全景（北から）

1　上段　南北トレンチ北部　東拡張区全景（北から）

2　東西トレンチ上段部（東北東から）


1
2
9
10
11
18
12
14
3
4
15
13
16
5
6
17
7
19
8


1
2
9
10
11
18
12
14
3
4
15
13
16
5
6
17
7
19
8

出土遺物

京都市内遺跡発掘調査概報

平成13年度

発行日　2002年３月31日

発　行　京都市文化市民局

住　所　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488

編　集　㈶京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1

TEL（075）415-0521

印　刷　真　陽　社